

2018 年度 近畿 E S D コンソーシアム

集まれ！ E S D 子ども広場

活動報告書



第1回集まれ！ E S D 子ども広場

「ならまちの町家」

～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～

2018 年 5 月 27 日



第2回集まれ！ E S D 子ども広場

「灯す」

～あなたの心に、私の心に～

2018 年 12 月 2 日

2019 年 3 月

国立大学法人奈良教育大学

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の
養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

は じ め に



奈良教育大学は教員になる人を養成する大学です。3月31日まで学生であった人が、4月1日には一人前の先生になっているわけです。びっくりです。私自身のことを振り返ってみますと、一般大学を卒業した後、当時、奈良県立大学の隣にあった奈良県立小学校教員養成所に一年間通いました。大学卒業後に小学校の教員として赴任する前に1年間の猶予期間のようなものがあり、その間に教員としての自覚と力量を養はずだったのですが、そういう風にはなりません。学生気分が抜けないうちに、十津川村の全校児童7名の学校に着任してしまいました。

いくら教育大学で4年間学んでいても学生と教員は全く違います。まず授業に対する姿勢が違います。学生と教員は同じ授業時間を共有しています。昨今はアクティブラーニングということで、参加型の授業が展開されていますので、学生も積極的に授業に参加することが求められていますが、教員は、児童生徒の実態を十分に把握した上で、積極的に授業を構想し、教材を準備し、児童生徒がアクティブに参加できるように授業を運営していますので、もともと積極的です。同じ時間を共有しつつも内容が全く違うことに、教員になって初めて気が付くのが普通です。

この授業者としての経験を学生の間にもしてもらうことで、教員への志望が高まり、学習意欲も高まると考え、「ESD子どもキャンプ」をこれまでに6回実施してきました。夏休み期間中に近隣のユネスコスクールの児童生徒を募集し、キャンパス内にテントを設営して1泊2日の野外活動を実施します。キャンプファイヤーやフィールドワークなど、学生が中心になって企画・運営し、児童生徒・学生が共にESDを体験的に学ぶ機会としていました。スタッフとして参加する学生は、学習内容の吟味、予想される児童生徒の反応・行動を考え、関連施設とも連携し、不測の事故への予防策を練り、キャンプファイヤーでのゲームやテント設営の練習を入念に行うなど、1泊2日のキャンプをネタに、教員として求められる様々な学びを体験してきました。いい活動だったと思います。しかし、温暖化の影響なのでしょうか。最近の夏は暑すぎます。メディアでは「危険な暑さ」が叫ばれ、熱中症対策が全国的に求められるようになりました。そこで、2018年度からは、「集まれ！ESD子ども広場」として、リニューアルしています。

キャンプこそしませんが、ESDを体験的に学ぶ機会とするべく、学生たちが話し合いを重ねて実施してくれています。そこでの苦勞と学びはESD子どもキャンプと変わりません。スタッフとして参加してくれた学生が、よい授業実践者として、また児童生徒・保護者の信頼を得る教員に育ってくれることを期待しています。

最後になりましたが、2回にわたる「集まれ！ESD子ども広場」の開催にご協力くださいましたみなさま、参加してくれた児童生徒のみなさま、本当にありがとうございました。

近畿ESDコンソーシアム事務局長
奈良教育大学ユネスコクラブ顧問 中澤 静男

近畿ESDコンソーシアム

第1回「集まれ！ESD子ども広場」開催報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

1. 目的

奈良教育大学では、『地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』の一環で、大学キャンパスや奈良町、奈良公園を会場に、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生を対象としたESDを体験的に学ぶ、1泊2日の宿泊活動として、平成24年度から「ESD子どもキャンプ」を実施してきた。また、平成26年度からは日本ユネスコ国内委員会のグローバル人材の育成に向けたESDの推進事業を受託して設立したコンソーシアムの事業の一つとして継続実施してきており、これまでに6回開催している。

平成30年度は、「奈良ASPネットワーク「集まれ！ESD子ども広場」」として、日帰りでESDを体験的に学ぶイベントを実施する。5月と12月に開催を予定しているが、年度内に複数回行うことで、様々なテーマにチャレンジすることができ、ESDの学びの幅が広がると考えている。さらに、子どもと関わる機会が増えることで、教員を志望する学生にとっても学びが多くあると考える。本イベントの主たる目的は次の二つである。

- (1) ESD（持続可能な開発のための教育）を楽しく体験的に学び合う。
- (2) 子どもと関わる活動を通して、教員を目指す上で必要な資質・能力を身につける。

2. 開催日 平成30年5月27日（日）

3. 開催場所 奈良教育大学キャンパス及びその周辺地域（奈良町）

4. 参加者 小学生 10人（奈良市内の小中学校より）
大学生・大学院生 29人
教職員 17人（大学・近隣の小中学校等より）

5. テーマ 「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」

6. 日程

時間	活動
8:30	参加者受付開始
9:00～10:00	オリエンテーション ○アイスブレイキング ○班活動の時間 ○テーマソング練習
10:15～13:15	テーマ別フィールドワーク「ならまちタイムトラベラー」
13:15～14:00	昼食
14:00～14:15	集合写真撮影
14:15～14:45	振り返り発表会準備
14:45～15:30	振り返り発表会
15:30～16:00	ESD勉強会
16:00～16:45	さよならの集い

16 : 45	解散
---------	----

7. 参加学生の役割分担

(事前準備)

(企画班)

◎ : 代表 ○ : 副代表

実行委員会	◎丸本	仲村	糸	谷垣	仲村	櫛	谷内
オリエンテーション	◎種瀬	○北中	森本	坂本	藤井り		
テーマ別フィールドワーク	◎下原	木村	佐野	田中	高田	守部	

(当日)

◎ : 代表

運営班スタッフ		◎丸本	仲村	糸	櫛	谷垣	下原	谷内
		野瀬	山本	中田	義根			
活動班リーダー	1班	◎北中	谷村	高田	足立	部谷		
	2班	◎守部	森本	坂本	西條	堀田		
	3班	◎種瀬	佐野	藤井り	後藤	桑田		

(当日)

◎ : 代表

運営班スタッフ		◎丸本	仲村	糸	櫛	谷垣	下原	谷内
		野瀬	山本	中田	義根			
活動班リーダー	1班	◎北中	谷村	高田	足立	部谷		
	2班	◎守部	森本	坂本	西條	堀田		
	3班	◎種瀬	佐野	藤井り	後藤	桑田		

8. 活動の概要

(1) オリエンテーション

オリエンテーションは、1日の始まりに位置する。初めて出会う友だちや学生と1日過ごすため、ほとんどの子どもがとても緊張しており、その緊張をほぐすアイスブレイキングをして全体的な雰囲気作りを行った。他にも1日の活動の見通しを立て、今日1日を楽しみに思ってもらうように構成した。反省点としては、ゲーム自体はわかりやすかったが、ゲームの内容的に子どもの緊張を完全にほぐせなかったことがあげられる。しかし、学生は模造紙を有効に使ってわかりやすくテーマやタイムスケジュールを発表したり、子どもの緊張を解きほぐし、班や全体で仲良くなれるようなゲームを行ったりして、全体の雰囲気を少し和ませることができた。(種瀬)



初めて出会った仲間と1日の始まり

(2) テーマ別フィールドワーク

伝統的な町家建築と今自分たちが住んでいる家を比べて、先人の知恵や工夫を知り、これからの住まいと町並みを考えることを目的に、奈良町を舞台に大学生と小学生、計8～9名ほどのグループでフィールドワークを行った。子どもたちの興味・関心を高めるために「奈良町にタイムスリップした」という設定を設け、道中では大学生による解説や、事前に配布したビンゴカードに載せられている写真のものを実際に探すなど、様々なアプローチで子どもたちに奈良町についての情報の提示を行った。子どもたち自身が、積極的に「これは何？あれは何？」と視点を広げながら奈良町を歩き、自身の住む家との比較を行うことで、過去の人々の工夫やその思いについての考えている様子が見受けられた。(高田)



町家の工夫を学ぶ子どもたち

(3) 振り返り発表会

振り返り発表会では、子どもたちが奈良町でのテーマ別フィールドワークを通して発見した、今の家と違うところや未来に残したいと思う家の工夫を撮影した写真をプロジェクターで写しながら、一人ずつ気付いたことや発見したこと、いいなと思ったことなどを発表した。子どもたちは、自分の住む家と比べて異なるところや、「今の家に活かせるのではないか」と思った奈良町の町家の工夫などについて丁寧に考え、発表することができていた。(下原)



フィールドワークでの学びを発表する様子

(4) ESD 勉強会

ESD 勉強会では、振り返り発表会での発表を踏まえて先人の知恵や工夫を振り返るとともに、先人が残したかった伝統・文化や先人の思いについて知り、その思いを受け継ぎ、これからも守っていこうという気持ちを育てるために、持続可能な街づくりについての話をした。現在も残っていて、私たちが見ることのできるものは、昔の人が「残したい」という気持ちを持って守ってきたものであり、私たちはそれらを尊重すべきである。しかし、暮らしの形やニーズは時代によって変わるため、昔の工夫をそのままに活用したり、昔の暮らしに戻したりすることは出来ない。昔の暮らしから今の暮らしを見つめなおすことで初めて、より良い未来の暮らしについて考えることができることを訴えた。持続可能な社会を考える時には、「知ること、伝えること、行動すること」が大切であることを伝え、最後に、現代のニーズに合わせ利便性を重視しつつも、先人の思いを受け継ぎ、伝統を守っていくために、自分がしたいことや自分に出来ることを、具体的に考えてもらい、班内で発表してもらった。子どもた

ちは、学生リーダーのアドバイスも受けながら、自分ができることを考え、「やっぱり伝えることが大事だと思う」、「もっと知りたいからもっと調べてみる」などの意見が出て、明日から自分ができることについて具体的に考えることができていた。(下原)

(5) さよならの集い

この日の最後に、1日の活動の締めくくりとして「さよならの集い」を行った。「さよならの集い」は、参加してくれた子どもたちとの出会いを喜び、また会いたいという思いが込められている「See you again」という曲から始まった。その後、学生代表から1日のまとめと最後のメッセージが送られ、参加してくれた

子どもたちに学生からのプレゼントとして、1日の活動の様子の写真をまとめた振り返りムービーを上映した。そして、1日の活動を共にした活動班で振り返りの時間を取り、集合写真が貼られた画用紙にそれぞれがメッセージを書き合ったり、最後に一言ずつお別れの言葉を述べたりと、班それぞれの最後の時間を過ごしていた。最後に、この日何度も歌ってきたテーマソング「みらいへ」を全員で歌い、第1回集まれ！ESD子ども広場が無事終了した。(下原)



自分たちにできることって？



みんなで歌ったテーマソング「みらいへ」

9. 成果と課題

【成果】

- 先人の知恵や工夫を知り、今に活かせることはないかと考え持続可能な暮らしについて考えることができた。 ⇒テーマ別フィールドワークのねらいを達成できた。
- フィールドワークが楽しく、学びをさらに深めるためもう一度家族で回ってみたという話を聞くことができた。 ⇒ESDを楽しく体験的に学ぶという本企画のねらいを達成できた。
参加者の行動化を促すことができた。
- 事後の報告書の中に、子どもの命を預かること責任についての記述が多かった。
⇒事前研修会の内容が活かされている。

【課題】

- 参加者の数が少なかった。 ⇒広報の仕方に工夫が必要である。
- 事後の報告書の中に、子どもたち同士や子どもと学生間での関係性の構築が難しかったという記述が多かった。 ⇒私たち学生の立ち回り方を考えなければならない。

第1回集まれ！ESD子ども広場で学んだこと

英語教育専修2回生 下原 舞

平成30年5月27日、奈良教育大学及びならまち周辺で「第1回集まれ！ESD子ども広場」が開催された。本企画は昨年度まで2日間を通して行っていた「ESD子どもキャンプ」の後継プログラムで、ユネスコクラブの学生が何ヶ月もかけて創り上げた1日企画である。今後はこのような1日企画を、年に複数回開催することになった。今回は、奈良市の小学生10人が参加してくれ、「ならまちな町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」をテーマに、ならまちでフィールドワークをし、伝統的な町家建築を見て先人の知恵や工夫を知り、これからの住まいと町並みを考える活動をした。

さて、記念すべき第1回目の企画で、私は「ならまちな町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」というテーマで企画し、フィールドワーク及びESD勉強会の担当をさせて頂いた。そこで、企画段階から本番までを通して学んだことや感じたことを、以下の3点から振り返りたい。一つ目はESDを実践する難しさ、二つ目は思いを持って活動することの大切さ、そして三つ目は仲間の存在の大きさである。

まず、一つ目のESDを実践する難しさについてであるが、これはESD勉強会を作る上で最も強く感じたことである。私は今回、子どもたちに持続可能な社会づくりの担い手になってもらうべく、子どもたちがフィールドワークで学んだことを踏まえて、企画の最後にESD勉強会をした。最も難しかったのは、持続可能な開発について分かりやすく言葉を噛み砕いて子どもたちにしっかり理解してもらうことであった。出来るだけ具体例を出しながら、簡単な言葉で伝える方法に最後まで悩んだ。また、学んだことから「明日から自分にできること、自分がしたいこと」という学びの行動化を子どもたち自身に考えさせることも非常に難しかった。今回の経験を通して、ESDを自分の手で実践することの難しさを強く感じた。難しいからこそ、自分自身がESDを学ぶことも大切だが、ESDを子どもたちと実践する経験をもっと増やしたい。そのため今後はESD実践の支援活動などにより一層積極的に取り組みたい。

次に、二つ目の思いを持って活動することの大切さについてである。私は今回、新しく始まった本企画を何とか成功させなければならないというプレッシャーや責任感から、自分が本当に子どもに伝えたいことや、自分は何を学びたいのかなど、自分の思いに向き合う機会が少なく、最後の最後まで自分の思いが上手くまとまらないまま当日を迎えてしまった。当日、フィールドワークやビンゴなど、自分たちが考えた企画を子どもたちが楽しんでくれている様子を見てほっとしたが、「何とか無事終わった」とい



タイムトラベルへ出発！

う気持ちが強く、大きな達成感は得られなかった。しかし、今回参加してくれた子どものうちの一人が「自分で改めてフィールドワークをして自分で写真を撮り、今度は学んだことを学校で発表する。とても楽しかったから次も来たい。」と言ってくれた。これを聞いて、思いが伝わったときの感動は計り知れないものであると感じ、私たち学生一人ひとりが思いを持って活動することの大切さを実感した。これからは、あらゆる活動に対し、「自分の目標は何か？」「子どもたちにどんなことをしてあげたいか？」を細かく考え、自分の思いをしっかり持って取り組みたい。

そして、三つ目の仲間の存在の大きさについてであるが、これは本企画を進めている準備段階から、本企画が終わってからもずっと強く感じていたことである。今回私は本企画のメインの活動となるフィールドワークとE S D勉強会の担当をさせて頂いたが、これは一人ではとてもやりきることが出来なかったと思う。フィールドワーク班の学生と何度も話し合いを重ね、何度もならまちに赴き、施設の方とお話をして、大学の先生方にも企画を見てもらい、最後までやり通すことが出来た。最後まで悩んだE S D勉強会に関しても、フィールドワーク班の学生や他の学生が当日の朝まで粘り強く相談に乗ってくれたり、一緒に勉強会を考えてくれたり、E S D勉強会に集中できるように他の仕事を代わってくれたり、最後まで全力で協力してくれた。誰も私を見捨てず、皆が最後まで一緒に創ろうと言ってくれた。このような今回の経験を通して、一緒に試行錯誤して企画を作っている仲間の存在の大きさを改めて実感することができたため、普段の活動から仲間への感謝の気持ちを忘れずに取り組みたい。

以上の三つが、「第1回集まれ！E S D子ども広場」を通して私が学んだことや感じたことである。本企画の記念すべき第1回目で、テーマの企画を担当させて頂いたこと、ユネスコクラブという素敵なチームでやり遂げることができたことに感謝すると共に、今回感じたことを忘れず、次回以降の集まれ！E S D子ども広場に繋げていきたい。



参加してくれた子どもたちとの集合写真

第1回集まれ！ESD子ども広場を終えて

国語教育専修3回生 丸本 まりな

2018年5月27日、奈良教育大学とならまち周辺で、第1回集まれ！ESD子ども広場が行われた。ユネスコクラブの学生で、昨年度まで行ってきたキャンプを見直した結果、集まれ！ESD子ども広場として再出発することになったのである。今回、私はこのイベントの企画代表をさせていただいた。ならまちの町家を見学し、昔の人の暮らしの知恵や工夫を学ぶというのが、今回のテーマであった。初めてのイベントであり、不安も感じたが、教職員の方々や卒業された先輩方のご協力もあり、無事終えることができた。

さて、今回のイベントでは、子ども広場実行委員会が立ち上げられ、企画の中核を担った。子ども広場実行委員会の一員として、また企画の代表として学んだことを、三つ述べたい。一つ目は見通しを立てた準備の大切さについて、二つ目は責任感について、三つ目は自分らしさについてである。

一つ目の、準備の大切さについてである。参加学生に向けて事前研修を3回行うなど、準備をしっかり行うことができた。まさに「準備8割、本番2割」だと感じた。しかし、ほぼ一から作り上げたイベントであったため、余裕をもって資料の作成などを行うことができなかった。作成物などの大まかなスケジュールは表にしていたのだが、次から次へとやるべきことが出てきたのである。次回のイベントでは、計画的、そして効率的に準備を進められるように、事前に細かいスケジュールまで立てておくつもりである。まずはやるべきことの一覧表を作りたい。

二つ目の、責任感についてである。私はこれまで、大きな責任を持つことを避けて過ごしてきた。この企画の代表は、ちょっとしたチャレンジ精神で引き受けた。そのため、企画を始めた3月頃は、企画代表としての自覚がなく、仕事を「やらされている」感覚だった。目の前の事務的な仕事に嫌気が差したこともあったし、仕事を上手くこなせず、前向きになれない自分に自信を失ったこともあった。しかし、先輩からの叱咤激励によって、企画代表としての責任を自覚し、やる気を取り戻した。「子どもと関わる企画をやってみよう」という初心を思い出すとともに、企画代表としてできることは何かを考えるようになった。先輩からの言葉によって、私は大きく成長することができたと思っている。

三つ目の、自分らしさについてである。周りの先輩や後輩から学ぶことはたくさんある。今回の企画を進める中で、周りの人と自分を比較してかなり自信を失い、落ち込んだことがあった。大学の講義などで、「他人との競争ではなく、自分の中で成長できたかどうかが大事」ということや、「個性の大切さ」を学んできたにも関わらず、自分自身ができていなかった。もちろん、他人の良いところを学び、取り入れようとするのは大切だが、自分自身を見失っては意味がない。自分の悪いところだけでなく、良いところを考えるきっかけになった。

過去2年間のキャンプでは、活動班で活動し、子どもとの関わりからの学びが中心だった。今回、初めて違う立場から関わり、自分自身を見つめ直すことができたように思う。たくさんの人に協力していただき、学生みんなで作り上げた子ども広場を、さらにより良いものにできるよう、次回に向けて頑張っていきたい。そして何より、子どもたちが「楽しい」と思えるイベントを目指していきたい。



前日準備を終えた後の集合写真

第1回「集まれ！ESD子ども広場」での学び

社会科教育専修1回生 義根 惇司

2018年5月27日、奈良教育大学とその周辺の「ならまち」を活用し第1回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回の活動は「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」というテーマのもと、10人の子どもたちと大学生が三つの班に分かれ、一緒に奈良の町で未来にも残していきたい昔の人の知恵や工夫などをフィールドワークの中で楽しく学ぶ。そしてその中から印象に残ったものを一人一つ発表してもらうというものであった。

私が今回の活動で学んだことは三つある。一つ目は「参加者」から「参画者」への転換、二つ目は子どもとの接し方、三つ目は全力で楽しむということについてである。

一つ目の「参加者」から「参画者」への転換ということだが、私はこれまで奈良教育大学に入ってから1ヶ月、参加者として新入生関係のイベントに参加してきた。どのイベントでも、先輩方が私たち1回生を楽しませるために裏で仕事をこなしている姿を見てすごく憧れていた。そして、私も企画する側に立って参加者の笑顔が見たいというのが、本活動の運営に関わらせていただいた一つの大きな理由だ。私自身、高校時代にレクリエーションを上手く運営できなかったことがすごく悔しく、だからこそ今回の活動はそのような後悔は絶対にしないようにと気を引き締めて臨んだ。当日は運営班として参加させていただいて裏方の仕事のやりがいを再確認することができた。高校生の時よりは周りを見て行動することができたが、先輩方と比べるとまだまだで、もっと全体のことを見渡せる広い視野が必要だなと実感した。これから仕事を覚えていくと同時に身に付けていきたい。

二つ目の子どもとの接し方ということだが、気をつけたのは子どもと同じ立場に立つということだ。話すときには子どもと視線を合わせて話すことや、歌を歌うのが恥ずかしそうな子どもには横に付いて一緒に歌ってあげるなどを心がけた。こちらから立場を合わせていくことで子どもも心を開いてくれやすくなるということを実感することができた。だが、比較的大人しい子たちが多かった今回の活動、1回生全体の感想としては第一印象で心を開いてもらえなかったところが反省点にあがった。私たち大学生も緊張してしまっていて、子どもが話しやすい環境を作れていなかったことが原因であった。1日企画でのファーストコンタクトの重要性は計り知れない。どうすれば初対面の子どもに素早く親近感を持ってもらえるようになるのか、これから試行錯誤していく必要があると思った。それでも、1回生が子どものことを第一に考えて行動していることは運営をしていく中でひしひしと伝わってきた。「時空の門番」という役をやらせていただいて、お菓子スポットで待機していたが、中々活動班のメンバーがやって来なかった。しかし裏を返すとその子どもたちのためにゆっくり歩いていることだと思った。その他の場面でも水分補給をこまめに促すことや、健康に気を使う場面が見られたので子どもの体調管理という面は良かったところだと思う。それでも心を開ききってくれなかった子どももいたので、次の活動は全員が心を開いてくれるように優しく、厳しいところは厳しくできるリーダーになりたいと思った。

三つ目が全力で楽しむということで、正直私は新歓キャンプで恥ずかしさを捨てることができていなかった。まだまだ自分の殻に閉じこもった状態だった。だが、今回の活動で子どもたちに負けないように大きな声で歌ったり、子どもと一緒に走り回ったりと少し自分の殻を破ることができた。自分が子どもたちに最高の思い出を残して成長させてあげようと思ったが、知らずのうちに私自身も子どもたちに成長させられていた。そう考えてみるとお互いがお互いのことを成長させあうことのできた素晴らしい活動だったと思う。

以上、この三つが今回の活動で学んだことである、今回のような子どもと触れ合うイベントは様々な角度から成長できると感じた。参画者としての意識、子どもとの関わり方、自分の殻を打ち破ることな

どこれら以外にも細かいところでたくさん成長できたと思う。先輩方だけではなく、今回の活動と一緒に参加した1回生のメンバーとも共にこれから高めあっていきたい。最後の反省会に参加した1回生全員が自分の良かったところできていなかったところ、次への反省を分析できていて素晴らしいメンバーだと感じた。ここまで分析ができていたら次の活動を迎えるときには一回りも二回りも大きく成長しているのではないかと思う。こんなに素晴らしい同期に巡り会えたことに感謝して、このメンバーに負けないぐらいこれからも頑張っていきたい。



円陣を組んで気合いを入れる学生たち

第1回集まれ！ESD子ども広場を終えて

英語教育専修 修士2回生 糸 綾香

平成30年5月27日、「第1回集まれ！ESD子ども広場」が、奈良教育大学とならまちにて行われた。本企画は、昨年度までのESD子どもキャンプの後継プログラムであり、本年度からは宿泊を伴わない日帰り企画として年に複数回行う。今回はその企画の記念すべき第1回目の活動であった。

まず第1回目からこの企画に関わることができたことに感謝をするとともに、本企画の準備・当日運営を通して感じたことを三つの視点で振り返りたい。第1に新しいことへの挑戦、第2に伝えることの大切さ、第3に最後まで本気で関わることについてである。

第1の新しいことへの挑戦についてである。本企画は昨年度までのESD子どもキャンプをもとにESDフィールドワークを抽出した企画となっているが、準備を進める上でやはり新しいことへの挑戦であったと感じている。昨年度の子どもキャンプ直後より、この企画を実現するためユネスコクラブ全体で話し合いを重ね、より多くの時間と人の想いが詰まった企画となった。開催時期をいつにするか、ESDフィールドワークをどのような内容にするか、だれがどの仕事をするか、何度も話し合い、当日に臨んだ。時間と想いをたくさんかけることはできたが、新しい企画を運営する上で予想しきれず反省すべき点もあった。気候が良く、多くの学生が関わりやすい開催時期にしたが、それは参加者である小中学生の学校行事にとっても最適な時期であり、運動会や定期試験と重なって参加できない子どもが多かった。広報やしおり作成、発送、物品調達などについても、昨年度までとは全く異なる体制で行ったため、混乱が生じることが多々あった。しかし、このような反省点は新しいことを始める上では、つきものであるし、後輩には次回、ぜひ生かして欲しいと思う。

第2の伝えることの大切さについてである。今回のESDフィールドワークはならまちの町家をもとに、そこから感じるができる先人の工夫や思いについて学ぶという内容であった。2月のフィールドワーク企画コンペから始まり、フィールドワークを企画してくれたメンバーを中心に、複数回のプレフィールドワークを実施し、多くの学生がその企画に関わった。私はならまちにある、フィールドワークのチェックポイントの一つにもなった観光施設でアルバイトをしており、企画翌日も勤務をしていた。すると、本企画に参加していたある子どもが、保護者と一緒に企画で使用したしおりを手に来館していた。聴くと、「イベントがとても楽しかったから、今度は自分で写真をとってビンゴをしたい。」「ESD勉強会の内容がとても分かりやすかった。」「そこで学んだ「伝える」を実践するために、今度学校で発表する。」ということであった。昨年度までもESDフィールドワークで扱った様々な題材を通して、ESDの大事な要素である「行動化」を子どもたちに伝えてきた。しかし、実際に子どもの実生活において「行動化」を実現している姿を見るのは初めてであり、とても感動した。自分たちが関わったもので、子どもが変わる。これほどやりがいのあるものは無いと思う。



今回のテーマ「ならまちの町家」の発表

第3に最後まで本気で関わることについてである。私はこのような企画に関わって、子どもキャンプより通算7年目である。運営として働くのは5年目である。そして今回の5月の子ども広場は、ここまで中心になる一人として関わる企画では最後になると覚悟し、今までに培ったノウハウや考え方、周りの見方、様々な人々、状況との接し方などを、見せる、伝える、教える、をテーマにこの数か月間、同回生、後輩たちと妥協せず、関わることを心がけてきた。今まではやるのが重なってくると、諦めた

り、妥協したりすることも多かった。しかし、今回は特にそれをしたくなかった。第1回目であるこの企画を成功させたい、昨年度のトラブルを絶対に引き起こしたくない、このメンバーで絶対に良いものを創りたいという想いを胸に、今まで以上に心の熱さ、本気度が高いまま関わることができたと思う。一方で、私が先を見通しきれず、なかなかすべてを伝えることはできなかつたり、意見のぶつかり合いがあったり、口論にもなってしまうこともあった。しかし、何人かの後輩から「見方や考え方が変わった。」「今までは気づけなかったけど、初めて気づくことができたことがある。」などの言葉をもらうことができ、やってきて良かった、自分の頑張りは少しでも報われたと感ずることができた。かけた時間と想いの分だけ、自分に返ってくる。最後まで本気で関わると覚悟できたからこそ、この言葉の意味を感じることができた。

以上、三つの視点から本企画を通して感じたことを振り返った。自分自身も本気で関わったが、仲間である同回生、後輩たちも全力で関わってくれたゆえに、今回の成功がある。改めて感謝をするとともに、ぜひ今後も、翌日にお母さんとフィールドワークの続きをしていたような子どもを増やして行ってほしい。



全員で、「まちやー！」

第1回集まれ！ESD子ども広場 —初めて子どもたちと関わって学べたこと—

国語教育専修1回生 桑田 佑香

平成30年5月27日、奈良教育大学とならまち周辺で第1回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回の子ども広場では、三つの班に分かれて行動した。そして、ならまちの伝統的な町家と現在の自分の家を比べながら先人の工夫や知恵について学んでもらい、その伝統を後世に残すために自分たちができることを考え交流した。



町家の工夫を聞く子どもの様子

の交流の方法について話に上がった。そこで、まずは自分から心を開いて接しないと子どもも心を開くことができないという結論に至った。次にこのような機会があるときには、まず自分から心を開いて接していこうと思う。

二つ目に述べた活動班における自分の役割だが、これは人に言われて行動するのではなく、円滑に行動するには自分がどの役割に就くのが最適なのか、常に考えながら行動するということである。今回誰かに指示をされないと動けなかったのが、視野を広げて自分の役割を見極めていくことを大切にしていきたい。



子どもと目線を合わせる様子

今回の子ども広場で、感じたこと、学んだことを三つ述べたい。一つ目に子どもたちとの交流の難しさ、二つ目に班活動における自分の役割、三つ目に客観的な視点を持つことの必要性である。

一つ目に述べた子どもたちとの交流の難しさについてだが、交流することというのは子どもと初めて関わる自分にとっての一つの目標でもあった。しかし当日になって関わってみると、積極的な子どもばかりではなく、声の掛け方が難しかった。具体的には、活動班の班長決めや班名決めするときなどである。そして、学生での振り返りのときに子どもと

三つ目に客観的な視野を持つことの必要性だが、これは活動中に感じたことである。子どもたちが何か言いたそうにしているときや疲れて辛そうにしているとき、すぐに気づける視野を持つことが必要になる。子どもたちの安全や楽しい思い出を作ることを常に考えて、行動していきたい。

今回の反省点は多々あるが、次から気を付けようと思うのは、消極的な部分である。誰かに任せるのではなく、積極的に考えて行動することを大切にしていきたい。今回学んだこと、感じたことを無意味に終わらせるのではなく、次に活かすための材料にしていきたいと思う。

子どもとともに学ぶ

英語教育専修1回生 後藤 旭

平成30年5月27日、奈良教育大学及びならまちで、第1回集まれ!ESD子ども広場が行われた。あらかじめプログラムを細かく決めており、そのプログラムにしたがって進行された。自己紹介や班の名前決めから始まり、アイスブレイキングのゲームやならまちでのフィールドワーク、発見したことや発表会、ESD勉強会などがあり、最後はさよならの集いで幕を閉じた。学生はそれぞれの役割ごとに班に分かれており、お互いの班が協力して活動した。

今回の活動を通して私が学んだことは三つある。一つ目は子どもをよく観察することの大切さ、二つ目は準備の重要性、そして三つ目は子どもを預かること責任である。

まず一つ目は子どもをよく観察することの大切さについてである。この活動において私は一貫して子どもの表情を見ることを徹底した。その理由は子どもの表情を見ることで、子どもの考えていることや感情、そして体調の良し悪しなどを確認できるからだ。奈良格子やうだつなどのならまちの工夫に気づけているか、それらの説明を聞いているか、理解しているかなどを確認することができた。しかし、しっかり確認はできたものの、確認してからどう行動するかが非常に難しかった。どんな声掛けが子どもの想像をかきたてるのか、どういう姿を自分たちが見せれば子どもは積極的になってくれるかなど、思うことは多くあったが実際に行動できてなかったと感じる。やはり、積極的になってくれるのかなどの、自分の思いや伝えたいことというのは行動して初めて伝わると思った。次回からは表情を見る、その次のステップとして「行動すること」を目標にしたい。

二つ目は準備の重要性についてだ。この重要性についてはイベントの準備段階からとても強く感じていた。時間をかけて、応急手当などについて学び、緊急時の対応をマニュアル化し、それぞれの担当を決める、また、さまざまな場合を想定しておいてそれに対する対応策を用意しておく、このような準備や段取りがなければイベントは成り立たないと思った。それぞれの活動班や係で相談し合い、協力し合い、何よりも信頼し合うことが大切だと感じた。私も同じ班の班員や他のユネスコクラブのメンバー全員を信頼できたから、このイベント全体を通して、柔軟に動くことができた部分が多くある。この信頼は、準備段階からお互いに話をしたり、ともに過ごしたりしてきたからできたのだと思う。これは将来教員になった時も大切なことであると感じた。



フィールドワークの様子

そして、三つ目の子どもを預かること責任はこの活動すべてにおいて感じたことである。子どもを預かるということは、命を預かることであり、そして信頼をもらっているということであると思った。そのため、それ相応の覚悟と責任が必要だ。もちろん必死に子どものことを考えて動かなければならない。しかしその必死な顔を子どもに見せないくらいの余裕、そして決まりに縛られ過ぎない柔軟性が大切だと思う。なぜなら、子どもは大人のことをよく見ている、大人が思っている以上に子どもが影響を受けるからだ。そのことを今回のイベントで改めて確認して自覚することができた。

本活動を通して、私にとって子どもを預かるというのは初めての経験だったが、その責任の重大さを実感できた。また、先輩の動きや声掛け、子どもの柔軟な考え方など多くのものを得ることができた。常に周りをよく見て、自分にはない相手の良いところを学ぶ姿勢が大切だと感じた。教員になってからも生徒からも学んで、子どもとともに成長していけるように心がけたい。このイベントは自分にとってとても貴重な経験になった。

「第1回集まれ！ESD子ども広場」に参加して

社会科教育専修3回生 高田 理生

2018年5月27日、昨年度までのESD子どもキャンプに代わり、新企画「第1回集まれ！ESD子ども広場」が開催された。今回のテーマは「ならまちの町家」、タイムトラベルという設定の下、参加児童たちにフィールドワークを通じて、昔の家はどのようなものか、現在の我々の生活と比較して感じたことの発表や、勉強会での学習を踏まえ、これからどのように行動するか、何ができるのかを考えてもらった。

今回のこの活動は初の企画ということもあり、初めての試み、挑戦が多くあったように感じる。そんな手探りで計画していった今回の経験から、本報告書では、フィールドワーク班として、活動班として、1日企画であることについて、この三点について振り返っていきたいと思う。

一点目のフィールドワーク班についてであるが、本活動では、運営班、広報班、オリエンテーション班、そして今回私が所属したフィールドワーク班の四つの企画班に分けられた。フィールドワークは企画の目玉であっただけに準備も2月頃から始まり、長い時間をかけて行ってきた。私も導入の設定紹介の寸劇をメインに、計画段階から関わってきただけに、想定していたよりも、参加者の楽しんでいた姿を見ることができ、良いものが作れたと感じる。



フィールドワークの寸劇の風景

二点目の活動班についてであるが、3回生になったこともあり、活動班の中で最年長であることの、緊張感のある班構成となっていた。自分が他の学生を引っ張り、班作りをすれば確かに簡単であったかもしれないが、いかに進行を班長にまわすか、当日どのように立ち回るべきなのか、私が1回生、2回生のときは、先輩方もこのようなことを考えておられたのかなど、感じた。上級生としての役割を果たせたかはなかなか自分では分からないが、自分でも新たな発見や成長を感じるきっかけとなったように思う。

三点目の1日企画であることについてであるが、ESD子どもキャンプは2日間のプログラムで、学生と参加者の距離、そして参加者同士の距離を縮めることができていた。しかし、1日企画であることで、参加者と学生との距離はこちらが積極的に関わるため、もちろん良いものになっていくが、なかなか参加者同士でコミュニケーションを図らせるのに困難さを感じた。もちろん2日間企画であっても課題に感じるものであるだけに、どうすれば良いのかという解答の出るものではないだろう。参加者同士のコミュニケーションをどう促すか、どう距離を縮めるという点は、次回開催に向けて意識したいポイントである。

今回の活動について、以上の三点で振り返った。本企画を迎えるにあたって、じっくり議論を重ね、1日企画として子ども向けのイベントを行うことになった。初めての企画であったが、ESDの学びが凝縮され、本当に感じてほしいことがしっかりと参加者に伝わっていたように思える。次回以降の企画は今回を超えるような、企画を作り上げたいものである。そのためには、企画に関わる学生がより、ESDについての理解、子どもと関わる際の心構えを学んでいく必要があるだろう。さらに自分もそうだが、いかにその学習の場に人を引き付けるかを考えていきたい。

第1回集まれ！ESD子ども広場を振り返って

理科教育（文化財科学を含む）専修 修士2回生 佐野 宏一郎

2018年5月27日に第1回集まれ！ESD子ども広場が行われた。私は、この企画にフィールドワーク班として、3班の活動班として関わることができた。

今回の活動を、自分自身のこと、フィールドワークのこと、という二つの視点を軸に振り返ってきたい。

最初は、自分自身の振り返りについてである。私は今回の活動を通して、「子どもたちの心に残る経験を届ける」ということを目標にあげた。このことは、企画から関わったフィールドワークでの内容を通じてということだけではなく、活動班内での子どもたちとの関わりの中でも達成したい目標であった。今回の活動班では二人の小学生と活動することができた。果たして、彼女らが1日の活動を通じて心に残った経験を積むことができたのだろうか。心に残る経験は、「楽しさ」と「感情が動く」という2点が重要なことであると考え。さらに、楽しさには「仲間意識」というのも関わってくる。今回は子ども同士の垣根を超えた仲間意識をつくることが不十分だったのが悔やまれる。また、大学生と子どもの関係性も、例年に比べると不十分だった。子どもが班に二人だけであった、1日だけの限られた時間だったなど環境的な要因もあったかもしれない。しかし、それ以上に自分自身にできたことはあったのではないだろうか。子どもたちが班を意識できる声掛けや行動がもっとできたのかもしれない。私には、この反省を実践できる機会がほとんど残されていないので、この反省を後輩たちに伝えていくことで、この活動をより良いものにしたい。



子どもとのふれあいはいつも新鮮



フィールドワークは、楽しかったかな？

次はフィールドワークについてである。フィールドワークの企画づくりを通じて「題材研究」の重要性を改めて考えさせられる機会となった。フィールドワークの題材研究は、学校教育における教材開発と似たようなものだと考えている。教材研究で「教師は授業で教えること以上のことを知っていなければならない」と言われるように、フィールドワークの企画でも、まずは題材を徹底的に知ることから始めなければならない。今回のフィールドワークの題材はならまちの町家で、ほとんど知識が

無い分野であった。町家などの古民家に関する概説書や、ならまちの町家に関する論文も読んだ。それでも、特にビンゴシートの内容は、完璧なコンテンツではなかったというのが正直な感想だ。この原因は、フィールドワーク企画班での知識の共有と本活動参加学生の知識のベースアップ不足だと振り返る。他の班員にも仕事があったので難しいことだったかもしれないが、欲をいえばビンゴシートの内容について、フィールドワーク班内で議論をしたかった。議論と検討無しでは、ミスも見逃してしまうし、より良いものにはならない。私が周到な準備を怠ったことも一因ではあるが、今回のビンゴシートの内容決定は一人での作業であったし、議論できるような余裕は日程的にも難しかった。結局ミスの見逃しや検討も、フィールドワーク班以外の人と行うことになってしまった。これらは、本来ならばフィールドワーク班で完結させなければならないことである。これらができなかったこと

は、個人的には悔しかったし、反省しなければならない。次回以降の改善案として、人員の増加を挙げる。知識の共有のためには、フィールドワーク班の人員を増やして一つの問題に複数人で向き合える環境が必要である。環境が整うことで、フィールドワーク班だけでなく活動に関わる学生全員で、勉強会などの時間を設けることが可能になり、知識の共有と理解の深化を促すことができる。今年は新しい仲間がたくさん増えたので、次回以降の活動ではフィールドワークに人員を費やした方がより良いものを作ることができるはずだ。フィールドワークの幅を広げ、質を深めるには題材研究がとても重要な役割を果たす。本活動ではフィールドワークの重要度が高い。だからこそ、このことを忘れずに活動を展開できるような環境づくりを進めていきたい。自分がやり切ったと思えるだけでなく、フィールドワーク班、関わった学生全員が、チームとしてやり切ったと思える企画作りが理想的である。

本活動は、今回が第1回目であった。去年の子どもキャンプの反省を踏まえ、1日を通じて子どもたちの安全が守れたことは幸いなことである。また、去年の反省から、卒業した仲間も含めて全員で意見を出しながら一つひとつ形にしていき、ここまで走り続けられたことは、個人はもちろん、クラブとしての成長につながったと感じる。特に、去年の反省会からここまで共に歩いてきた仲間は、自分たちで新しく企画を決定してきた訳であるし、責任という言葉の意味を身に染みて感じているはず



今日ここが、スタートライン！

である。しかし、これが第1回目であるということを忘れてはならない。ここがゴールではなく、始まりなのである。これから未来に続けていくためには、これからが特に重要である。具体的には、今年から加入した仲間、さらには、これから加入するだろう仲間に責任の重さを伝え続けるということである。そのためにも、今回事前の研修でこれらについてしっかりと共有したことは、絶対に続けていかなければならない。私個人としても、今の活動がある意味や、責任ということを伝えていかなければならない。この活動に直接関われる時間は本当に残りわずかになってしまった。ここで見つめ直したことを忘れずに、この瞬間から既に未来に関わっているということを忘れずに、これからの活動にできる限り貢献し続けていきたい。

第1回集まれ!ESD子ども広場で学んだこと

英語教育専修3回生 坂本 和音

平成30年5月27日に奈良教育大学内及びならまちにおいて第1回集まれ!ESD子ども広場が行われた。この企画は近畿ESDコンソーシアムの事業の一環として行われたものである。今年から新たに発足されたこの企画では、学生らと地域の子どもと一緒に活動をする中でESDを体験的に学ぶことを目的としている。その第1回目となった今回は、ならまちをめぐるフィールドワークをメインの企画とした。午前中にオリエンテーションを行ってその日に初めて出会った子どもの緊張をほぐし、午後からならまちにおけるフィールドワークを行った。その後、フィールドワークで発見したことや学んだことを生かした子どもの発表会とESD勉強会が行われた。フィールドワークではならまちを散策し、町家に施された多くの工夫を発見し、それを現代の自分たちの暮らしと比べることで普段の生活を見つめなおし、持続可能な社会のために自分たちができることについて考え、学ぶことができた。

この集まれ!ESD子ども広場を通して私は三つのことを学んだ。第1に教育する側としての難点、第2に子どもたち同士の関係づくりへの介入、第3に子どもたちと行動するうえで優先すべきことである。

まず第1の教育する側としての難点についてである。私が感じた教育する側としての難点は、「ねらいへ導く」とことと「待つ」ということである。特に、フィールドワークの中で子どもたちの学びを「待つ」ということが何度も必要とされた。どの町家にどんな工夫がされているのか、何のための工夫なのか、現代と異なる点はどこかなどは当然企画する側の学生として把握していたが、重要なのはそれをどう子どもたちに気づかせるのかということであった。ただの知識のインプットにさせないためには子どもたちが自分から行動をし、自分たちで気づき、

考えるという経験をつくる必要がある。そのために教育する側に求められているのは、知っていても子どもたちと同じ目線で一緒に行動することであると考えた。ならまちを歩いていく中で気づいてほしい町家の工夫があっても子どもたちが見つけるまでは待ち、町家の工夫の意味を直接教えるのではなくその利点は何か、その工夫があると家の中がどうなるのかなどの質問から、徐々にねらいとしている方向へ「導いていく」とことがいかに難しく、どれだけ重要な点であるのかということフィールドワークでの自分の活動



ならまちフィールドワークの様子

班の学びの中で、身に染みて感じることができた。例えば、屋根の上にしかない町家の工夫を見てほしかった時には「あそこ(指さして)に何かあるよ。」ではなく、「見つからないね。周りをぐるっと見回してごらん。屋根とか上の方も。」と言って子どもたち自身にその工夫を見つけさせたり、「これは何だろう?」と喋って子どもたちの注意を見せたいところを集めたりしていた。私はこのことを通して、子どもを自然にねらいへと導く声掛けの仕方や発問の工夫をもっと知りたいと感じ、そうすることで子どもの学びを大いに広げられると考えた。

第2の子どもたち同士の関係づくりへの介入である。これは私が入っていた活動班で一番大きな反省点となったことの一つである。一緒に行動する活動班において子どもたち同士の関係づくりは大きな課題となった。その日に初めて会う子どもたちの緊張をどうほぐすのか、男女の差や年齢差を超えた関係

づくりに私たち学生がどう関わることができるのかを深く考えた。私は、自分の活動班で子どもたちと接していく中で、学生はあくまでも子どもたちがお互いに関係をつくろうとしているコミュニケーションをつなげる役割で動かなければならないと感じた。例えば、発問をする際に班にいる子ども全員に聞いたり、話してなさそうな子や消極的な子に話を振ったり、子どもたちだけで話す機会を作ってあげたりすることである。子どもが自分から他の子に話しかけにいけるような環境をつくるのが学生側の役割であり、常に見守るという姿勢を持ち続けなければならないと感じた。

第3に子どもたちと行動するうえで優先すべきことである。これは言い換えると子どもたちの安全を守るうえで私たちがすべきことについてである。私の活動班では、フィールドワーク中に体調不良になった子どもが二人いた。本活動に向けて何度も子どもたちの安全に関する研修が入念に行われていた為、緊急時の対策については十分に学べた状態で本番の日を迎えることができた。しかし、いざ目の前に体調不良の疑いのある子どもがいた時に、私は決断と行動を素早くすることができなかった。その理由としてあげられるのは、子どもたちの「やりたい、続けたい、学びたい」という気持ちとの葛藤である。ここからの活動で学んでほしいこと、見てほしいものがたくさんあるという気持ちと、早めに大学へ戻り、しっかり休ませるべきだという気持ち、そして子どもたち自身からの「やりたい」という訴えを優先させてあげたいという気持ちで、適切な判断を自分だけではできなかった。同じ活動班の先輩の適切な判断で体調不良だった子は大学へ早めに帰ったことでフィールドワーク後の活動を元気になる



第1回集まれ！ESD子ども広場 2班の集合写真

ことができた。私は、この経験を通して子どもたちの貴重な学びの場を一瞬奪うことになってしまってもその命とは比べ物にならないし、なによりその時を重視してその後の活動に参加できないというより、少しの間だけ我慢をしてその後の活動を元気にやりきることの方が子どもたちにとっても私たちにとっても何倍もよいことであると学ぶことができた。そのためには子どもたちのやりたいという気持ちを乗り越える勇気と決断力、周りの人との連携が必要不可欠であると感じた。

私は第1回集まれ！ESD子ども広場を通して、子どもの学びを深く、広くすることの難しさと、教育する側に求められる勇気や強い気持ちを学ぶことができた。このことはやはり実際に子どもたちと接してみないと気づかないし、学べないことだと思う。これからもこのような貴重な機会を大切に子どもたちと一緒にたくさん学んでいきたい。

貴重な経験が私の考えを変えた

社会科教育専修1回生 山本 健太

2018年5月27日、奈良教育大学キャンパスとその周辺において、第1回集まれ！ESD子ども広場が開催された。この企画はならまちの町家を訪ね歩き、仲間との絆を深めながら町家に残された先人の知恵や工夫を学ぶことで持続可能な社会づくりを考え、ESDについて皆で学びあうことを目的として行われた。

今回私が学んだことは三つある。一つ目に運営班の存在の大きさ、二つ目に子どもと関わることの難しさ、三つ目に状況に合わせた行動のとり方だ。

一つ目の運営班の存在の大きさについてだが、今回私は運営班として参加させて頂き、このようなイベントの成功には運営班のような縁の下の力持ちの存在が必要不可欠のだと気づかされた。どちらかといえば活動班の方に目が行きがちだが、全体の状況を逐一確認し、参加者の体調を気遣い、道具の管理や会場の設営等々、イベントがスムーズかつ安全に行えるように常に動き回る運営班の活躍があるからこそ、無事に1日を終えることができるのだ。今回はそのことに改めて気づかされた。

二つ目の子どもと関わることの難しさについては、今回最も考えさせられたことだった。これまでの私は、ただ子どもが好きで人に教えることが好き、という安直な考えだけで教員を目指していた。ところが今回参加して、ただ子どもが好きというだけでは教員という職業は務まらないのだと気づかされた。1日という短い時間の中であったためか、子どもが私に対してなかなか心を開いてくれず、上手くコミュニケーションを取ることができなかった。どう接すればよかったのだろうか。どのように話をすればよかったのだろうか。もっとああすればよかった、こうすればよかったのかと終ってからも本気で悩んだ。子どもとの上手な関わり方を知りたいと本気で思った。きっと正解なんてないのかもしれない。しかしこの苦い経験は、これまでの私の安易な考え方を大きく変えた。私はもっと子どものことについて知り、考えなければならない。私はこれからたくさんのことを学んでいかなければならないのだと気づかされた。

三つ目の状況に合わせた行動の仕方についても、私が今回得ることができた大きな経験となった。当日当初の予定通りに進まなかったとき、急遽予定を変更してその場の状況に合わせた対応を先輩方がなさったのを見て、臨機応変な対応ができる先輩方を只々尊敬して見ていた。おそらく私だったら時間を無視して予定通り進めているだろう。今回の先輩方の対応は非常に勉強になった。私はこれから状況に合わせて臨機応変に対応できるような柔軟な考え方を持つように努力しなければならないのだと思った。

今回この企画に参加して、私は大きな経験を得ることができた。初めてということで戸惑うことも多かったが、てきぱきと仕事をこなす先輩方の姿を見て、次こそはこの経験を活かしてユネスコクラブの力になりたいと思った。そして今回得た貴重な経験は、間違いなくこれまでの私の考え方を変えた。これからはその貴重な経験を財産に、これからの勉強への糧、そして次回以降の子ども広場へとつなげていきたい。



ポイントマンとして子どもと触れ合う様子

自分が殻を破り、まずはトライ

英語教育専修2回生 守部 北斗

2018年5月27日、奈良市内の小学生を対象に、奈良教育大学とならまちを舞台に第1回まれ！ESD子ども広場（以下、子ども広場とする）が開催された。子ども広場の前身であるESD子どもキャンプに続き私にとって2度目の大企画である今年は、テーマ別フィールドワーク（以下、フィールドワークとする）班の企画メンバーとして、また2班の学生リーダー長として企画段階から深く関わってきた。今回は「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」をテーマに、子どもとともに先人の想



フィールドワークの様子

いに触れながら持続可能な社会づくりを考えた。同月12日と13日に催されたユネスコクラブ新歓キャンプでプレを行ったことで上手くいった点や改善すべき点を整理し、この子ども広場にできる限り反映できた。この子ども広場を通して学んだこと、発展させたいことを三つ述べたい。一つ目は自分の殻を破ることの意味、二つ目はフィールドワーク・ESD勉強会の企画構想の難しさ、三つ目は発問の工夫である。

一つ目の自分の殻を破ることの意味についてである。私はテーマ別フィールドワークの導入として5分間ほどのコントを披露した。本番当日3日前のプレで「ゆっくりはっきりと大きな声で上げすぎるくらいジェスチャーをつけて」といったアドバイスをいただいた。この段階では私自身、コントの大まかな原稿さえも頭に入っていない状態だったが、同じフィールドワーク班の学生にお手本動画を共有していただき、残された時間で練習を何度も繰り返し、前日にはほぼ完璧に役を演じ切ることができた。本番のコントでは、適度な間を置き、声の大きさを変えることで子どもの興味を引きつける「役者」に一歩近づいたと自信を持って言える。

二つ目のフィールドワーク・ESD勉強会の企画構想の難しさについてである。子どもがならまちの家の工夫を知ることが、ESDの考え方とどう関連しているのかを考え、学生がフィールドワーク・ESD勉強会の目的を設定することに苦心した。フィールドワーク班内では話し合いに行き詰まりを感じたため、ほかの班のメンバーからもアイデアをいただいた。これより子どもが学んだことを周りの人に伝えることができるようになることを目的の一つに掲げた。だが、これは前年度のESD勉強会においても目的の一つに挙げられていた。今後は子ども広場のそれぞれのテーマに沿った革新的なフィールドワーク・ESD勉強会の目的を考案できるよう改善したい。

三つ目の発問の工夫についてである。ユネスコクラブ新歓キャンプでプレに参加し、2班の学生リーダーを務める中で気づきを得た。具体的には以下の通りだ。私はプレでは子どもの疑問に一つでも多く答えることが最重要だと考えていたが、プレの振り返りをする中でその認識が大きく変わった。フィールドワーク中、私は答えに結びつくような発問を投げかけ、同じ班の子どもに聞いてみるよう促した。私は教師に求められる「知りたい」意欲を引き出すスキルを得たと感じている。

以上の三つが今回子ども広場で学んだことである。コントは初のトライだったが、聞いている人の顔を見ながら自信を持って語りかける力も身についたと感じ、学びが非常に多くあった。

成長と課題を感じた子ども広場

理科教育専修2回生 種瀬 史歩

2018年5月27日、奈良教育大学とその周辺で第1回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回の活動のテーマは、“ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～”であった。このテーマから分かるように、フィールドワークでは、ならまちに行き伝統的な町家の工夫について学び、今の家との違いを見つけながらも、形やものそのものは違うが同じ働きをするものについても考えた。

今回の活動で私は三つのことを学んだ。第1に子どもと大学生の違い、第2に学生リーダー長として子どもと関わる難しさ、第3に準備はしすぎることはないということだ。

第一の子どもと大学生の違いという点についてだが、それについて強く感じたのが、自分が担当したオリエンテーションの時間だ。オリエンテーションとは、テーマの紹介をして1日の見通しを立て、1日過ごす自分の班やこの企画の参加者全員がゲームなどを通して仲良くなったり緊張をほぐしたり雰囲気や和らげたりするものだ。しかし、今回のオリエンテーションでは、子どもの緊張をほぐし、班内や全体の雰囲気を和らげることができなかつたと私は考える。そこで感じたのが、大学生と子どもの違いであった。同じことを5月に開催された新入生歓迎キャンプで行ったが、その時はみんなの緊張もほぐれ、班内や全体の雰囲気を和らげることができた。それは、大学生は物分かりが良く、教育大生であるためコミュニケーション能力が高いからである。それに対し子どもは、その日初めて会った子ばかりで、また大学生が多い中で行うことであったため、新入生歓迎キャンプの参加者とは比べ物にならないぐらいの緊張などがあったのだと感じた。大学生と子どもという異なる対象に同じ企画をしたことで、私は両者の違いについて身をもって感じることもできた。今回、対象に合わせて、やることも考えることも変えるべきだということが分かったので次に生かしていきたい。



オリエンテーションの様子

第二に、学生リーダー長としての子どもの関わる難しさである。昨年の第6回ESD子どもキャンプでは、学生リーダーの一人として責任を持ちながらも、先輩に頼ったり、子どもと実際に関わったりするのは勉強になると思いながら子どもと関わってきたが、今回の活動では、学生リーダーの中の班長として子どもと関わるということで、先輩を頼りながらも去年とは比べ物にならないぐらいの責任感を持って行動できたと思う。また子どもの体調を第1に考えて行動できた。さらに子どもの心にも寄り添って対応することができた。去年よりも子どもの人数が少なく学生リーダーが多かったため、子ども一人ひとりをしっかりと見られた。また、学生リーダーの班長として子どもだけでなく、班の学生リーダーにも水分補給を促したり、体調を気遣ったりできたところが去年からの成長点だと考える。

第三に、準備はしてもしきれないということだ。どれだけ本番を想定して準備をしても、本番は描いていた通りにならない。本番で臨機応変に対応できるかは、どれだけ色々な状況を想定しているか、また自分がどれだけ経験をしてきたかだと思う。私には、まだ経験が足りていない分、他の人以上にいろいろな状況を想定することが大切であることを再認識出来た。これからは、本番が成功することを祈りながらも、常に最悪の状況を想定しながら企画を作っていきたい。

今回の第1回集まれ！ESD子ども広場は、学ぶことがたくさんあったため、自分の再スタート地点となった。これからも、継続的に行われるこの企画を通して子どもだけでなく自分の成長を感じていきたいと思う。

ただ楽しいで終わらせない

英語教育専修4回生 森本 珠美怜

平成30年5月27日、奈良教育大学とならまちで、第1回集まれ！ESD子ども広場が開催された。今回の活動は、私たちにとって初めての企画である。学生、卒業生、また先生方と、長期的に計画を行ってきた。

さて、今回の活動を通して気づいたこと、考えたことが三つある。第1に臨機応変な対応について、第2に子どもたちへの言葉かけについて、第3に学生リーダーとしての厳しさと優しさについてである。

第1に臨機応変な対応についてである。私はオリエンテーション班として今回の活動に向けて計画、準備を行ってきた。アイスブレイクゲームの練習を何度も行い、メンバーも自信を持って本番を迎えることができたと感じる。しかし、私が行った「震源地ゲーム」の鬼役に誰も子どもが出てこず、ゲームの進行が止まってしまった。慌てて学生から鬼を出し、お手本とし、時間も押す中、咄嗟にわたしが子どもと2人で鬼役を行った。事前に大学生とでプレを行った際は、うまく進行することができていたのだが、実際に子どもと行うことを想定できていなかったと反省した。アイスブレイクは、雰囲気づくりに欠かせないものなので、今後は子ども目線でゲームを選んでいきたい。

第2に子どもたちへの言葉かけについてである。私は、子ども広場のメインプログラムであるフィールドワークで、子どもたちへの言葉かけに重きをおいた。今回は、個人的な目標として「ただ楽しいで終わらせない」を掲げていた。プレフィールドワークにて、子どもたちにとっての学びのポイントや、考えさせるきっかけなどを事前に考えて当日を迎えた。子どもたちが住んでいる家について話を聞いた、ちょっとした発言を取り上げ、「どうして？」という質問を重ねたりして、最後の発表会までに子どもたちの思いを引き出せたと考える。今回は、長い間私の課題であった言葉かけに成長を感じることができた。

第3に学生リーダーとしての厳しさと優しさについてである。私が所属していた2班のある子どもが、フィールドワーク中に体調を崩し、先に大学に戻る形となってしまった。その子どもは、フィールドワークで共に活動することができなかつたために、発表に対するやる気を失ってしまっていた。他の子どもたちは、どんな写真を撮ったか、なぜ撮ったかを説明したり、発表の写真を決めるためのアドバイスをしたりしていたが、その子どもはなかなか写真をきめることができなかった。男子学生リーダーに甘えながら、そのまま発表の時間を迎えてしまった。私は、先生でもなく家族でもない学生リーダーが、子どもに厳しく話をしてもいいのかという迷いがあった。しかし、このままにしているとその子どもは何の学びもないまま帰ってしまうかもしれないと考えた。その時、先輩から「話をしておいで」と背中を押していただき、その子どもととことん話をした。最後には、その子なりに精一杯の発表ができたのではないかと考える。学生リーダーであっても、ただ子どもを甘やかす存在になるのではなく、厳しく話をするときはずる、頑張ったときは優しく褒める、という二面が共に必要であると感じた。

以上3点より、以前に比べ自分の成長を感じることができた。次回は私にとって最後の活動になるので、自分自身の成長はもちろん、下回生への技術、この活動に対する思いの継承にも努めていきたい。



「みらいへ」の練習風景

第1回集まれ！ESD子ども広場で、出来たことと出来なかったこと

国語教育専修1回生 西條 秀哉

2018年5月27日に、奈良教育大学にて第1回集まれ！ESD子ども広場が開催された。フィールドワークではならまちへ向かい、昔ながらの街並みを探索する中で、今と昔の結びつきを学んだ。奈良教育大学へ戻った後は、フィールドワークで発見したならまちの町家に施された工夫や考え方の中から、どんなところを残したいのか、残していくために自分たちに何ができるかを考え、持続可能な開発についての理解を深めるとともに、知ったことや考えたことを班のメンバーや参加者全員と共有した。また、当日を迎えるにあたって、事前準備として安全についての確認、当日の細かい進行内容の確認、製作物の作成、荷物の運搬、会場設営などを行った。

今回の活動で私は以下の三つの観点を学び、考えさせられた。一つ目は事前準備を行うことの重要性、二つ目は子どもたちの安全確認を行うことの大切さ、三つ目は子どもたちと関わっていくことの難しさである。

一つ目の事前準備を行うことの重要性については、当日の先輩方の無駄のない動きや緊急時の迅速な対応から学んだ。先輩方は、緊急時に誰がどういった対応をするのかについてのマニュアルを作成して、子どもたちが安全にプログラムに参加できるように対策を綿密に考えていた。その姿を見て、私は自分の事前準備に対する認識の甘さを実感させられた。事前準備では当日にどれだけスムーズな進行ができるかより、当日どこまで安全にプログラムを進行していけるかが重視されており、今後行事を企画・運営していく中で常に覚えておくべき指針だと感じた。特に子どもたちの安全だけでなく我々企画者側の安全にも重きを置くことを肝に銘じておきたい。



ならまちでのフィールドワークの様子

二つ目の子どもたちの安全確認を行うことの大切さについては、当日実際に体調不良の子どもを発見し、対応したことから感じた。当日は日差しが強く、帽子を被らせて高頻度で水分・塩分の補給と休憩を促したうえで子どもたちの様子を確認した。今回のフィールドワークでは本来回るべきエリアを全て回ることができなかったが、体調管理を重視して活動した結果、班全員が無事に帰ってくることができた。このことから、目的地に向かうことや指示通りに物事を進めることに執着するのではなく、子どもたちの安全や健康を第一に考えることが最も大事であるということを実感した。

三つ目の子どもたちと関わっていくことの難しさについては、フィールドワークから帰った後の振り返り発表会とESD勉強会の際に実感した。フィールドワークを無事に終え、お昼ご飯も食べて満足きっていた子どもたちに、報告会や勉強会へ促すことは本当に難しかった。私一人の力では意固地になってしまった子どもを再びやる気にすることができず、結局終始先輩に任せきりになってしまった。しかし、やる気を失った子どもたちをどのように促せばよいのかを目の前で見て学ぶことができた。今後の活動で子どもたちと接する機会では、自分の力でもできるように挑戦したい。

今回の活動で、私は初めてイベントを企画する側になった。まだまだ経験不足で未熟なところばかりだが、これからも参画する側の体験をたくさんしていくべきだと思う。より多くの経験を積んで、子どもたちが主体的で深い学びをしていけるようサポートし、緊急時の迅速な対応をしっかりこなせるようになりたい。

子どもとの関わり方を考えるきっかけになった子ども広場

社会科教育専修1回生 足立 繁郁

2018年5月27日に、第1回集まれ！ESD子ども広場が開催された。ESD子ども広場とは、奈良教育大学で行われ、近畿ESDコンソーシアム主催のもと、奈良教育大学ユネスコクラブが中心となって作ったイベントである。奈良市内の小学5、6年生が参加してくれた。子どもたちは、初めて会う子とフィールドワークなどを通じて交流する。私たちは、子どもたち同士が仲良くなるためにどうすればいいのか、子どもたちにESDの学びを深めてもらうにはどうすればいいのかということを意識して活動に取り組んだ。

私は今回のESD子ども広場で二つのことを学んだ。一つ目は、子どもとの接し方である。そして二つ目は、子どもたちの学びをより定着させる方法である。

まず一つ目は子どもとの接し方である。私は、今回の子ども広場では、笑顔で子どもと接し、自分自身で楽しい雰囲気を作り出すことを目標として取り組んだ。子どもたちは最初緊張しており、なかなか心を開いてくれなかったがそれでも笑顔で接し続けることで、子どもたちは気さくに話しかけてくれるようになった。私は子どもたちが心を開いてくれたように感じた。子どもたちを楽しませるためには、まず自分が楽しむことが望ましいのだと感じた。

そして二つ目は、子どもたちの学びをより定着させる方法である。それは子どもたちに教えるときにただ知識を一方向的に伝えるのではなく、子どもたちに質問し答えを考えさせることである。例えば、駒寄せという柵がならまちの家に設置されていた。この柵は、角が取れていて、丸みを帯びていることが多い。この柵に対して子どもたちに、「どうして丸みを帯びているの？」と聞くことにより子どもたちはなぜ丸みを帯びているのか考えるようになる。そして「理由は鹿の角を傷つけないためだよ」と教えることで、ただ鹿の角を傷つけないために丸みを帯びていると一方向的に伝えるより子どもたちは学びを定着させやすいのである。まず自分自身で答えを考えることで、考えた答えが正しくても間違っている子どもたちの頭に残りやすくなるのだ。したがって、子どもに学びを伝えるときは一方向的に情報を伝えるのではなく、効果的に質問し子どもたちに答えを考えさせることが望ましいと感じた。

今回、初めて参画者としてユネスコクラブの活動に参加した。ESDについてもっと学びを深めていく必要があると感じたのと同時に、今回は子どもたちと関わるイベントであったので子どもたちをどう楽しませればよいのかということや、子どもたち同士で仲良くなるためできることは何か、ということを考えるきっかけとなった。今回大きく分けて二つのことを学んだ。その二つをふまえて、自分の中で、子どもとの関わり方を課題に置き、次のイベントに取り組んでいきたいと考えている。



最初に集合した時の写真
子どもたちの緊張した様子がうかがえる。

「集まれ！ESD子ども広場」としての新たな一歩

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

2018年5月27日、奈良教育大学及びならまち周辺をフィールドに、第1回集まれ！ESD子ども広場が開催された。本企画は近畿ESDコンソーシアムの事業の一環として行われる、奈良教育大学ユネスコクラブを中心とした学生による「手作り」の企画である。今回は奈良市内の小学校5校から、小学生10名が参加した。「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」をテーマに設定し、それぞれのプログラムを構成した。ならまちの伝統的な町家建築から先人の知恵や工夫を見つけ出し、それらを現代の私たちはどう受け止め、どう後世に受け継いでいくのかという視点で、持続可能な社会づくりについて考えた。ユネスコクラブの学生のほか、大学の教職員、地域の現職教員、ユネスコクラブの卒業生、地域の施設の職員の方々など、非常に多くの人々の協働によって、無事第1回目の活動を終えることができた。

今回は記念すべき第1回目の活動であり、私は実行委員会及び当日運営班の一員として本企画に携わった。事前の企画段階から当日の開催を通して私が感じたことを、以下の3点で振り返りたい。一つ目は本企画にかけた学生の想いについて、二つ目は後輩たちの活躍について、三つ目は上回生としての関わりについてである。

一つ目に、本企画にかけた学生の想いについてである。昨年度まで私たちは「ESD子どもキャンプ」として、小中学生を対象にESDを体験的に学び合う1泊2日の宿泊企画を行っていた。しかし、昨年度行われた第6回ESD子どもキャンプを経て、企画に携わった学生で何度も協議を重ね、活動の在り方について根本から考え直してきた。その結果、たどり着いたのがこの「集まれ！ESD子ども広場」である。活動を通して参加者の子どもたちに何を伝えたいのか、参画者である私たち学生は何を学びたいのか、参加者の命を預かる自覚を持って、十分に安全管理が



前日準備でのミーティングの様子

できているのか、納得がいくまでたくさんの時間と想いをかけて創り上げてきた。またその一方で、企画の名称や形態が変わっても、色褪せることなく代々伝えられてきたものもある。想いを込めてより良い新しいものを追求してきた私たちだからこそ、代々伝えられてきた伝統も同時に忘れず、これからも前に進んでいきたい。

二つ目に、後輩たちの活躍についてである。本企画の開催に向けて準備を行ってきた実行委員会、また当日の運営や進行を担当した運営班では、2・3回生の学生が中心となって活動した。私は昨年度、ESD子どもキャンプの代表を務めたが、これまでこのような代表や運営面の役割は最上回生が中心に行ってきた。初めて行う新たな活動であったにもかかわらず、今までにない2・3回生を中心とした新しい体制を組織し、企画段階から当日まで熱い想いと責任を持ってやり遂げてくれた後輩たちの活躍を誇らしく思った。何より彼女らにはこの活動にかける強い想いと、互いに支え合う仲間の存在が大きかったように思う。彼女らの姿からたくさんの刺激を受け、たくさんの学びを得ることができた。これからも共に活動する「仲間」として、支え合い、学び合っていきたい。

三つ目に、上回生としての関わりについてである。E S D子どもキャンプの頃から数えると、今回は5年目であった。回を重ねるにつれて企画に対する想いがますます深まっている。昨年度の第6回E S D子どもキャンプを経て、関わってきた学生みんなで膨大な時間と想いをかけてきた。それだけあって、何としてもこの企画を成功させたいと思い、取り組んできた。しかし、こうしてまたこのような企画に携われることを大変嬉しく思うと同時に、その反面、活動や役割に対する「慣れ」が出てきてしまっていることも感じた。その「慣れ」が、仕事に対する気持ちの甘さや中途半端さを生んでしまっていた。大学院生となった自分は、自分が思っている以上に発言や行動に影響力があり、自分の軽率な発言や行動が後輩たちに影響を与えてしまっているということに気付かされた。今回私は「活動班チーフリーダー」という役職を務め、学生のミーティングの中でリーダーの心得として「自分たちの行動は子どもたちからよく見られている」という話をしたが、まさに自分の行動も、後輩たちからよく見られている。その責任の重大さを強く感じた。このことに先輩が気付かせてくださったおかげで、自分の関わり方を見つめなおすことができた。目先のことや周りのことだけでなく、企画全体や組織全体、後輩たちの将来などをより広く考え、自分の発言や行動の一つひとつを意識しなければいけないと感じた。上回生としての関わり方は思っていた以上に難しく、考えさせられることの連続だった。大学院生として関わるこれからの活動において、常に自分の置かれている役割をきちんと自覚し、行動していきたい。

以上3点が、本企画を通して私が感じたことである。「E S D子どもキャンプ」として代々受け継がれてきた想いが、「集まれ！E S D子ども広場」として新たな一歩を踏み出した。この企画を通して一人でも多くの子どもが身近な地域や社会に目を向け、持続可能な社会づくりの担い手になってくれること、また企画に関わる学生がE S Dを実践できる優れた教員になることを願っている。私自身ももう一度自分の関わり方を見つめ直し、意識して活動に取り組みたい。



みんな笑顔で掛け声「まちやー！」

第1回集まれ！ESD子ども広場から学んだこと

心理学専修3回生 谷村 和佳奈

平成30年5月27日に第1回集まれ！ESD子ども広場が奈良教育大学で行われた。今回のテーマは「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」であった。小学5年生と6年生の子どもたちと共に、そのテーマにそって1日活動を行った。

今回の子ども広場を通して気づいたこと、学んだことが二つある。一つ目は活動班の子ども同士の関わり合いについて、二つ目は企画班での役割分担についてである。

一つ目に、活動班の子ども同士の関わりについてである。私は今回、班内の子ども同士の関係性がうまく築けていなかったと思う。学生と子どもが一对で話したり、男の子が班内の女の子たちと話せていなかったりした。その原因は、今回の活動は昨年までの子どもキャンプとは異なり、活動するのは1日だけであったこと、班内の子どもたちの男女比が1：3で男の子が一人であったこと、班内の学生同士の関係性がしっかり築けていなかったことが挙げられる。活動時間が少ないことや男の子が一人であったことはどうすることもできない。そこで、改善できると思う点は、活動班内の学生同士の関係をしっかり築いておくことである。班内の学生同士で事前に集まる機会が何度かあったが、全員が集まったのは当日だけであった。集まる機会を増やし、お互いのことをよく知り、同じ思いを持って参加することが大切なことであると思った。学生同士の関係性ができていれば、もう少し、子どもたちにより働きかけを学生全体ですることができたのではないかと思う。



オリエンテーションでの1班の写真

二つ目は、企画班での役割分担についてである。私は企画班では、広報班に参加した。広報班の主な仕事はチラシを作ることである。メンバーは二人であったが、なかなか集まることができなかった。そのため、今回のチラシのデザインは一人で行った。しかし、良いものを作るには他の人の意見を聞いたり、様々な視点の考えを出し合ったりすることで、アイデアを練り直していく必要があると思った。役割分担をすることは、効率的であったり、自分の得意なことを活かしたりするというメリットがあるかもしれないが、そこから分担したものを一つのものに合わせるという作業をしなければ、ただ個人で行っただけになってしまう。今回はその状態であったと思う。もう少し集まる時間を取って、お互いの意見を言う機会を持つべきであったと思う。

今回は昨年までとは異なることが多くあり、実際に行ってみて、良い点も改善点も多く見つけることができた活動であった。個人的には反省点や改善点が多くあった。しかし、子どもたちがフィールドワーク中やESD勉強会中にたくさんのメモを取って、一生懸命活動してくれている姿をみることができた。さらに子どもたちが寄せ書きに「第2回も来てみたい」と書いてくれた。12月に第2回集まれ！ESD子ども広場が行われるので、そのときに同じような反省点が出ないようにするために、しっかり今回出た改善点を見直していきたい。

チーム・ユネスコクラブとして

教職開発専攻 大学院2回生 谷内 裕也

2018年5月27日、奈良教育大学にて「第1回集まれ！ESD子ども広場」が開催された。本企画は、近畿ESDコンソーシアムの事業として開催されており、近畿圏におけるESD推進の一端を担っている。本企画では、奈良市の児童10名が参加し、ならまちの町家をめぐる活動を通じた持続可能な社会づくりを考えた。

本企画を通して、私は三つのことを学んだ。一つ目に運営という役割について、二つ目に先を読みながら行動することについて、三つ目にチームとして協働することについてである。

一つ目の運営という役割についてだが、これまではESD実践として地域の小学校の野外活動支援にて子どもと関わってきた。しかし、本企画では次のプログラムのために準備をする運営を務めた。運営という役割は初めての経験であり、どのタイミングで準備をするかなどの予想を立てることが困難であった。しかしながら、事前に配布されていた役割分担の記された資料によって自分の役割は全う出来たように感じている。運営という存在が、裏方であっても中心的な役割を担っていることを学習した。

二つ目の先を読みながら行動することについてだが、今までは、先を見通した行動というのが具体的に分からなかった。考えられる理由として、経験の数はもちろんだが、何のために前もってやっておくのかということをしかりと学ぶことができなかったところにあると考えられる。本企画では、当日までに会議が多く設けられており、具体的に何をするのか、何のために行うのがよく分かった。このことによって、当日もすぐに行動することができたと考えている。また、自身を含め、運営を経験したことがない人が運営班に多くいながらも円滑に企画を進めることができたのは、当日までの会議の存在が大いにあると思われる。先を読みながら行動するためには、具体的な目的ならびに行動の内容をあらかじめ共有するということが非常に大切であると学習した。

三つ目のチームとして協働することについては、単に役割を実行するだけでなく、周りとも歩調を合わせながら行うことが大切であると、本企画を通して学習した。本企画では、運営班全員がどのような動きをするのかが記載された資料が事前に配布されていた。このことにより、自分の役割を知るだけでなく周りの班員がどのような動きをするのかを把握することができたので、周りを見ながら行動することを学習したと感じている。班員が困っているなら協力する、計画通りにいかずとも代わりに担うことで運営を円滑に進めるなどの柔軟性が養われたように思われる。

まとめとして、私は上記三つの学びを通して「チーム」の大切さを学習した。奈良教育大学ユネスコクラブというチームには、協力する積極的な姿勢が特徴として見られる。部員一人ひとりがチームの仲間が困っているときに手を差し伸べる積極性や、様々な企画での準備段階からの積極的な関わりを意識して



チーム・ユネスコクラブとして絆を高めた瞬間

いると改めて感じた。「チームとして動くことの大切さ」をこれまで伝えられてきた諸先輩方のように、私も次世代につながるよう伝えていきたいと思う。

運営班として参加したESD子ども広場

国語教育専修1回生 中田 航輔

2018年5月27日、奈良教育大学及びならまち周辺で第1回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回のESD子ども広場では子どもたちと一緒にならまち周辺を散策し、伝統的な町家建築と現代の住居を比較することでESDを体験的に学んだ。私は運営班のメンバーとしてプログラムの進行を支えた。

この企画を通して学んだこと、感じたことを3点述べたい。第1に他人との連携の大切さについて、第2に子どもを楽しませることの意義について、第3に恥を捨てることの重要性についてである。

第1の他人との連携の大切さについてだが、これは持続可能な社会づくりに連携性が欠かせないということである。今回私は運営班として活動班をサポートした。その結果、活動班と運営班どちらの役割も今回の企画に欠かせないものだと感じた。子ども広場の成功は活動班、運営班、そして企画に参加する子ども、地域の方々、その他多くの方々からの協力があったおかげである。また、伝統的な日本家屋にも地域住民と共存して暮らしていくための様々な工夫がなされていた。そうした文化を守っていくために他人との関わりを大切にできる子どもたちを育てられるESDティーチャーが必要だと感じた。

第2の子どもを楽しませることの意義についてだが、持続可能な開発のための教育にはそれに関する事柄を子どもたちに実際に体験させること、そして楽しませることが重要だということ学んだ。私が考えていた以上に子どもは知識欲を持っていた。そのためビンゴ形式でならまちの事を学ぶという企画にも楽しみながら積極的に参加し、学生による日本家屋の解説を真面目に聞いていた。こちらから無理やり情報を押し付けなくても、楽しく学べるようにすれば子どもたちは知識を吸収するというのである。また、子どもは自分にとって身近であると感じられる事柄に大きな関心を抱いていた。ただ単に「にじり戸のこと、どう思う？」と聞くのではなく「にじり戸って〇〇ちゃんの家にもある？あったら便利かな？」と聞くことで、身近なものとして自分の中でイメージしやすくなり、感じたことを沢山話してくれるようになった。楽しみながら体験することで子どもたちは持続可能な社会のことを体感して学習することができる。そこから自分なりの気づきも生まれてくると考えられる。

第3に恥を捨てることの重要性についてだが、このことは子どもと関わるうえで必要であると感じた。今回の子ども広場では、過去にタイムスリップしたという設定でならまちのことを子どもたちと学習した。私は「時空の門番」として現代と過去の境目（という設定）の場所で子どもたちと触れ合った。冷めた反応をされると思っていたのだが、子どもたちは「わあ、過去に来た！」などと言いながら設定を受け入れて楽しんでた。これは私たちが恥ずかしがることなく設定を貫き通した結果だろう。また、ならまちのことを学習して



「お菓子の妖精」になりきって菓子配布

きた子どもたちにご褒美としてお菓子を渡す際、私は「お菓子の妖精」であるという設定になりきってお菓子を配った。これが割合好評であった。恥を捨て、自分自身でも楽しんでキャラクターになりきったからこそ子どもたちに楽しんでもらえたのだと思う。また、普段から子どもと接するときには恥じらいの気持ちを捨てるのが大事だと考えられる。今回は私から子どもに話しかけることをためらってしまった。だが、年上の知らない男性と一緒に居る子どもの方が緊張しているはずである。臆することなくこちらから話しかけに行くべきだったと反省している。

今、持続可能な社会づくりが求められている。そのために他者との関わりが大事である。本活動では子どもを楽しませること、そのために自分も恥を捨て楽しむことが大切であると学んだ。

第1回集まれ！ESD子ども広場を終えて

社会科教育専修2回生 仲村 幸奈

平成30年5月27日に、「第1回集まれ！ESD子ども広場」が開催された。前年度までは、ESD子どもキャンプという企画を行っていたが、たくさんのお話し合いを重ね、今年度は泊りがけではなく1日の日帰り企画となる「集まれ！ESD子ども広場」の開催に至った。

私は、この企画を通して学んだ二つのことについて述べたい。一つ目に周りを見て行動すること、二つ目に全力で最後までやりきることにについてだ。

まず、一つ目の周りを見て行動することについてである。私は、今回の活動に参加するうえでの目標として、周りを見て行動することを掲げていた。私は、必死にやろうとするがゆえに、視野が狭くなり、一人で行動してしまうことが多々ある。そんな自分を克服したかったのだ。結果として、この私の目標は達成できたと思う。司会進行として前に立っているときには、子どもや学生の顔をしっかりと見るように心がけた。また、運営として活動を後ろから見ているときには、ただ流れを見るのではなく一人ひとりの行動や様子を見ながら、頭の中で次に何があるのかを考えながら行動した。そうすることで、落ち着いて状況を把握することができ、予定にない動きにも臨機応変に対応することができた。周りを見ることで、同回生や先輩方が頑張っている姿も見ることができ、自分自身のやる気にも繋がった。また、周りの人の支えがあって私は行動することができたのだと改めて気付いた。



円陣を組んで気持ちを一つに

次に、二つ目の全力で最後までやりきることにについてである。私は、初めての企画、そして運営への初めての挑戦ということもあり、分からないことも多く戸惑うこともあった。しかし、運営としての打ち合わせやしおり作りなどの事務的な作業はもちろんのこと、当日歌うテーマソングや進行の練習など、準備の段階から全力で取り組むことを心掛けた。



全員で「まちやー！」

そして当日、準備段階を超えるくらい全力を出し切り、楽しかったと終えることができた。それは、私だけが頑張ったからではなく、当日まで一緒に関わってきた仲間たち全員が全力でやりきるという想いで取り組んだため、一人ひとり安心して楽しみながら頑張りと達成できたのだと考えている。今回の活動は、成功だったと胸を張って私は言えるが、もちろん反省点もある。しかし、それらの反省点を次に必ず生かし、より良いものを作ろうと、もうすでに気持ちが前を向いている。私たち

ユネスコクラブなら、もっと良いものを創れると、今回の活動を含め、その他様々な活動を共にするうえで感じている。そのため、次回も全員で、全力で最後までやりきり、今回を遥かに超す最高のものを創りたい。

以上、二つが今回の活動で私が学んだことである。今回学んだことは、必ず忘れずに次回に繋げたい。また次回では、私が今回学んだことを周りにいる人たちに伝えていき、私自身がみんなのお手本になりたい。そのために、私自身の企画力、運営力、周りを見る力や子どもとの関わり方などのスキルアップを私生活や様々な活動を通して培っていきたい。

児童・学生にとっての「第1回集まれ！ESD子ども広場」の価値

心理学専修3回生 藤井 理沙

2018年5月27日、奈良教育大学にて第1回集まれ！ESD子ども広場が開催された。ならまの町家について、昔の人の知恵や工夫から、当時の人々がどのように暮らしやすい環境を作っていたのかを学ぶことができるコンテンツが豊富に扱われた。

私が本活動で学んだことは大きく三つある。一つ目は本活動が参加者である児童をつなぐ場になっていること、二つ目はオリエンテーションがもつ役割の大きさ、三つ目は学生が参加者以上に楽しんで企画を作り上げることの大切さである。

まず一つ目の、本活動が参加者である児童をつなぐ場になっていることについてである。当日の朝から本活動が終了する時間まで、1日中子どもたちと話したり、子どもたちの様子を観察したりするなかで、本活動は異なる学校に通う児童らをつなぎ、児童らがともに悩み、共に学び、共に笑える場になっていると強く感じた。特にフィールドワークではそのことを強く感じた。私は3班の学生の一人として、二人の参加児童の様子を観察した。二人は初対面であったため、顔を合わせてすぐには二人きりで会話をすることができなかった。しかしフィールドワークに出ると、地図をどのように読み、どのように進めばよいかという相談を二人が交わしており、少しずつではあるが、協力して目的を達成しようとする姿を見ることができた。班に児童が二人しかいなかったため、それは必然であるということも考えられるが、二人と一緒に悩み、答えを出す様子を見ると、人数の問題ではなく本活動の企画そのものが子どもたちに影響をあたえていると考えられた。

次に二つ目の、オリエンテーションがもつ役割の大きさについてである。オリエンテーションの時間は、本格的に活動が始まる前のアイスブレイキングであるが、これを子どもたちに分かりやすく、もし子どもたちがうまくできなくても自然と笑顔になれるよう作らなければ、子どもたちは緊張したまま時間を過ごすことになってしまう。そうなってしまうと、子どもたちの間でできるはずであった思考や会話ができなくなる。他校の児童とのつながりを持ち、一緒に考えること



後出しじゃんけんの様子

ができる機会であるのに、それを無駄にしてしまうことになってしまう。それは、子どもたちが感じる本活動の価値にも響いてしまう。ところが、当日のオリエンテーションでは子どもたちの笑顔を見ることができた。前に立ってゲームを進めると、徐々に緊張がほぐれるように、子どもたちの笑顔が増えていることが分かり、嬉しかった。しかし、その一方で課題も見つかった。私が行った「後出しじゃんけん」が本活動での最初のゲームということもあり、私は緊張してしまい、キャラクターを全力で演じることができなかった。また、じゃんけんが終わってからのゲームでは、気が緩んでしまったと感じている。今後オリエンテーションを担当することがあれば、オリエンテーション全体を通して、一つのチームとして活動することを意識したい。班の輪をしっかりとつなぐことが、子どもたちの輪をより強くつなぐことになると考える。

最後に三つ目の、学生が参加者以上に楽しんで企画を作り上げることの大切さについてである。私が本活動で最も強く感じたのが、学生が楽しんで参加することの重要性である。フィールドワークの後半では学生に疲れが見え始めたが、笑顔でいることに努めていた。子どもたちからも疲れた様子を感じられたが、最後まで笑顔が見られたため、子どもたちは学生の様子を見て、想像以上に他者の感情を読み取ることができていると感じた。参加児童の多くが小学校高学年であり、発達段階から考え

ると、対象との間に距離をおいた分析ができるようになったり、他者の視点に対する理解を持つことができるようになったりする。本活動においても、子どもが学生の様子を見て影響されたり、さらに気をつかわせてしまったりということも考えられる。企画段階から不安よりも楽しさを大切にして学生が活動を続けたことで、当日も1日中笑顔で楽しく企画をやり遂げ、子どもたちも徐々に口数が増え、帰り際まで笑顔を見せてくれていたため、純粋に本活動を楽しむことができたのではないかと考える。

ここまで述べてきたように、本活動では子どもたちの様子から多くを考え、学ぶことができた。私が個人の目標に掲げていた積極的な関わりを持つことは、自分から話題を提供することがうまくできなかつたため、不十分であったと感じるが、観察力については満足できる程度に意識することができたのではないかと考える。今後も、子どもたちはもちろん、様々な人と関わることで学び、視野を広げたい。

積極性

英語教育専修1回生 部谷 富有

2018年5月27日（日）、次世代教員養成センター2号館で、第1回集まれ！ESD子ども広場が行われ、私は活動班1班の学生リーダーとして参加した。テーマは「ならまちの町家」であった。朝8時半から入場受付が開始され、内容はオリエンテーションと奈良町のフィールドワーク、そしてそれらの振り返りだった。

今回の企画で私が学んだことは、三つある。一つ目に繰り返すことの大切さ、二つ目に雰囲気づくりの大切さ、三つ目に準備の大切さである。

一つ目の繰り返すことの大切さについてだが、そう感じた理由は歌である。当日、ユネスコクラブの先輩方自作のオリジナルソングを歌う場面が多くあった。最初、子どもたちは歌詞を覚えておらず、自信がなさそうに小さな声で歌っていた。しかし1日を通し何回も歌うことで歌詞を覚え、最後には子どもたちは大きな声で楽しそうに歌っていた。歌詞カードを見ずに歌うことで視線が上を向き表情も明るくなっていった。だから私は、繰り返し学び物事を覚えることは、あらゆることにおいてプラスに働くのではないかと感じた。

二つ目の雰囲気づくりの大切さについてだが、そう感じた理由は掛け声である。当日、当企画のテーマである「町家」という言葉を発する場面が多くあった。その場にいる全員で「町家ー！」と大きな声で言うことで自然と笑顔になり、一体感が生まれた。また、騒がしくなっているような状況でも掛け声を行うことでその後静かになり、話し手が話しやすい状況になった。掛け声にはその場をまとめることもできると感じた。これらのような役割を持つ掛け声は、今後の企画などでも積極的に使っていきべきだと思う。

三つ目の準備の大切さについてだが、そう感じた理由は熱中症対策である。当日は陽射しも強く暑い日であった。しかし体調が悪くなった子どもは数名だけで、多くの子どもたちは大事なく企画を楽しめた。それはやはり定期的な水分補給の呼びかけ、スポーツドリンクや塩分補給飴の配布、そして体調不良者が出た時の緊急時対応マニュアルなどのおかげであると思う。これらを実行するには相当の時間と労力をかけた準備が必要である。しかしそれを行えば、当日企画をスムーズに行うことができる。予定を思うように実行するためにはいかに綿密な準備をするかが大切かを学んだ。

今回私はこの企画に参加できて本当によかったと思う。なぜなら子どもたちの笑顔が見られ、今までの自分にはない視点を得ることができ、学べたからである。最初は難しく苦手に思えることでも繰り返し挑むことでできることが増える。一体感は楽しさを生む。準備はプラスを呼ぶ。これから私自身が行動するうえでとても大切な学びである。



オリエンテーションをしているところ



みんなですぐにいただきます！

視野を広げられた第1回集まれ！ESD子ども広場

家庭科専修2回生 北中 佳子

2018年5月27日、奈良教育大学とその周辺で第1回集まれ！ESD子ども広場が行われた。ESD子ども広場とは日帰りでESDを体験的に学ぶイベントである。今回の活動ではならまちの町家をテーマとし伝統や文化を守っていくにはどうすれば良いかという視点から持続可能な社会づくりについて考えるものであった。

今回の活動で、私は三つのことを学んだ。一つ目に学生リーダー長を経験して、二つ目に子どもたちの命を預かる責任について、そして三つ目に子どもたち同士のコミュニケーションについてこれら3点である。

一つ目に学生リーダー長を経験して私が学んだことについて述べたいと思う。私は今回の活動で初めて学生リーダーの中でも班長を担当するという経験をする事ができた。昨年のESD子どもキャンプでは先輩方の背中を見ながら学生リーダーを経験したが、今回は自分自身が班長として班、子ども達、班の学生リーダーを見ないといけないという立場に立ち、様々なことを学べた。一番私が学べたと思うことは、周りを見るということの大切さである。全体の流れを頭に入れながら自分の班の状況を考えたり、班の子どもたち一人に執着せず全体を見たり、周りを見て臨機応変に動くことは本当に難しかったが、それは子どもたちの学びをサポートするのに大切なことであるということが分かった。学生リーダーの班長を経験することで視野を広げることができた。

二つ目は、子どもの命を預かる責任についてである。子どもの体調管理には最善の注意をはらって活動していたが、その中で学んだことは子どもが自分の体調が悪くても中々言わないということだ。心を開けていない人に対してはなおさらである。私は始めしんどくはないかという声掛けをしていたが、それでは本当のことを聞けていない気がした。なので、途中から具体的な声掛けにしたところ少しずつ子どもたちの体の状態について聞くことができた。子ども達には具体的な声掛けのほうが反応しやすいということ、子どもたちとの信頼関係はどの場面においても必要であることを実感した。

三つ目は子どもたち同士のコミュニケーションについてである。私たちの班での目標の中には班の子どもたち同士にコミュニケーションをたくさんとってもらおうということが含まれていた。しかし、思っていたよりも難しく上手くコミュニケーションをとれるように誘導できなかった。後半になり少しずつ班内で喋る光景は見られたが打ち解けるほどまではいくことが出来なかった。試行錯誤を繰り返す中で子どもたちが一番話せていたと思うのは、互いに共通している話題であるときであった。また、活動中では役割を分担することでコミュニケーションを取り合っていたように思えた。これらを通して学んだことは子どもたち同士のコミュニケーションに関しては、共通した話題や子どもたち同士を結び付ける立ち回りが必要であるということである。

これら三つのことを今回の活動を通して学ぶことができ、去年の子どもキャンプの時よりも視野を広げることができた。今回の経験を活かしこれからの活動に取り組んでいきたいと思う。



発表の準備を行っている様子

子どもと接する難しさを感じた第1回集まれ！ESD子ども広場 報告書

社会科教育専修1回生 堀田 泰斗

2018年5月27日、奈良教育大学と周辺のならまちを使って第1回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回の活動では、「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」というテーマをもとに、小学生とともにならまちを散策し、現在にも残る奈良の歴史ある町家を参考に過去の暮らしを学び、過去と今を比較し、私たちが未来に残したい暮らしの工夫について学習した。学習法としては、三つの班に分かれてそれぞれ散策を行い、大学に戻って学んだことをまとめ、発表を行った。

今回の活動を通じて学んだこと、感じたことを3点述べたい。第1に子どもとの接し方について、第2に視野の広さについて、第3に楽しむことについてである。

第1の子どもとの接し方についてだが、私は今回初めて小学生と接する活動に参加し、自分が思っていた以上に子どもは繊細で、子どもとの接し方に難しさを感じた。どうしたら心を開いてくれるのか、自分なりに活動中にも試行錯誤したが、最後まで心を開いてくれなかった子どももいて、今後の課題となった。これからはもう少し積極的に子どもに接して子どもとの距離を縮められるようにしていきたい。

第2に視野の広さについてだが、今回の活動で自身の視野の狭さを実感した。一人の子どもと接しているとそこに精一杯になってしまい、他の子どもの様子まで見ることができなかった。実際、活動中に2名の子どもが体調不良となったが、最初、気づいてあげることができなかった。今後、視野を広く持ち、周りを見て冷静に行動できるようにしていかなければならない。

第3に楽しむことについてである。子どもは私たち大学生の様子を見ている。したがって私たちが全力で楽しむことで子どもたちにもそれが伝わる。しかし、私自身のことを振り返ってみると、もちろん楽しかったが、もっと声を張れた場面や、積極的に行動できた場面はあった。子どもに態度で示すということが自分に足りなかったと感じた。この課題は自身の意識次第で改善されることであるから、常に意識して行動していきたい。

今回、初めて子どもと接する活動を行って、自分が思っていた以上の難しさを感じるとともに、課題も多く見つかった。次回以降の活動で課題を一つずつ改善していくことが必要である。しかし、今回の活動で私は同時にやりがいも感じる事ができた。最初緊張してあまり話さなかった子どもが笑顔で私に話しかけてくれて、頼りにしてきた時はとてもやりがいを感じた。子どもたちともっと仲良くなるにはどうすればいいか、発表の準備をどうサポートすればいいか、課題は尽きないがやりがいも感じる事ができた今回の活動は私にとってとても貴重な経験だった。今回の活動を参考に、これからの活動にも励んでいきたい。



2班のみんな

第1回集まれ！ESD子ども広場に参加して

英語教育専修4回生 野瀬 佳吾

2018年5月27日、第1回集まれ！ESD子ども広場が開催された。本活動は、ユネスコクラブが主体となり、これまでに6度開催してきたESD子どもキャンプに代わる、新たなESD実践である。ESD子どもキャンプとの最も大きな違いは開催期間にある。夏期に1泊2日で行うキャンプという形を見直し、過ごしやすい気候下での日帰りイベントを年に複数回行う、という形に変えた。

これまで私は子どもと直接関わる活動班としてESD子どもキャンプに参加してきたが、本活動ではその活動班を支える運営班として参加した。このような新しい試みばかりだった本活動を通して、私が学んだこと、感じたことについて三つ、以下に述べたい。第1に子どもの現状について、第2に支えられることへの感謝について、第3に共に学ぶことについてである。

第1の子どもの現状についてだが、やはり今の子どもは体力が十分になく、忍耐力にも欠けているという印象を受けた。半日だけの活動にも関わらず、体調不良を訴えたり、集中を継続できなかつたりする子どもがいたことがその根拠である。だからといって、今の子どもが悪いというわけではない。与えられた課題に前向きに取り組む姿や、知識、感受性の豊かさには非常に感心させられた。今回、子どもが体調不良を訴えたり、集中力を欠いたりした原因としては、企画された活動外の時間で騒いだりしていたことが考えられる。こういった事態を防ぐためにも、学生がしっかり統率をとるべきだと考える。今後の活動を見越したうえで、望ましくないとされる行動に対して、適切な指示を出すべきである。そうすれば、先に述べた子どものもつ良さをより引き出すことができるだろう。

第2の支えられることへの感謝についてだが、人は常に誰かに支えてもらっているということを感じた1日だった。私はこれまで活動班として子どもと直接関わってきたが、運営班の支えには毎年感謝している。しかし、今年は運営班として活動班を支える役割を担い、行動する中で、運営班の働きの重要性を現場で改めて感じる事ができた。同時に、私も支えられていたという事実を重く受け止めることができ、改めて深く感謝したいと思えた。また、運営班としても、大学や現職の小学校の先生方、OB、OGさんたちの支えがなければ活動班を支えることはできなかったという事実に対しても感謝したい。

第3の共に学ぶことについてだが、一人ではなく、共に学び、考えることは楽しいと感じることができた。私は運営班としてこの本活動に参加したものの、活動班の学生が体調不良を訴えたことから、最後のESD勉強会は活動班に加わった。これまでは始めから活動班として子どもと関わってきた私にとって、運営班としての本活動では少しの寂しささえも感じていた。そんな私は、子どもと共に、どのようにしてESDを実践していくのか、また、フィールドワークで発見したことをどのようにしてみんなに伝えようかと考えることに、これまで以上の喜びを見出すことができた。

最後に私の提案を述べたい。次も同時期に本活動を開催することがあるのならば、やはり体力の低さが課題になるだろう。そこで私が提示するのは、企画者である学生の体力も考慮した、余裕のあるプログラムを企画することだ。いくら事前の準備を入念にしてきたとしても、当日、体調不良等で離脱してしまうようでは元も子もない。というのも、学生の離脱が活動に影響を与えたり、子どもに不安を感じさせたりしかねないからである。もし活動内容を今回以上に削減することができないのであれば、学生の体力づくりのための企画があってもいいだろう。



運営班として子どもを迎え入れる

発見と今後の展望

英語教育専修2回生 櫛 乃里花

平成30年5月27日、近畿ESDコンソーシアム主催の「集まれ！ESD子ども広場」の記念すべき第1回が行われた。このイベントは、前年度まで6年連続で行われていた「ESD子どもキャンプ」を経て新たに企画された日帰りのイベントである。このイベントには、前年度までのキャンプ同様テーマがあり、第1回のテーマは「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」であった。子どもたちは、大学生とともにならまちを探索し、町家に施された工夫を探すビンゴやならまち格子の家・にぎわいの家での見学を楽しんだ。探索の後は、学んだことをもとに、持続可能な社会を実現させるために先人たちを見習って自分たちができる暮らしの工夫について考えた。

私は、この「集まれ！ESD子ども広場」の第1回の開催にあたり、準備段階の実行委員、また当日の運営班として関わった。企画班にも活動班にも入らず、運営班一本でイベントに携わるのはこれが初めてであった。その中で自分が新たに発見したこと、考えたことについて以下の三つの点から振り返りたいと思う。第1に運営班としての関わり方について、第2に周りの人の成長について、第3に次回以降への抱負についてである。



真剣な様子で町家を見学する子どもたち

第1に、運営班としての関わり方についてであるが、正直なところ悔しいという思いが強く残った。具体的に悔しかったことは二つあり、まず一つ目は自分の想いをこのイベントに注ぎきれなかったことである。今までのイベントでは、私は主にキャンプファイヤーの企画に携わらせていただいていた。キャンプファイヤーを通して、自分の想いや伝えたいことを表現することができていたので、自分の想いを明確にして参加することが出来ていた。しかし今回は、子どもたちの前に出て何かをしたり話をしたりする機会はなく、そのためにどのような心構えで取り組めばいいかが最後まで分からなかった。子どもたちにどうなって欲しいのか、何を感じて欲しいのかを自分の中で明確にできず、運営班の仕事もほとんど義務感でこなしていた。そんな自分に何より腹立たしさと悔しさを感じ、結局改善策は見つけられなかった。二つ目は、与えられた役割以上の仕事をするができなかったことである。今回、事前に割り振られていた仕事はやり遂げたものの、自分から仕事を見つけて行動することが出来なかった。特に、体調不良の学生が出たときの対応は、ほとんどユネスコクラブ卒業生の先輩方に頼ってしまった。しんどそうな学生の姿を見てうまく言葉をかけることもできず、うろたえてしまったのが本当に悔しかった。前日の準備の際に、「人を支え、物を支え、心を支えたい」と目標を掲げていたにも関わらず、実行することができなかった。以上の二つから、運営の仕事が予想以上に大変なことを実感したとともに、次回への目標も出来た。まずは動向表を完璧に頭に叩き込むこと。次に動向表に書かれているもの以外で自分にできる仕事を想定すること。次回はこのプロセスを踏んで、与えられた以上の役割をこなし、当日のトラブルにも冷静に対処したいと思う。

第2に、周りの人の成長についてであるが、今回は運営班として全体を見ていたおかげで、他の学生や来てくれた子どもたちの成長をじっくりと見ることができた。特にこの春から活動を共にしている1回生の成長を肌で感じることができ、とても嬉しく思った。子どもたちと関わる機会が今までになかった

たという人が多かったにも関わらず、子どもたちに真摯に接し、周りを見て自分から行動している姿を何度も見かけた。会話の中で子どもたちを楽しませたり、きちんとするべき場面では厳しく注意したりと、その場その場に適した対応を取っていた学生が多かったように思う。最初は緊張気味だった子どもたちも徐々に心を開き、イベントが終わる頃にはすっかり打ち解けている様子であった。1回生の予想以上のポテンシャルの高さに、これからの活躍への期待が高まった。一方で、子どもたちの成長に関して私が実感できたのはごくわずかであった。最初から最後まであまり表情や態度が変わらない子どもが何人か見受けられた。日帰りのイベントを企画するにあたって、「子どもたちの学びが少なくなるのではないか」「子どもたちをどこまで変化させられるだろうか」と懸念する声も多くあがっていたが、まさにその問題が浮き彫りになったのではないかと感じた。また全体の雰囲気として、学生は十分に達成感を感じていたが、それらが子どもたち自身の楽しみや成長に繋がったかどうかは微妙だったように思う。学生は面白いと感じて企画していても、子どもたちの反応が思っていたものではなかったという場面もしばしば見られた。学生が必死になって企画するばかりではなく、当日来てくれる子どもたちの楽しみ・成長を第一に考える企画作りが今後必要になるのではないかと考えた。

第3に、次回以降への抱負であるが、第1、第2で述べたような課題をどう乗り越えていくかを考えていく必要があると思う。第1の自分自身の気持ちの問題への解決策としては、経験を積み運営の仕事に慣れる、運営であっても子どもたちと積極的に関わりに行く、自分なりの企画への貢献の仕方を見つける、などが考えられる。総じて、自分から行動を起こしていくことが必須であると言える。第2の企画全体としての課題の解決策は、まず子どもたちのことを知ることから始まるのではないだろうか。具体的には、子どもたちにアンケートをとるなどして何が子どもたちにとって魅力なのかを探る、というのを案として挙げてみたい。最近の流行や興味の対象を知るには、私たちが考えるより子どもたち自身に聞くほうがはるかに早くことが運ぶはずである。

今回の報告書を書くにあたって一人ひとりが様々な課題を発見したと思うが、ただ発見に留めておくだけでは不十分であると考えている。ここで見つかった課題について妥協せず話し合い改善策を探ることが私たちに次に求められる行動であると思う。またそれが、明日からの行動を変えるまさにESDの「行動化」の理念ではないかと思う。



いきいきと全体をリードする運営班の学生

近畿 ESD コンソーシアム 第2回「集まれ！ESD 子ども広場」実施報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

1. 目的

奈良教育大学では、『地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』の一環として、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生を対象とした、ESD を体験的に学ぶ1泊2日の宿泊活動として、「ESD 子どもキャンプ」をこれまでに6回実施してきた。

平成30年度は、近畿 ESD コンソーシアム事業として日帰りで ESD を体験的に学ぶ「集まれ！ ESD 子ども広場」を実施している（5月と12月に実施）。

5月：「ならまちの町家～昔の人の知恵や工夫から学ぼう～」(後援：奈良市教育委員会)

12月：「灯す～あなたの心に、私の心に～」(後援申請中：奈良市教育委員会)

また、本事業の目的は次の二つである。

- (1) ESD (持続可能な開発のための教育) を楽しく体験的に学び合う。
- (2) 子どもと関わる活動を通して、教員を目指す上で必要な資質・能力を身につける。

2. 開催日 平成30年12月2日(日)

3. 開催場所 奈良教育大学キャンパス

4. 参加者 小学生 16人(奈良県内の小学校より)
中学生 1人(奈良市内の中学校より)
大学生・大学院生 38人
教職員 9人(大学・近隣の小中学校等より)

5. テーマ 「灯す～あなたの心に、私の心に～」

6. 日程

時間	活動
8:30	参加者受付開始
9:00～10:00	オリエンテーション ○アイスブレイキング ○班活動の時間 ○テーマソング練習
10:15～13:15	キャンパスフィールドワーク「奈教の果てまでヒロバQ！」
13:15～13:30	集合写真撮影
13:30～13:45	昼食
13:45～14:30	ESD勉強会
14:30～16:20	キャンドルホルダー作成
16:30～17:45	キャンドルナイト
17:45～18:15	さよならの集い
18:15	解散

7. 参加学生の役割分担

(企画班)

◎：代表

実行委員会	◎丸本	仲村	櫛	下原	中田	東谷
	山本	奥平	林	取違	下垣内	谷垣
オリエンテーション	◎畑下	津森	田中	藤井ま	西條	
キャンパスフィールドワーク	◎森本	谷垣	坂本	仲村	小倉	足立
キャンドルホルダー作成	◎種瀬	谷内	佐野	伊藤	坂元	桑田
	本江	奥田				
キャンドルナイト	◎木多	◎後藤	◎櫛	糸	木村	野瀬
	北中	栞山				

(当日)

◎：代表 ○：副代表

運営班スタッフ	総括・進行・フリー	◎丸本	○谷垣	○仲村	○下原
		櫛	奥平		
	裏方	◎木村	糸	東谷	取違
	活動班サポート	◎坂本	下垣内	山本	桑田
	プログラム進行サポート	◎小倉	種瀬	本江	木多
活動班リーダー	1班	◎北中	谷内	坂元	中田
	2班	◎後藤	佐野	藤井ま	栞山
	3班	◎畑下	伊藤	田中	足立
	4班	◎西條	森本	野瀬	津森

8. 活動の概要

(1) オリエンテーション

オリエンテーションでは、今日初めて出会った友達と親睦を深め、そして緊張をほぐす目的の元、いくつかのアイスブレイキングを行った。アイスブレイキングでは、「明かり」に重きを置いた導入などを行い、子どもたちに楽しくテーマを理解してもらおうと考え様々な工夫を行った。また、12月開催だということもあり、クリスマスツリーなどを用いて季節感も大切にしました。アイスブレイキングの後には、班活動の時間を設け、班の名前や子どもリーダーなどを決めた。これには、活動班の仲を深め、士気を高める役割があった。個性溢れる名前などがたくさんあり、非常に面白かった。(仲村)



参加者みんなで「楽しむぞ！」

(2) キャンパスフィールドワーク

キャンパスフィールドワークでは「奈教の果てまでヒロバQ!」というタイトルのもと、当たり前を問い直すためのミッションを五つ組み立てた。「あたりまえ星人」からの挑戦状として、子どもたちにとって当たり前である「明かり」「水」「人」「勉強」「情報」を奪われるという設定のもと、その当たり前を取り返すために大学キャンパス内でフィールドワークを行った。「あたり前のものを失ったとき、どうやって生きていくのか」という問いから、子どもたちに「もやもやした気持ち」を抱かせ、次のESD勉強会へとつなげた。(森本)



ミッションにチャレンジする様子

(3) ESD 勉強会

ESD 勉強会では、災害によって「当たり前」が奪われる状況やそれによる心理的な被害を想定し、普段から災害に備える大切さについて学んだ。子どもたちは、イラストが描かれたボードを手に普段の生活と災害時の状況を比べ、自分ならどんな気持ちになるか、どんな行動をとるかについて真剣に話し合った。実施後に学生間でいった振り返りでは、以下のような反省点が上がった。①自分の意見を言うのが得意な子とそうでない子があり、発言の機会が偏ったり話し合いが行き詰ったりした。②プレゼン形式で学生が一方的に話を進めるのではなく、子どもの発言を拾いながら内容を深めるべきだった。③ESD と防災の関連についてもっと言及すべきだった。他にも改善点は多々あったものの、学生にとっては防災教育を行う難しさと責任の重さを実感する機会となり、子どもたちにとっては普段から災害への意識を持つ必要性を学ぶ機会となり、非常に有意義な企画となった。(櫛)



「備え」の大切さを学ぶ子どもたち

(4) キャンドルホルダー作成

この時間で子どもたちは、1日の活動を通して学んだことを「キャンドルホルダー」という形で表した。子どもたちは、自分の個性をキャンドルホルダーという形に表すこと、また学んだこと・感じたこと・考えたことを整理して漢字に表した。この時間を通して、学生は安全性・時間構成・個性の出し方・役割分担・他班との連



世界に一つだけのキャンドルホルダー

携など、多角的・多面的な視点から一つの企画をみんなで作るという難しさと達成感、そして連携の大切さを学んだ。また、子どもたちは自分の作品を真剣に作成しており、同じ道具度材料でも、それぞれが自分の個性を出し、自分色の作品を完成させていた。一つの作品に1日を通して学んだことや、個性を詰め込められたのは良かった。(種瀬)

(5) キャンドルナイト

本企画では、子どもたちが作ったキャンドルホルダーに明かりを灯し、その明かりを全員で囲みながらゲームやスタンプなどを行った。最後には一日の振り返りやまとめを行い、一日の活動を通して学んだこと・感じたことを印象づけた。本企画は心に生まれた「感謝」をお互いに伝えあうことを目的としていた。子どもたちが、ESD勉強会で学んだことをふまえ身の回りの「当たり前」に感謝し、その気持ちを言葉で示せるようになることがねらいであった。また、一日を共に過ごした班員とも感謝の気持ちを伝え合って欲しいと思い、学生間で雰囲気づくりを徹底した。実際に行ってみると、数人ではあったが当たり前への感謝の気持ちに気づいてくれた子どもの姿があった。しかしながら、子どもたちから感謝の言葉を引き出すのは大変難しいことであったように感じた。「楽しかった」という感想が多くみられたことから、一日のイベントを楽しいものとして印象づけることはできたのではないかと感じている。(櫓)



みんなで明かりを灯したキャンドルナイト

(6) さよならの集い

本企画では、一日の活動を総まとめし、全員で別れを惜しみながらテーマソングを歌った。オリエンテーションの時に比べると、子どもたちは歌詞にもメロディーにも慣れ、大きな声と笑顔で歌えるようになっていた。一日を通して何度も歌った成果をしっかりと感じる事ができたように思う。また、ユネスコクラブ代表や本学副学長が、迎えに来てくださった保護者への挨拶を行った。子どもたちの命を信頼して預けていただいたことへの感謝を改めて感じた。最後は子どもたち一人ひとりを出口まで見送った。学生は、大きな怪我をさせることなく子どもたち全員を無事に帰すことができた安心感と達成感を噛み締めていた。(櫓)



1日の思い出を振り返るムービー

9. 成果と課題

【成果】

- 「当たり前は当たり前ではない」ということに気づくことができていると感じる子どもの発言を耳にすることができた。 ⇒本企画のテーマのねらいを達成できた。
- 第1回目よりも参加者の数が多かった。 ⇒前回の反省を活かし、より多くの場所で広報を行った成果が出た。また、リピーターもいた。
- 事後の報告書の中に、「今回の活動の中で見つけた自分の課題」などの記述が多く見られた。 ⇒活動して終わりではなく、しっかりと振り返りが行えている。
- タイムマネジメントをしっかりと行い、予定通りの時間に本企画を終えることができた。 ⇒活動中時間がずれ込んでしまった時などには、臨機応変に対応することができたので成功した。次回にも活かしたい。

【課題】

- 防災において、伝える側の私たち学生に十分な知識がなかった。 ⇒事前勉強会を行うなど、学びの場を増やす必要がある。
- 当日までの準備段階において、予定通りに進まず慌ててしまった。 ⇒余裕を持った計画を立てる必要がある。
- 企画において核となる運営体制が複雑で分かりずらかった。 ⇒次回、どのような体制で行うべきなのか見直さなければならない。

子どもとの関わり方を見直すきっかけ

社会科教育専修1回生 足立 繁郁

平成30年12月2日に、第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。第2回集まれ！ESD子ども広場とは、奈良教育大学で行われ、近畿ESDコンソーシアム主催のもと、奈良教育大学ユネスコクラブが中心となって作ったイベントである。今回は奈良県内外から17人の子どもたちが参加した。今回の企画を行った目的は、子どもたちが身の回りの「当たり前」を捉えなおすことから、持続可能な防災について考えることである。企画の内容としては、まず初めにオリエンテーションで親睦を深め、次にキャンパスフィールドワークを行った。キャンパスフィールドワークでは子どもたちが「当たり前」について考えるきっかけ作りを目標とし、当たり前が奪われる状況を子どもたちに疑似体験してもらった。私は、この企画の班員として企画に携わらせていただいた。そのあと、ESD勉強会で災害によって当たり前が奪われる状況を子どもたちに考えてもらった。そして、キャンドルホルダーを作り、最後にキャンドルナイトを行った。キャンドルナイトでは、ゲームやスタンプを通して1日の振り返りをした。

今回の活動を通して学んだこと、感じたことを二つ述べたい。一つ目は子どもとの接し方、二つ目は子どもたちにけじめをつけさせることについてである。

まず一つ目は子どもとの接し方である。私は、前回の第1回集まれ！ESD子ども広場で活動班に入らせていただいた。そのときの班は、男の子が一人に対して女の子が三人という組み合わせだった。私は、男の子が最後まで女の子たちとなじむことができていない印象を受けた。そこから私は、女の子と男の子の壁を壊す働きかけができたのではないかと反省した。そして今回も男の子一人、女の子三人の活動班に入り、前回の反省を活かす機会をいただいた。男の子が言った発言に対して「ほかのみんなはどう思う？」など男の子と女の子の間に会話が生まれるように声掛けをすることで、最後のキャンドルナイトのスタンプで男の子から「今日は1日笑っていた。」という声を聞くことができ、男の子と女の子の壁を壊すことができたのではないかと実感した。私は、子どもたちへのアプローチ次第で、男の子と女の子の壁は壊すことができるのだと感ずることができた。

二つ目は、子どもたちにけじめをつけさせることである。今回子どもたち同士が仲良くなったのは良かったのだが、最後のキャンドルナイトでけじめをつけることができない子どもたちが私の班から出てしまった。私たちの班は、キャンドルナイト中に叱るのではなくキャンドルナイトが始まる前に子どもたちにメリハリをつけるように指示するべきであったと反省した。私は、子どもたちにけじめをつけさせることができるようになりたいと思った。また、これからは子どもたちと関わる中で子どもたちを叱るタイミングを意識したい。

今回の活動で反省点が多数見られたが、同時に良かった点も見られた。課題意識をもって子どもたちと関わることで私自身成長することができるかと実感した。次の活動も課題意識をもって取り組みたい。



キャンパスフィールドワークの導入の様子

E S Dを用いた防災教育における実践報告書

社会科教育専修修士1回生 伊藤 拓海

2018年12月2日、奈良教育大学内で「第2回集まれ！E S D子ども広場」が開催された。今回の企画では、4班に分かれ、フィールドワーク、E S D勉強会、キャンドルホルダー作り、キャンドルナイトを通して普段当たり前となってしまうものを見つめなおすことで防災について考え、持続可能な社会について学ぶ機会となった。

今回の活動を通して、学んだこと・感じたことを3点述べる。第1に子どもを指導する際のタイミングと強さの調節の難しさについて、第2にE S D×防災を教材とするとき、子どもたちを怖がらせることなく学ばせることの難しさと学生リーダーが持つべき知識の重要性、第3に子どもたちの対人関係構築の可能性についてである。

第1の子どもを指導する際のタイミングと強さの調節の難しさについてであるが、私が所属していた3班は、他の班と比べても賑やかな班であった。そのため、時折楽しさのあまり、賑やかさにおいて度が過ぎてしまうこともあった。その予兆は、開始後すぐのフィールドワークに繰り出した直後から見られていたが、私たち3班の学生リーダーはそれぞれ、「まだみんなが班に馴染む段階だから、きつい指導は避けよう」と考えていた。フィールドワーク中は、楽しく賑やかにミッションポイントをまわっていたが、主に二人の子どもの勝手な行動が増えてきた。学生リーダーたちは、それぞれに指導を行っていたが、指導されたときはやめるものの、数分後にはまた指導というような状態だった。結果的に記念撮影に向かう途中、児童が車道を歩いたことに対して、学生リーダーの一人が叱責する場面を作ってしまった。その後のE S D勉強会、キャンドルホルダー作り、キャンドルナイトとどの場面においても、話す時間と聞く時間のメリハリをうまく付けられず、周りが静かに聞いているときでも、3班の子どもたちは笑いながら話してしまうという場面も見受けられた。このようなことに関して、班の学生リーダーの反省として挙げられることは、最初の予兆を感じた時点で、学生リーダー同士で話し合い、指導する内容や指導の理由を班の中で統一する必要があったということである。学生リーダーそれぞれが、現状が良くないと理解していたが、各々が子どもたちの勝手な行動を見つけた際に単独で指導をしてしまったことにより、「この学生リーダーのときは怒られなかったけど、この学生リーダーには怒られた」と学生リーダーの指導に差異が生まれ、一貫性の無い曖昧な指導になってしまった。学生リーダー間の意思疎通を早急に行い、もっと早い対策ができていれば、叱責をして楽しい流れを止めることも無くメリハリのある班活動になったのではないかと考える。学生リーダー間のコミュニケーションは、今回の企画だけで指摘されることなく、様々な活動において求められることだと思うので、気を付けて次回以降の活動に臨みたい。

第2のE S D×防災を教材とするとき、子どもたちを怖がらせることなく学ばせることの難しさと学生リーダーが持つべき知識の重要性については、主にE S D勉強会時に感じた。本活動のテーマは、自分たちの当たり前を災害という観点から見つめ、これからの防災に役立てるというものであったが、このE S D勉強会において子どもたちは楽しみながら学べたのだろうかという点である。実際、子どもたちと一緒に大喜利を答えたり、考えたりはしたが、被災した後の姿から何を対策すべきかといった恐怖を煽る勉強になってしまったように思う。これだけでは、楽しく学ぶというよりは、「災害が怖いから備える」という流れになってしまいそうだったのと、言葉だけで災害を学んでも自分事として考えられないのではないかと感じた。しかし同時に、そこに楽しさやリアリティを見い出すには、学生リーダーのフォローや子どもたちが自分事として災害を捉えることができるような問いかけも必要だと感じた。そのためには、学生自身が災害・防災についてもっと知識を付けなくてははいけない。他の

学生は分からないが、特に自分はその知識が明らかに足りていなかった。子どもたちが考えるレベルと同じ程度しか、防災について考えることができていなかったからである。教える・サポートする側の人間は、教える何倍も知識を身に付けていなくてはならない。そのことから、事前の学習や、子どもの発言を見過ごさないアンテナが足りていなかったように思う。

第3の子どもたちの対人関係構築の可能性については、非常に自分自身が感心した点である。私の所属していた3班は子どもの構成が男子中学生一人、女子小学生三人の四人であった。一番懸念していたことは、学年も性別も違う子どもたちが一緒に楽しく活動ができるのかということであった。学生リーダー間では、男女間の隔たりを無くし、子どもと学生リーダーとの関わりだけでなく、子どもたち同士の良い関係性を作ることを意識していた。そのようなことを懸念しながら開始したのだが、最初こそ緊張があったものの、最終的には先程も述べたように賑やかになりすぎて指導するほどに楽しい関係性は構築することができた。その中でも一番感心したことは、子どもたちが自然と班の中での自分の立ち位置を理解し、その仕事を自然とこなしていたことである。班長に選ばれた子は、フィールドワークでリーダーシップをとりながらみんなを導いたり、最終的には班にメリハリを付けるために他の子どもに注意したりできていた。その他の子どもたちも、班を盛り上げたり、ESD勉強会できちんと発言したり、班長を手助けしたりと子どもたち同士の関係性が学生リーダーが指示しなくても構築されていた。我々の年齢になっても、初対面の人と1日過ごすとなると緊張して遠慮しすぎてしまうことがある。しかしそれは、小・中学生という低年齢の時点から初対面の人と関わる活動を経験していれば、この先持続可能な社会の重要性を発信する側の担い手になったとき、生きてくる資質・能力なのではないだろうか。結果的にこのようなコミュニケーション能力の育成は、持続可能な社会を作り上げるときに大きな役割を果たすだろう。

以上3点の考察を挙げたが、今回の活動を通して、自分自身の準備不足、子どもとの関わり不足を痛感させられた。遊びのイベントではない以上、「楽しかった！！」だけで終わらせたくはない。遊びで終わらせないためには、企画班だけに全て丸投げするだけではいけない。自分もその意図を汲み取り、何をすべきか、子どもが何かつぶやいたらそれをどのように調理すれば上手く活かせるのかを考えなくてはいけないだろう。それを一人だけの仕事にしないために、学生リーダー間のコミュニケーションが必要不可欠であり、ただの割り当てられた班ではないと理解しながら活動の準備・本番を迎えなくてはいけないということを強く感じた。本活動では、自分の力不足を感じることも多くあった。今回見つけることができた自分の知識や技術不足の点を常に意識し、次回は今回よりも納得のいくものになるように心がけていきたい。



オリエンテーション中のゲーム風景

責任と不安をこえて

国語教育専修2回生 奥平 茜

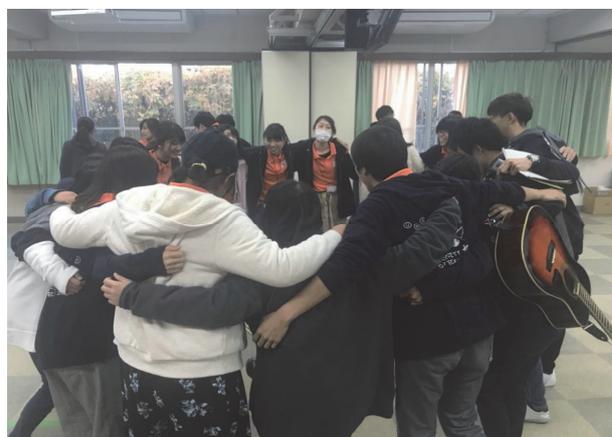
平成30年12月2日(日)、奈良教育大学キャンパス内にて第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。本企画は、ESD(持続可能な開発(社会)のための教育)について楽しく体験的に学びあうことと、子どもと関わる活動を通して、教員を目指すうえで必要な資質・能力を身につけることを狙いとして奈良教育大学ユネスコクラブが企画や運営を行っている企画である。

今回の活動で学んだことと感じたことは三つある。一つ目は仕事を分けることの難しさ、二つ目は注意することの難しさ、三つ目は写真撮影の難しさと楽しさ、責任についてである。

一つ目の、仕事を分けることの難しさについて述べる。準備段階において、私は今回、実行委員会の中で物品担当者として活動に参加した。実行委員会ではじめに決められた役割として、物品担当者は2名いたのだが、自分自身がうまく仕事を割り振ることができず、「何をしたいのかわからなくて嫌だった」ということを言わせてしまった。実行委員会とは関係のない個人的な事情で物品担当者は私一人ということにしていたが、結果的に自分の至らなさに物品のトラブルがいくつかあった。「我儘で担当者を一人にしてもらったのに、仕事でミスがあるなんて」という自己嫌悪に襲われることも多かった。また、当日の物品管理に関連する資料の作成などは物品担当者の仕事ではなかった。しかし私はそれを知らず、当日に物品を管理してくださる方たちの仕事を一部邪魔してしまった。仕事を任せる、人に託すことの難しさを感じた。

二つ目の、注意することの難しさについて述べる。今回の活動において、子どもを注意している場面や、注意しなければならないような場面が何回か見られた。私が特に注意の難しさを感じたのは、フィールドワークの説明をしているときだった。これから始まる活動に向かって楽しい雰囲気を作っていく中、子どもたちの声が大きくなってきていた。横から見ていて、この状況で説明をしてもあまり効果は見られないかもしれないが、ここでしっかり注意をするのも難しいのではないかと感じていた時、前に立っていた進行の先輩が「それからもう一つ！」とアドリブで注意項目を増やし、雰囲気を壊すことなく「話しているときはこちらに注意を向ける！」ということ促していた。とっさにあのような発言ができるだろうかと考え直した時、今の私には難しいことであると痛感した。

三つ目の、写真撮影の難しさと楽しさ、責任について述べる。私は今回の活動で、当日の写真撮影を担当した。私は写真を撮ることが好きであり、また自分自身が撮った写真を好きだと言ってくれる人がいることもあって、当日の係を楽しみにしていた。しかし、当日ふと「写真撮影係は私一人なのだ」ということが突然重荷となった。自分が写真を撮り損ねてしまえば、記録媒体が減ってしまうのではないかと、動画を作ってください先輩を困らせてしまうのではないかとという思いに駆られた。しかし、実際に始めてみると、自分自身が不安に感じていたようなことは起こらなかった。子どもたちも学生たちも楽しそうな表情をしており、最後は写真を撮っていて楽しいと強く感じた。一人で撮るということは責任を感じるとともに、回れていない班やミッションがありはしないかと考えながら走り回ることになる。自分自身が体力的にも「何かをしながら別のことをする」ことを得意としていないため、難しいと感じる場面も多かつ



開始前に円陣を組んでいる様子

た。しかし、ラインを確認しながら、回った班やミッションを記録し、最終的に全ての班も全てのミッションも回ることができた。動画で流れる自分が撮った写真を見るたびに、「写真撮影係の仕事をきちんと終えることができた」という安堵感でいっぱいになった。

今回の活動に参加するにあたって、自分の中で一番大きかったのはやはり、自分の体調への不信感であった。昨年度のESD子どもキャンプで大きく体調を崩したことが尾を引き、どこか当日に対して恐怖感を感じていた。事前研修の中で、自分の目標について考える際、昨年度のことが何度も頭をよぎり、研修中に自分の目標を決めることができなかった。「子ども広場の活動で企画班や活動班など、学生が子どもたちに伝えようとしていることを支える」ということを目標に定めたが、自分はまた体調を崩して何も学べないのではないかという不安も大きかった。しかし、今回は当日中に体調を大きく崩すことがなかった。「体調管理ができていなかった」ということではなく、活動そのものから学びを得ることができていることをうれしく思う。



最初に集合した時の一枚
まだ緊張している様子うかがえる

第2回集まれ！ESD子ども広場を通して学んだこと

家庭科教育専修2回生 北中 佳子

平成30年12月2日、奈良教育大学敷地内で第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回の集まれ！ESD子ども広場では、防災教育とESDを中心とした内容で構成されており、子どもたちが体験を通して学ぶというものであった。

第2回集まれ！ESD子ども広場で私は三つのことを学んだ。一つ目に体調を崩した子どもに対する対応について、二つ目に企画を作ることにについて、三つ目に子どもの反応を拾うことの大切さについてである。

一つ目の体調を崩した子どもに対する対応についてだが、私は今回の集まれ！ESD子ども広場を通して改めて子どもの命を預かる責任の大切さを学ぶことが出来た。集まれ！ESD子ども広場を行うにあたって事前に保健研修を受け、注意しておくべきことや何かが起こったときの対応などについては頭に入れておくことが出来た。しかし、いざ本番となると子どもの様子からどういった健康状態なのかを正確に読み取り、判断することがとても難しかった。子ども自身に状態を聞いても、子どもから返ってくる返事が本当のことだとは限らない。子どもの本当の状態を確認するには、会話の中での情報や子どもの行動、仕草の変化などをよく見る必要がある。子どもの命を預かる上で、どのような状況であっても冷静に子どもを見る力は必要であり、大切であるということを改めて学ぶことが出来た。また、体調不良などになってしまったときは保護者にどのような状態であったか、どのような対応をしたのか、なぜその対応をしたのか、詳細を伝えることが子どもの命を預かる責任の一つだということも学べた。

二つ目の企画を作ることにについては、企画を作っていく中で何が大切になってくるのかを学べたことである。今回の集まれ！ESD子ども広場で私は、防災と持続可能な防災を子どもたちにどのように学ばせるかを考える企画に携わることが出来た。どのような内容にすれば、子どもたちが考えやすく理解しやすくなるかを考えるのは本当に難しかった。何度も考えている間に方向性が違ってきたり、実際にやってみると予想していた展開にならなかつたりしたので、常に目標を頭において考えていくことが大切であると学ぶことが出来た。子どもの反応を予想する難しさとロールプレイングの大切さについて、身をもって学ぶことが出来た。

三つ目は、子どもの反応を拾うことの大切さについてであるが、私は今回、子どもの反応を拾うことでより内容を深めることが出来るということ学んだ。第1回では初めてゲームを担当し、今回もゲームを行ったのだが、第1回ときは自分が考えてきたことをやり通すことで精一杯だった。今回も余裕は持てなかったが、振り返りで子どもの反応を拾うことでゲームもより面白くなり内容が深くなるというアドバイスをもらい、工夫の仕方について気づくことが出来た。今後またゲームを行う機会があれば、その点を意識して取り組みたいと思う。

今回の集まれ！ESD子ども広場では、今まで経験したことないことに挑戦できたと思っている。新たな視点から様々なことを学ぶことが出来たので、これからの活動に活かしていけるよう取り組んでいきたい。



全体の集合写真

伝えるということ

国語教育専修1回生 木多 彩菜

平成30年12月2日、奈良教育大学にて第2回集まれ！ESD子ども広場が実施された。小学生から中学生までの17名が参加し、学生リーダーと共に1日活動した。今回の第2回集まれ！ESD子ども広場では「防災」をテーマに掲げ、1日のプログラムを通していつ無くなってしまいか分からない当たり前を問い直すという内容で行われた。

今回の活動で私自身が学んだこと、そして感じたことは2点ある。まず1点目は言葉にすることの責任の大きさ、そして2点目に伝えることの大切さについてである。

1点目の言葉にすることの責任の大きさについてである。私はキャンドルナイト班に所属しており、キャンドルナイトの企画を担当させてもらった。キャンドルナイトでは語りの時間を設け、1日のプログラムの最後で子どもたちに私の心の中にある想いを伝える時間があった。今まで、人前で自分自身の心の中にあることを言葉にして伝えた経験はほとんどなく、初めは何を話すかさえなかなか決めることができなかった。語りで子どもたちに何を伝えたいのかを自身で考えていく中で、自分自身が発する言葉の重みを感じる場面が多くあった。1日の最後のプログラムで、自身の心の中にあることを自分らしい自分だけの言葉で伝える時、その言葉一つひとつが子どもたちにどのように響くのだろうかと何度も考えた。自分自身の発した言葉で子どもたちはどのように感じ取っていくのだろうかと考え、一つひとつの言葉にとっても重みが増していき、想いを言葉にする過程を大切にしようと考えようになった。普段何気なく話している言葉であっても、受け取り側によってはその言葉に対する感じ方も捉え方も大きく異なる。教員を目指す立場として、とても役立つことを学ぶことが出来た。

次に2点目の伝えることの大切さについてである。「伝える」ということは、誰かに自分自身の考えや想いを「共有」することではないかと今回の活動を通して感じた。口に出して自分の言葉で伝えることで、初めて自身の心の中にある想いは誰かに届き、そこからさらに受け取った誰かがそのことを自分自身の中に取り込む。さらに、言葉にして伝えることだけが伝えるということではなく、行動を起こして相手に想いを届けることも「伝える」ことの一つであると考え。自分自身が何かを伝えることで、それを受け取った相手も何かを感じ、そこからさらに伝えることにつながっていくと考える。今回のキャンドルナイトで子どもたちに少しでも私自身の想いが伝わり、そこからまた子どもたちが誰かに伝えようと行動を起こしてくれていたら、言葉にして伝えた甲斐があったのではないかと思う。

私は活動に参加するのが、今回が初めてであった。子どもたちを呼んで企画をするということは、とても責任を感じるものであったが、その分1日を終えたときの達成感は今までに感じたことがない程、素晴らしいものであった。この第2回集まれ！ESD子ども広場だったからこそ学ぶことが出来たことや、感じる事が出来たことが多くあったように感じる。これからの企画やその他の活動でも活かすことが出来ることが多いので、ただ学んだり感じたりしただけで終わらせるのではなく、次につなげていきたい。



キャンドルナイトにて

チームワークにおける再発見

美術教育専修院3回生 木村 絢子

2018年12月2日、「第2回集まれ！ESD子ども広場」が開催された。今回のテーマは、「灯す〜あなたの中に、私の心に〜」だった。本活動にて学んだこと、感じたことの中から特に印象に残ったものを三つ紹介したい。一つ目はグループにおけるマネジメント、二つ目は全員で一つの場を作り上げること、三つ目は心のすれ違いの過程だ。

まず、一つ目のグループにおけるマネジメントについて述べる。今回、私は当日の活動の裏方を運営する班のリーダーを任された。当初は誰一人顔を合わせたことのあるメンバーがいないことや、裏方を担当した経験を自身が持っていないことの2点で、私は大変な不安を感じていた。しかし、もともとのメンバーは1回生ばかりであるため、彼らも私と比べて大きな不安を抱えていたのだ。面識がない者同士で年齢も大きく離れているせいか、連絡をしたり声をかけたりしてもなかなか反応が返ってこなかった。そして、せっかくメンバーから質問を受けても十分に答えることはできなかった。私は、解決策を考えた。面識がなくて年が離れているならば、互いのことを知って話しかけやすい雰囲気を確認することが優先事項だと結論付けた。早速、絵文字を多用した自己紹介文を送り、メンバーで自己紹介を行った。すると、他メンバーからの反応も良く、和気あいあいとした雰囲気が出来上がった。互いを認識して心の距離感を埋めるということが、チームワークを発揮するために不可欠なマネジメントの一要素であると実感した。

次に、二つ目の全員で一つの場を作り上げることについて述べる。今回、私は裏方の仕事の全体像を把握していない状態で、リーダーを引き受けてしまった。裏方は全体の活動に必要な準備を常に先読みして、活動を通した学びが滞りなく遂行されるようにしなければならない。致命的な状況だった。前日からは、子どもを対象としたワークショップの経験が豊富な同級生がメンバーに加わってくれて、私の見えていなかった部分を埋めてくれた。学びの場において、その場を作り上げる者は差し出す学び以上の知識や経験を持つ必要がある。状況や相手が持っている情報を瞬時に照らし合わせて、必要最小限のまとまった情報をわかりやすく提供しなければならない。本活動当日に、改めてそう感じた。仲間が動きやすいように適切なタイミングで情報を提供することは、一つの活動を作り上げるうえで大切な思いやりだ。



キャンドルナイトをする学生と子どもたち

三つ目は、心のすれ違いの過程だ。大きな行事には、このような企画にしたいとか以前のような失敗を繰り返したくないとか、様々な強い思いが集中する。しかし、強い思いは個々の人間が内面的に持つ経験や感情をベースに成り立っている。そして、それらの思いを受け取るのも個々の経験を经た感じ方の違う人間だ。そのため、それぞれの立場によって言動の解釈やモチベーションなどにギャップが生じる。今回では特に、子どもの命を預かるという危機管理の意識や子どもを対象とした学びの活動の経験の差などから、心のすれ違いが大きく表面化した場面があったように思う。今まで相手はどのような経験をしてきてどのような知識を持っているのか。それを常に冷静に分析することで、相手の感情と伴って行動を理解しようと歩み寄れるのではないだろうか。今回の私自身の活動を振り返ってみると、こ

の努力が特に欠けていたように思う。これは仲間たちと一つの行動を共にするうえで惜しんではならない働きかけだと感じた。

以上より、グループにおけるマネジメント、全員で一つの場を作り上げるということ、心のすれ違いの過程について、各事項の重みを改めて実感することができた。これからは相手や仲間のことをよく知り、心の調和を図ったうえで、全体像を把握しながら相手の持つ情報や経験を踏まえて周りの人間と向き合っていきたいと感じた。



キャンパスFWに取り組む子どもたち

7年間の活動を終えて

英語教育専修修士2回生 糸 綾香

平成30年12月2日、「第2回集まれ！ESD子ども広場」が開催された。今回は「防災×ESD」をテーマに設定し、子どもたちの普段の生活に存在する五つの「当たり前」を問い直しながら、自然災害に直面した際にどのように行動するかを考える内容であった。私はESD勉強会・キャンドルナイト班に所属し、勉強会の内容の計画、キャンドルナイトでのゲームの進行を担当した。

本活動を通して感じたことを三つの視点で振り返りたいと思う。第1に勉強会について、第2に後輩について、第3に後悔しない関わり方についてである。



ESD勉強会の様子

第1に勉強会についてである。今回の勉強会は、フィールドワークと連動した五つの「当たり前」について、災害発生前と後のシーンを表した絵を基に「できること・できないこと、その時の気持ち、どのように行動するか」などを班で話し合うという内容で展開した。準備段階では、ロールプレイ、すごろくを作成するなどのたくさんのアイデアが出た。その後紆余曲折を経て、絵を使った活動に落ち着いた。子どもたちが考えを深められるように、ヒント集を作るなどの準備が本番間際まで続いた。実は私は、ESD子どもキャンプから数えても、イベントの根幹となるESD勉強会の企画に関わ

るのは初めてであった。故に、計画することに不安もあり、「こんな発言をして大丈夫か？」、「ESDについて間違っていないだろうか？」などずっと悩んでいた。勉強会での子どもの話し合いや発表の様子を、全て見るができなかったため、準備の成果がどこまで出たかは分からない。しかし、準備段階で子どもたちが活発に話し合えるような環境や教材を準備するという目標のもと、やれることはやり切ったつもりである。このプログラムの企画に関わることで、改めて子どもの学びのために、準備を徹底的にすることの大切さを感じるとともに、教える側、子どもの学びをサポートする側の知識は十分すぎるほど持っているべきだったと感じた。私も防災教育について、十分に理解できた状態に関わっていたとは言えず、もっと学びを深める内容や教材を使うことができたのかもしれないと感じている。

第2に後輩についてである。当日手伝いに来てくれたユネスコクラブのOBOGの方々は口々に、下回生のレベルがとても高いと仰っていた。ゲームやプログラムの進行などで表立って活躍する人ももちろんだが、裏方として保健や次の進行のための準備など、学年に関係なく、一人ひとりが「次にすることは？今何が必要？」と考えることができおり、私も彼らに助けられる場面がたくさんあった。第1回では、私は裏方として少々動きすぎたが、今回は、私が何かする前に誰かがすでにそれを終えてくれていることが多く、前回よりも動く場面が少なくなった。寂しくも感じたが、後輩たちの目配りや心配りの仕方が格段に伸びたと確信することができ嬉しくも感じた。しかし、準備段階においてはもっと成長できるはずとまだまだ期待したいと思う。子ども対象のイベントを計画することに、やはりしんどさと難しさを感じるだろう。子どもの命を預かる分、責任感が伴った綿密な計画が必要になってくる。そこに人間関係での葛藤や気遣いなどを含めると、本当にしんどいものだ。今回、何事もなく1日を終わることができた。OBOGの方々からは、大成功だったという感想もいただけた。しかし、準備段階での関わり方に反省点をたくさん感じている私を含めた、運営に関わった一人ひとりが今回の振り返りをしっかり行い、ぜひ第3回につなげてほしいと思うし、仕事を誰かに任せることと放置することは違うと再確認してほしいと思う。

第3に後悔しない関わり方についてである。今回は私にとって、最後の子ども対象のイベントであった。7年関わり、形を変えた活動にするのもずっと見てきたイベントである。最後であるからあまり運営に関わってはいけないと思っていた。しかし、前述したが「任せること」と「放置すること」は違うのだと活動当日寸前になって思い知った。中心にならずとも、後輩たちがもっと動きやすく、負担が少なくなる方法を伝えたり、動きをサポートしたりなど、いくらでも動き方があったはずだ。それに気づかず、むしろどこか気づかないふりをして逃げていた自分がすごく嫌になった。後輩たちが準備段階から最後まで諦めず頑張り続けてくれている中で、「自分は？」と振り返った時、終わった後、胸を張って「楽しかった」と言えないと気づいた時、本当に後悔した。だから当日だけでも後悔しないよう、思いっきり楽しもうと決心した。歌も一番大きな声を出して皆を支えたい、一番ゲームも楽しみたい、自分のゲームも全力でやりたいと思った。そう決心した中での本番当日。当日活動している最中も、終わった後も楽しかった。「こうしたほうが良かった」もちろんあるが、「楽しかった」が一番強く思えた感情だった。後悔など一つも感じなかった。こう思えるような環境を、空間を創ってくれた後輩、手伝いに来てくれ急遽ゲームまで助けてくれたOBOGの方々に心から感謝したい。



裏方も全力でゲームを楽しむ！

何年関わっても、毎年様々な学びがある。しんどくなることも、逃げたくなることもある。周りから見たら、「なんであんなに熱いのか？そこまでこだわることなのか。」と思われることもあるだろう。しかし、教師を目指すかどうかに関わらず、今後の自分の人生に大きく影響することを学び続けられる活動、場所であると私は強く思う。命を預かるという責任がある分、熱い心と冷静な頭が必要であり、どちらか一方だけでは成し遂げることができず、そしてどちらか一方でも欠ければ成り立たなくなる活動だ。私は主観的になりがちで、熱くなりすぎるところがあり、いつも周りの冷静な判断に助けられて7年間活動することができた。かけがえのない仲間に出会うことができた大切な居場所だったのだと、OBOGの方々と一緒にゲームした時に改めて実感することができた。ぜひ来年も帰ってきたい。守り続けてほしい、守り続けたいと強く思う。



参加者全員で、「ハイ、チーズ！」

初めて運営班として関わって感じたこと

国語教育専修1回生 桑田 佑香

平成30年12月2日に奈良教育大学内で、第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回のイベントでは、班ごとに分かれて大学構内をめぐり、日常で当たり前だと思っているものが失われたらどうするのかについて考えてもらった。また、灯りがなくなってしまうときに用いることができるキャンドルホルダーの作り方の説明をし、実際に作製した。それぞれが作製したキャンドルホルダーはキャンドルナイトで使用して、灯りの大切さを感じてもらった。

今回のイベントで感じたこと、学んだことは三つある。一つ目に運営側としての関わり方、二つ目に説明するときの仕草、三つ目に積極的な行動である。

一つ目の運営側としての関わり方についてだが、これはイベントが始まる前から考えていたことである。活動班をサポートする立場として、自分が子どもたちとどのように関わっていくべきか、どのようにイベントに参加していくべきかと不安に感じていた。しかし、本番ではフィールドワークの中で休憩スポットの役割をいただき、子どもたちと関わることができた。こちらから声掛けをすれば、子どもたちもそれに応えてくれることがわかり、良い学びになった。そして、アイスブレイキングでは運営班もゲームに参加して、イベントをみんなで一緒に楽しむことができた。次のイベントでは、活動班と運営班のどちらに入っても子どもたちと関わられるように、今回学んだことを忘れないようにしたい。



子どもと関わる運営班の様子

二つ目の説明するときの仕草だが、これは1回生二人でキャンドルホルダーの作り方を説明するとき感じたことである。前回のイベントでは、子どもたちの前に出て何かを話すということではなかったので、みんなの前に出て説明をするというのは初めての体験だった。本番では、子どもたちが真剣に説明を聞いてくれたので、困ることなくスムーズにできたと思う。しかし、もう一人が説明してくれているときに、私がただ立っているだけになっていたのは、改善する余地があるように感じた。例えば、子どもたちに例を提示してあげるといったように、説明の補助をする必要があったのではないかと考えた。次にこのような機会があれば、子どもたちにより伝わりやすく説明するために自分ができることを考えるようにしたい。

三つ目の積極的な行動についてだが、これは前回のイベントでうまくできなかった点であるため、今回は常に意識して行動するようにした。最初のうちは、指示を受けて行動するという風になってしまっていたが、途中からは自分からできることを周りの人に聞いたり、率先して手伝ったりするなど、自分なりに積極的な行動ができていたと感じている。前回の反省を活かすことができ、自分の成長に繋がったと思う。次回のイベントでは、今回よりもさらに成長できるようにしたい。

今回、運営班としてイベントに参加して、反省や学びが多くあった。初めてのことで戸惑うことも多かったが、自分なりに精一杯努力することができたと思う。しかし、準備段階で活動班サポートとしての仕事を深く理解していなかったことは反省しなければならない。行動表に書かれていることだけをすれば良いと思うのではなく、臨機応変に行動したい。次回のイベントに参加するときには、マニュアル通りに動くだけでなく、自分の仕事を理解して臨みたい。そして、今回のイベントをただの思い出にせず、次に繋げられるようにしたい。

第2回集まれ！ESD子ども広場を通して大切であると感じたこと

国語教育専修2回生 小倉 奏

2018年12月2日、奈良教育大学キャンパスで第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。ESD (Education for Sustainable Development) とは、持続可能な社会の担い手を育てる教育のことであり、第2回集まれ！ESD子ども広場のテーマは「灯す～あなたの心に、私の心に～」となっていた。今回、学生はオリエンテーション班、キャンパスフィールドワーク班、キャンドルホルダー班、キャンドルナイト班 (ESD勉強会も含む) のそれぞれに分かれて企画を担当し、進行を担った。また、企画の担当以外にも子どもと同じ班に入って一緒に活動する活動班と、主に司会進行、企画や活動のサポートをする運営班との大きく分けて二つに役割を分担して活動した。

第2回集まれ！ESD子ども広場を通して、大切であると感じたことが三つある。一つ目は子どもに対する声かけの工夫、二つ目はサポートする立場としての視点、三つ目は学生たちによる雰囲気づくりである。

私が今回大切であると感じたことの一つ目は、子どもに対する声かけの工夫である。キャンパスフィールドワークの企画で、私は普段周りには当たり前に「人」がいるということについて考えるミッションポイントに携わった。ミッションの流れとしては、一人では持てない机を持つために他の人への協力を求めるという流れで進んでほしいと思っていたが、声かけの仕方によってはこちら



ミッションポイントでの様子

が用意している答えへの誘導になってしまう場合があると思った。例えば、一人で机を持てなかったときに、「一人だったら持てなかったね。周りに人がいるけどどうしようか。」と言うと、答えを誘導しているように思われるが、「どんな手を使ってもいいから机を運べる方法を考えて欲しい。」と言うと前者の問いより答えの幅が広がっているように思われる。このように声かけは、子ども自身の考える機会を奪ってしまうことにも、また逆に子どもが考えを深めるためのきっかけづくりにもなると考えた。自分がどういった問いかけや声かけをしたら、子どもたち自身の考えを引き出すことにつながるのかということを事前にしっかり考えておくことがとても大切だと思った。そこから、どうしたら自分たちが子どもたちに気づいて欲しい内容に寄せていけるかも、私たちに求められる力量だと感じた。

二つ目は、サポートする立場としての視点についてである。私は今回、運営班の中でも司会進行の学生とコンタクトを取りながらプログラムのスムーズな進行をサポートする役割にあっていた。活動班として実際に子どもと関わる立場ではなく、全体の進行をサポートする立場として一歩引いて全体を見ることで、また違う視点で活動を見ることができた。そのことによって自分の割り振られた仕事以外のことでも、今自分は何をするべきなのかを考えながら動くことができた。自分たちは進行をサポートする役割であったので、「自分たちが進行の妨げとなってしまうように」という意識を、進行サポートのメンバー内で事前に確認しておくことで、より一人ひとりが責任を持ちながら進んで行動していたと思う。司会進行の学生とも事前に動きの確認を取ったり、当日急遽入った仕事の役割は即座にメンバーに情報を共有したりなど、周りとの連携を取ることがとても重要だと感じた。また、当日の役割分担のスケジュールをしっかり把握しておくことはもちろんだが、仕事が入っていない時間帯でもプログラム

の進み具合を見ながら裏方の仕事を手伝ったり、次に必要となることは何かを先読みして動いたりなど、全体を見て役割をこなしながら臨機応変に動けるようになることが大切であると感じた。

三つ目は、学生たちによる雰囲気づくりについてである。子どもたちに対してある程度の緊張感や責任感を持っておくことは、本活動を進めていく学生側にとって、企画を進めたり事故を防止したりする上では重要なことである。しかし、そればかりになってしまうのではなく、自分たち自身も子どもたちと関わって一緒に活動することを楽しむことで、その楽しい雰囲気が子どもたちにも伝わっていくと思った。オリエンテーションなどでも子どもと一緒に活動している学生はもちろんのこと、活動班に入っていない学生たちも同じようにゲームを楽しんだりすることでいきいきとした笑顔になっていて、自然と楽しい雰囲気づくりができていたのではないかと感じた。また、その中で事前準備の大切さも改めて感じさせられた。事前に各企画班の内容をしっかりと理解しておくことで、当日子どもたちを上手く引っ張っていくことができる。そうすることで、子どもたちも活動しやすくなり、楽しみやすくなるのではないかと考えた。また、ゲームや寸劇など盛り上がる場所だけではなく、キャンドルナイトでの語りの部分など静かに話を聞きながら自分自身でも考えてみる時間、キャンドルホルダーを作った思いの発表の時間など様々な時間があった。それぞれの時間を通して、学生側がそれぞれの時間に対する思いを共有しながら雰囲気づくりをすることが自然とできていたのではないかと感じたし、それが大切であると感じた。

本活動の準備段階から当日、振り返りまで関わることで様々なことを学び、これからのボランティア活動や子どもと関わる活動にも活かしていける見方・考え方を得ることができた。しかし、当日の振り返りでも、「キャンパスフィールドワークのミッションで少し答えを誘導してしまっていた」という意見も出ていて、本活動から今後の課題にしていきたいことを見つけることができたので、自分自身の振り返りと合わせて次回の活動に活かしていきたい。

成長と反省と今後に向けて

国語教育専修1回生 西條 秀哉

当たり前とは何か、そして災害によってそれらが奪われたときにどうするのかを考えてもらう機会として、平成30年12月2日に奈良教育大学にて第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。当日はまずフィールドワークへ向かい、当たり前が奪われるという体験を疑似的に体感した。その後、ESD勉強会にて災害に向けての物質的な準備と、精神的な準備をする必要性を再確認した。そして最後に1日を通して感じたこと、学んだことを形に残すという意味でキャンドルホルダーを製作し、キャンドルナイトにてお互いの思いや考え、感謝を共有し合った。

本活動にて私は3点の学びと成長、反省があった。1点目は子どもたちへの声掛けや注意を行うことの成長、2点目は当日の時間や準備物の確認不足、3点目は企画準備の大変さと難しさだ。

1点目の子どもたちへの声掛けや注意を行うことの成長についてであるが、これは前回の第1回集まれ！ESD子ども広場での自分と比較して感じたことである。前回の自分は子どもたちにどのような声掛けをするべきかわからず、先輩方に頼ってしまった。今回も先輩方には助けられたが、学生リーダーとして子どもたちへの適切な声掛けや話題展開、そして会話が関係のない話に脱線した際の注意と引き戻しを徹底することができた。これは前回の活動からの7か月間、数多の経験で子どもたちと関わってきて得た賜物だと実感している。



ESD勉強会での話し合いの様子

2点目の当日の時間や準備物の確認不足については、私のミスであり同時に反省点でもある。けがや病気などの緊急時の対応や、オリエンテーションの準備は徹底的に行っていたが、当日のタイムスケジュールや各プログラムの準備物の確認を怠ってしまっていた。それが原因で当日の動きで手間取ってしまったため、学生リーダーとしてタイムスケジュールと準備物の把握は必ずしておくべきだったと思う。この反省は次回以降の活動に活かしていこうと考えている。

3点目の企画準備の大変さと難しさについては、当日を迎えるまでの事前準備やリハーサル、ミーティングなどに参加している際に感じた。子どもたちに、「普段当たり前のように使っているものが本当は当たり前ではない」ということを気づいてもらうためにどのように伝えればいいのか、各プログラムについて何度も話し合い、企画の推敲をした。そのように会議や試行錯誤を繰り返すことで本活動が完成した。この企画が作られていく過程を見ていたことから、企画を作るということの大変さや難しさを学んだ。そして、一人で責任や仕事を抱え込むのではなく一緒に試行錯誤し、悩みや迷いを共有できる仲間が何よりも大事だということも学んだ。今後企画を作っていく者として、企画を作るということは本当に一筋縄ではいかないことで、仲間との協力が必要不可欠だということを肝に銘じておきたい。

今回で1回生として2回目の活動であり、前回できなかったことを、今回はできるようにしようと決意して準備から当日まで一所懸命取り組んできた。だからこそ、以前できなかったことができるようになり、さらに以前より高次の課題に直面していることに非常に喜びを感じている。来年は2回生であり、後輩を支えながら企画を中心となって作っていく側になる。与えられる仕事やかかる責任は今までより増え、大きくなるが、仲間と協力することを忘れずにこれからも沢山の企画に参加・参画し経験を積み重ねて成長していこうと思う。

子どもと関わる楽しさと難しさを感じる活動

国語教育専修2回生 坂元 亜衣

平成30年12月2日に、第2回集まれ！ESD子ども広場が奈良教育大学にて行われた。今回の活動は「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマとし、身の周りの「当たり前」を捉え直すことから、持続可能な防災について考えることをねらいとして行われた。四つの活動班に分かれ、各班で交流を深めたり奈良教育大学敷地内でのフィールドワークから「当たり前」を考える活動を行ったりした。私は本活動の事前準備ではキャンドルホルダー班として、当日は活動班の学生リーダーとして子どもと共に活動を行った。

私は本活動を通して三つのことを学んだ。一つ目は情報共有を行い、連携を取ることの大切さ、二つ目は子ども同士でコミュニケーションを取らせることの難しさ、三つ目は学生が楽しむことである。

まず、一つ目の情報共有を行い、連携を取ることの大切さについて述べる。第2回集まれ！ESD子ども広場はユネスコクラブの学生が主体となって行う企画である。様々なプログラムがあり、各プログラムの一貫性・連携性が求められる。そのためには自分が所属している班の企画内容だけを把握するのではなく、本活動全体の流れやテーマの意味を学生全員が認識していることが大切であると感じた。認識が不十分であると連携がうまく取れず、直前に変更しなければならないことや自分たちが考えていたこととのズレが生じてしまう。特に多くの人数が関わると、情報共有を行ったり連携を取ったりすることが難しくなるので、個人個人が意識して周りの状態や状況を判断することが欠かせないと感じた。勝手な判断をせず、何かあったらまず情報共有を行い、適切に動いていくことの必要性を学んだ。

次に、二つ目の子ども同士でコミュニケーションを取らせることの難しさである。本活動では様々な学校、学年の男女が一つの班に所属し活動するため、子ども同士が初対面であることが多い。朝から夕方までという短い活動時間の中で学生と子どもの会話を引き出すのも困難であったが、子ども同士の会話の時間を生み出すことはさらに困難であった。特に私が所属していた活動班はおとなしい子どもが多く、時間にもきっちりしており、すごくよく動けていたが、もっと子ども同士の会話を引き出すことができればより楽しい時間になったのではないかと考えた。このことは反省点として次回以降につなげたいと感じた。



ESD勉強会中の1班の写真

最後に、三つ目の学生が楽しむことについて述べる。当日は活動班に入り子どもと共に活動を行った。班の学生リーダー同士の関係もできていたため、いい雰囲気子どもを迎えることができた。班内の学生リーダーの連携も取れており、それぞれ臨機応変な行動ができたと感じている。また、学生の楽しそうな雰囲気は子どもにも伝わると実感した。学生が進んで楽しむことで子どもも全力で楽しむことができ、学生がお手本となりしっかりと行動することが子どもにとって大切なことであると学んだ。

私は本活動で事前に班にしっかり関わることを目標として挑んだ。当日まで大変だったことや急がなければいけないことも多くあったが、どちらの目標も達成したと感じている。個人個人が意識をしっかりと持つことが成功につながるのだと実感した。また、自分自身の意見をきちんと持ち、それぞれの意見を交流することで納得のいくものができるのだとわかった。事前準備も当日もいろいろな人の新たな一面を発見することができ、自分にとって刺激になる経験となった。

子どものための企画を作る大変さを学んで

英語教育専修3回生 坂本 和音

平成30年12月2日(日)に奈良教育大学内において「第2回集まれ! ESD子ども広場」が行われた。これは近畿ESDコンソーシアムの事業の一環として今年度から新たに発足された企画であり、今回はその2回目に当たる。今回の企画のメインテーマは「灯す～あなたの心に、私の心に～」として、自分の身の回りにある当たり前を捉え直すというものであった。午前中は初めて出会う子どもたちの緊張をほぐすオリエンテーションと自分の身近にある当たり前を奪われるというフィールドワークを行い、午後にはその体験を活かし、防災教育へ繋げるESD勉強会を行った。災害によって自分たちの身の回りからフィールドワークで奪われた当たり前が実際に奪われてしまったら、「何が困るだろう」「どんな気持ちになるかな」「日頃からできることは何だろう」などをグループで話し合い、発表した。この活動を通して子どもたちに日頃からの様々な備えの大切さと、周りへの感謝の気持ちを持つことの大切さを学んでもらうことができた。さらに、その後に子どもたちは一人一つずつオリジナルのキャンドルホルダーを作製した。プログラムの最後のキャンドルナイトではその明かりを見つめながらその一日を振り返ったり、一緒に過ごしたグループの仲間へ感謝の気持ちを伝え合ったりした。

私はこの企画を通して三つのことを学んだ。第1に子どもたちが学ぶための企画を作る大変さ、第2に子どもたちの安全と健康を守る責任、第3に裏方としての役割についてである。

まず、第1の子どもたちが学ぶための企画を作る大変さについてである。今回、フィールドワークの企画に携わりその難しさを感じた。特に、子どもたちに考えてもらいたいねらいに繋げる発問を考えることがとても難しかった。「〇〇ならどうする?」「〇〇がなかったらどうする?」という問いかけではあまりにも抽象的であり、具体的に言い過ぎてしまうと子どもたちの気付きにはならない。返ってくる答えを予想したり、問いかける視点を変えてみたりと各ミッションポイントで子どもたちに考えてもらいたいねらいにできるだけ近づくように工夫をした。私は「〇〇なら何が困る?」という発問を提案し、自分が担当した水のミッションポイントで「1日に使える水の量が250mlと決められたら何が困



水のミッションポイントで「一日に使える水の量が250mlと決められたら何が困るかな?」と問いかけている様子

るかな?」と問いかけた。すると「お風呂に入れない、飲む分しかない、洗濯ができない」と色々な答えが返ってきた。そこから水の有限性を考え、普段の生活の中の水の使い方を見つめ直すというねらいへ繋げることができた。他のミッションポイントについてもねらいと子どもたちを繋げる発問や場面設定に工夫を凝らし、その後のESD勉強会や普段の生活に活かせるフィールドワークとなった。

第2の子どもたちの安全と健康を守る責任についてである。前回の第1回集まれ! ESD子ども広場に続き、今回も事前に何度も保健研修会が行われた。様々なリスクを想定し、それが起こった時にどう動くべきか、気を付けなければならないことは何かをしっかりと考えることができた。私は、運営の活動班サポートのメンバーと事前ワークショップを行った。保健系の学生もいたため、特にその保健関係の仕事で気を付けたいことや心がけたいことに焦点を当てて話し合った。そこで、とにかく報告・連絡・相談が重要であるという意見が何度も出た。十数人の子どもたちを預かる側の学生として、子どもたちに安全で健康な状態で学ばせるという責任を果たすためには、学生間の協力と情報の共有が不可欠であ

るということを学んだ。活動当日は、保健係をはじめとする学生がしっかりとその責任を自覚して行動したおかげで特に大きなけがもなく、子どもたちが安全に全プログラムを終えることができた。私は、これからも続くであろうこの活動は気を緩めることなく、万全の準備態勢で子どもたちと関わりたいと思う。

第3に裏方としての役割についてである。私は今回の活動で初めて運営班の一員として動くこととなった。今までは活動班で班の学生リーダーとして、企画に参加してくれていた子どもたちと直接関わっていた。学生リーダーとして動いていたときは、常に自分の班の子どもから目が離せないという状況で、自分の班につきっきりになっていた。しかし、今回は運営班に入らせてもらい、全ての班の子どもの様子を見る広い視野を得ることができた。具体的に私が取り組んだこととして、どんな活動中でも常に子どもたちの顔色を確認するために巡視しながら話しかけたり、保健係の学生たちと常にコミュニケーションを取り、健康チェックの結果で気になることや心配なことはないかなどを確認し合ったりしたことがあげられる。しかし、そこで私は活動班との距離を感じた。これは今回の私自身の大きな反省点である。私は運営班の中で活動班サポートという役割を担っていたため、活動班と運営班の架け橋となるべきであるが、活動の邪魔になってしまうことや活動班内の会話を途切れさせてしまう申し訳なさに気を遣い過ぎてしまっていた。特に午前中の活動では指示を出す以外で子どもたちと関わることができなかった。しかし、午後からの活動では体調面で少し気になる子どもがちらほらと出ていたため自分から積極的に活動班に入った。その時は少し勇気が必要であったが、子どもたちと直接話をして確認できたことや新たに気付けたことがあった。私はこの経験から、多くの子どもたちを常に見る視野の広さと積極的に関わろうとする姿勢の大切さを学ぶことができた。また、自分の中で出せた勇気とこの行動は、次にまた子どもたちと関わる場で活かしていきたいと思う。

今回は、初めて運営班に入り学ぶことが本当に多かった。しかし、だからこそ活動班との距離を感じて戸惑ってしまうという自分の弱い部分に気づくことができた。また、企画班のキャンパスフィールドワークではねらいとそれにうまく繋げる発問を考えることの難しさを学ぶことができた。ねらいをもって企画を考えている側の視点と、何も知らない学ぶ側の子どもたちの視点は大きく異なっているということに気が付いた。これは実際に自分が授業を組み立てる中でも重要になる点であると思う。また次に子どもたちと関わる機会があれば、今回の反省を活かしさらに子どもたちにとって学びの溢れる場を作る参画者になりたいと思う。

学生生活最後の「集まれ！ESD子ども広場」を振り返って

理科教育専修修士2回生 佐野 宏一郎

平成30年12月2日に「第2回集まれ！ESD子ども広場」が行われた。私はキャンドルホルダー班と2班の活動班として本活動に参画した。

本報告では、三つの観点から活動を振り返っていききたい。一つ目は、キャンドルホルダー班、二つ目は活動班、三つ目は私個人の観点からである。

一つ目は、キャンドルホルダー班の振り返りを行う。子どもとの企画で工作の時間を設けたのは、私の経験の中では初めてのことだった。そのため、製作のための時間配分や理想的な完成品の試作が難しく苦労が多かった。実際に時間配分については装飾の時間が少し足りなかったようだ。しかし、当日の子どもたちは楽しそうに作業に打ち込んでいて、何よりも班の大学生が楽しそうに作っていたのが印象的であった。プログラムが盛りだくさんだった今回の日程で、この時間が子どもだけでなく大学生にとってもリラックスできる時間であったように感じた。一方で、事前準備の段階では完成品の試作に時間を割かれてしまい、導入部分の話し合いや準備の時間を十分にとることができなかった。時間の管理や長期的に計画を立てることの重要性を改めて実感した。

二つ目は、活動班の振り返りを行う。今回の班活動では、事前のコミュニケーション不足が当日の班運営に如実に表れてしまった。リーダー長と私たちの中で班運営に対して考えに差があったことに、活動終了後までお互い気づけなかったのである。事前に食事会を行うなど、班員で時間を過ごすことはできていたが、楽しい時間だけで終わってしまっていたのが原因かもしれない。活動中は常に子どもたちと向き合っている必要があるため、一日の中で班の大学生だけで話をする時間を持つことができない。そのため、事前に班の中で役割や目標を話し合い、共有する時間がとても重要だ。当日まで子どもの性格も把握できない状況で役割分担をすることは非常に難しいが、一人ひとりの班内における立ち位置や、具体的な目標を共有する必要性を感じた。

三つ目は、私個人の振り返りを行う。私は本活動に臨むにあたり、「子どもにとって頼りがいのある大人になる」ということを目標にした。私は子どもと関わる機会の度に、子どもたちと同じ目線で関わることを重視するあまり、友達のような関係になってしまふことが多かった。子どもを保護者の方から預かっているという責任がある以上、このような態度では自分の成長に限界を感じたため、今までの自分を変えようと当日に臨んだ。同じ班の学生からは普段とは印象が違っていたという言葉をいただき、活動中も大人の自覚を意識して行動できていたのだろう。例えば、「今何をやる時間なのか」「聞く態度はできているか」などを意識した会話から、楽しいイベントの中にもメリハリをつけられるようにした。しかし、以前のようなコミュニケーションが子どもたちととれずに距離感が埋まらず、違和感があった。自分の持ち味だと思っていた親しみやすさが、大人になるという意識に押し潰されてしまっていたのだろう。自分の持ち味を保ちつつ、なりたい自分の要素を入れるためのバランスが非常に難しかった。また、ムードメーカーやまとめ役といった学生リーダー一人ひとりの役割を明確にすることで、それぞれの性格を活かし連携性を保ちながら、班を組織することが重要だと感じた。



みんなで真剣に工作中

本活動で学生生活最後の子どもとの企画が終了した。2回生から毎年関わり5年が経った。振り返ると、子どもとの接し方やESDの考え方など多くのことを学ばせてもらった。そして、多くの人との出会いがあった。この場は、私にとってESDの原点である。ここで学んだ知識や技術が他の活動でも役立った。それは今後の活動においても変わらないことだろう。今後も私自身の関心や考え方からESDを探求していきたい。



参加者全員で集合写真

初めて実行委員会として参加して

特別支援教育専修1回生 下垣内 渉平

平成30年12月2日、奈良教育大学構内で第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回のイベントでは、キャンパスフィールドワーク、ESD勉強会、キャンドルホルダー作成、キャンドルナイトの四つの企画での防災学習を通して、子どもたちが当たり前の大切さを知り、災害への備えが自分たちにも必要であることに気づき、さらに普段の生活にあふれている当たり前を見つめなおすことが目的の活動であった。また、私たちも本活動を通して教員を目指す上で必要な資質・能力を身につけることを目的として活動を行った。

今回のイベントで私は三つのことを学び、感じる事ができた。一つ目に自分から動くことの難しさと大切さ、二つ目に保健担当として子どもや学生の体調の変化に気づいて柔軟に対応していく難しさ、三つ目に事前準備の大切さである。

まず、一つ目の自分から動くことの難しさと大切さについてである。今回私は、実行委員会に所属し、当日は運営班として活動に関わっていたが、第2回集まれ！ESD子ども広場の参加が初めてということもあり、初めのころは何をすればいいのかわからず先輩方からの指示待ちになっていた。もちろん指示を受けることは悪いことではないが、自分から動くということと受け身になるということでは大きな差がある。わからないことを先輩方に聞くということも自分から動くということになると考える。自分から動くことで、来年、再来年と自分たちがイベントをつくり上げていくために、主体的に様々なことを学ぼうとすることが大切だと感じた。

次に、二つ目の保健担当として子どもや学生の体調の変化に気づいて柔軟に対応していくことの難しさについてである。上述したように、私は実行委員会に所属し、保健担当として、当日は子どもたちや学生リーダーの健康チェックを行っていた。また、活動班サポートとしての仕事もあったので、活動班に入って行って本人たちから直接体調を聞くという役割もあった。例えば、ある子どもが体調不良を訴えてきたため体温を測ったが、熱がなく様子を見ることになった。そのとき、活動班の学生リーダーと子どもたちとの空間を大切にしたいかったので、どこまで活動班に介入していいのかということに戸惑いを感じていた。しかし、そのような場合でも保健担当が子ども本人と直接コミュニケーションをとることによって、子どもの顔色やしゃべり方なども見つつ体調を確認することが大切であると感じた。次回以降は、戸惑わないように柔軟に考え対応していきたい。



みんなで気合を入れる！

最後に、三つ目の事前準備の大切さについてである。今回のイベントでは事前

に3回の保健研修を行った。具体的には、心肺蘇生の方法やAEDの使い方、学内の設置場所、応急手当の方法、緊急時の学生の行動などを研修内容として取り上げた。また、学生の危機管理に対する意識を高められるように、研修用の資料作りに取り組んだ。資料を作成する際には、保健担当である自分自身も研修内容に関する知識を身に付けておくことが大切だと感じ、また不十分なところは先輩

方からアドバイスをいただきながら準備をすることが大切だと学んだ。さらに、子どもの安全を守るために、私たち企画者側が事前にイベント中に起こりうる危険を予想し、できるだけ取り除いておく必要がある。そのため、今回のような事前研修も含めて最大限の危機管理をすることが大切であるとわかった。

私は今回のイベントで「受け身にならずに自分から動くこと」、「臨機応変に柔軟に対応すること」、「事前に準備すること」の三つのことについて学ぶことができた。今回学んだ三つのことはユネスコクラブの活動に還元できるだけでなく、ユネスコクラブ以外の活動をするときにも、一番基本的で大切になってくることだということが、今回の活動を通して痛感することができた。このようなことから、今回の活動で学んだことはこれから進んでいく自分自身の道においても非常に役に立つと思う。また、事前研修の準備を行う中で、保健関係の知識を多くつけることができた。さらに、保健担当として、言動や顔色から子どもたちの体調を正確に把握することの難しさを実感することができた。今回学んだことは、今後の活動に活かしていきたい。



朝の受付前看板



集合写真

達成感を胸に、悔しさを次に

英語教育専修2回生 下原 舞

平成30年12月2日、奈良教育大学にて第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。防災をテーマに、キャンパスフィールドワークで普段当たり前となっているものを問い直し、ESD勉強会で備えの大切さを学び、想いを込めて一人ひとりの個性溢れるキャンドルホルダーを作り、最後にこの日学んだことや感じたことをまとめるキャンドルナイトを実施した。今回は学生チーフリーダーとして、学生、子どもの様子や全体の様子を見て相談に乗ったり、声をかけたりする役割を担った。

この第2回集まれ！ESD子ども広場で学んだことを、以下の三つの観点から述べたいと思う。一つ目は時間の使い方について、二つ目は学生一人ひとりの心構えの大切さ、そして三つ目は一人ひとりを見ることの難しさである。

まず一つ目の時間の使い方についてであるが、これは当日に向けて発送物や物品、企画書などの準備をしていた時に強く感じたことである。例えば、私は事前に子どもの家に発送するしおりや保護者資料などの印刷・製本に携わったのだが、それらの添削が直前になってしまったり、印刷・製本してから間違いに気づき、変更が出てしまったりした。第1回が終わった後の反省点として、「添削が発送の直前になってしまった」という記録が残っている。今回はそれを踏まえ、しっかり計画立ててもっと前から準備ができたはずなのに、今回も同じ間違いを繰り返してしまうことがあった。原因としては、大学祭など他の行事と時期が近くて時間的余裕がなかったことや、今回は企画班が多かったためうまく連携を取るのが難しく、直前まで企画書に変更が出たことなどが考えられる。今度こそ同じ間違いを繰り返さないために、第3回からはもっと時間的に余裕を持ったスケジュールを立て、学生内でしっかり役割分担をして、準備を進めていくべきである。またこのような反省点を第3回でしっかりと活かすために、経験して実感した人間が進んで後輩たちに伝えていくべきだと感じた。

次に、二つ目の学生一人ひとりの心構えの大切さについてである。前述したように、今回は学生チーフリーダーとして参加したため、他に参加する学生全員に「学生リーダーの心得について話をし、それぞれがどのようにこの第2回集まれ！ESD子ども広場に臨みたいかを考えてもらう時間を作った。当日までに全体で集まるミーティングを何度も重ね、他の都合でミーティングに来られない人は私と昼休みや空き時間を合わせ、その時間にフォローアップをするなどして、必ず全員にこの「学生リーダーの心得」の時間を作るようにした。ここまで徹底したのには理由がある。子どもの命を預かる上で、学生一人ひとりの心構えは欠かせないものだからである。第1回とは違い、第2回の季節は冬のため熱中症の心配もなく、学外にも出ないため交通事故に巻き込まれる可能性も低い。しかし、だからといって「今回は大丈夫だろう」と油断してしまうのが一番恐ろしいことなのである。休憩時間に学生の目が行き届かず事故を起こしてしまう可能性や、活動中に子ども同士が喧嘩をしたり、屋外と屋内の寒暖差で体調を崩したりする可能性もないとは言えない。そのため、誰一人油断せず、過信せず、気を引き締めて活動に挑む必要があったのである。今回、このように徹底して全員が「学生リーダーの心得」について考える時間を持てたことは、第2回集まれ！ESD子ども広場が無事終了した一つの大きな理由だと感じた。第3回もこのように徹底して学生一人ひとりに「学生リー



やりきった後の学生集合写真

リーダーの心得」について考える時間を持てたことは、第2回集まれ！ESD子ども広場が無事終了した一つの大きな理由だと感じた。第3回もこのように徹底して学生一人ひとりに「学生リー

ダーの心得」の時間を作るようにしたい。しかし今回の「学生リーダーの心得」で伝えた内容で満足するのではなく、もっと学生一人ひとりの士気が高まるような伝え方も考え、練り直して後輩に引き継ぎたい。

そして三つ目の一人ひとりを見ることの難しさについてであるが、これは今回私が学生チーフリーダーとしての活動を通して最も強く感じたことである。当日までの準備段階でも、当日も、私は学生チーフリーダーとして参加する学生の様子をしっかり見ていなければならなかった。当日はそれに加えて、子どもの様子も見るという仕事があった。「この学生が落ち込んでいるように見えるから気にかけてあげてほしい」「あの子どもはこの学生に対して甘えすぎているので、注意して見てあげてほしい」などと他の学生に声をかけたり、「時間通りに動いているか」「子どもの対応に学生は困っていないか」「班のスペースは整理整頓されているか」など、各班の班活動の様子もしっかり見て、場合によっては注意したり声をかけたりするべき役割だった。本番の数週間前から当日は、できるだけ学生と子ども一人ひとりの顔色や様子を見て、気になることはすぐにメモを取り、自分なりに声をかけるようにしていた。しかし、実際は私よりも他の実行委員や活動班の学生リーダーの方がそのような仕事をしっかりできていたり、私よりも他の学生の方が周りを見ていたりして、私は悔しさや劣等感を感じてしまった。「他の仕事をしながらも自分よりも周りを見る力がある人がたくさんいるならば、学生チーフリーダーは自分がやるべきではなかったのではないか」と思い、当日の活動中にも関わらず学生チーフリーダーである私が落ち込んでしまったのである。それでも自分の役割はやり通さなければならないと思い、その後も学生や子ども一人ひとりを見て自分なりに動いたが、終わった後も悔しさや劣等感が残り、自分にとって一人ひとりの様子を見るのは苦手なことであり、本当に難しいと感じた。しかし、それと同時に、苦手なことに挑戦できた今回の経験やそこで得た気付きや反省点は、きっと私のこれからの活動に活かすことができるだろうと感じている。自分の弱みに向き合う機会をくれたこの第2回集まれ！ESD子ども広場に感謝したいとすら思う。私が学生チーフリーダーとして感じたことや難しかったと思うことは、第3回で学生チーフリーダーをする人に必ず共有したい。

以上の三つが、私が第2回集まれ！ESD子ども広場で感じたことである。前述したように、第2回集まれ！ESD子ども広場では、準備の段階から当日まで反省点も悔しい思いもたくさんあった。しかし、学生一人ひとりが一生懸命この企画を作り、悩み、楽しむ顔や、当日子どもたちが楽しそうに活動してくれている様子を見て、「皆で頑張れて良かった」という達成感も強く感じている。この達成感を忘れないようしっかり胸に刻み、今回の反省点や悔しさは次の活動に繋げたいと強く思う。

自分の課題と成長

英語教育専修4回生 田中 晴日

平成30年12月2日、第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。今回の活動は「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマに設定し、奈良教育大学構内を巡りながら日常生活の中にあるあたり前を見直した。その後、防災についてのESD勉強会などのプログラムを通して子どもたちと一緒に学び考える、有意義な時間を過ごすことができた。今回、私自身としては3班の班活動に学生リーダーとして加わり、またオリエンテーション班として企画に参画した。

今回の活動で学んだことを大きく二つ、特に子どもたちとの関わりに関して述べたいと思う。一つ目は叱ることについてである。子どもがしたことに対してどの基準で、学生リーダーが一貫してどのように叱るべきか、ということについて本当に学ぶことが多かった。二つ目は子どもたちへの声かけの仕方である。班の子どもたちは非常に意欲的で元気な子どもたちだったが、はじめをつけて行動させるためにどのような声かけをしていくべきだったのか、課題が残るものとなった。この二つについて以下で詳しく述べたい。

まず、一つ目の叱ることについて詳しく述べたい。叱る、ということの難しさを今回非常に痛感した。班の中に活発な子どもが多く、特にある一人の子どもがはじめをつけられなかったり、集中力を保てなかったりしてどのように声かけをするべきか非常に難しかった。その子どもが移動の際に車道へ柵を乗り越え、私が行った行為に対して叱る、ということがあった。一度目に叱った際は指導にのらず、反抗的な態度をとったままだった。その後、場所を変え改めて班員全員に対して指導を行った。その際は危険な行為であるから叱ったということ、学生リーダー間の指導が一貫しておらず結果として指導が行き違いになってしまったことへの謝罪、今後はじめをつけて話を聞く時と楽しむ時を区別してほしい、ということ述べた。学生リーダー間で指導の基準のすり合わせを行わなければ、子どもたちとの信頼に関わる。また感情に任せてただ怒るのではなく、その子どものために毅然とした態度で叱ることが大切だと学んだ。

次に、二つ目の子どもたちへの声かけの仕方について詳しく述べたい。結果として班長を務めた子どもをうまく立てることができなかった。立候補してくれた子どもを班長として周りのみんなが支えていく必要がある、という声かけを周りの子どもたちに対してすべきだったと反省している。また、班活動に入る前にどんな班にしたいのか、目標を決めさせる必要があったと思う。そうすることで、活動の中で子どもたち自身が自分たちの行動を顧みて、お互いに注意し合える関係性になったのではないかと考えた。子どもたちの自主性を限られた活動時間の中で養うために、学生リーダーとしてどういった声かけをその場その場ですべきだったのか、今後課題となる部分であると感じた。また、プログラムの中に班活動の時間があつたが、その中で子どもたちが自分自身の目標と班の目標を書く時間を設定すればより良かったのではないかと考えた。

総じて、今回の活動は自身の足りない部分を多く見つめ直す機会となった。実際に子どもたちと関わることによって、短いながらもより濃密な時間を過ごした。子どもたちと真剣に向き合ったことで今回は本当にたくさんを学び、自分のまだまだ甘い部分を痛感した。子どもに対してただの怖い人になるのではなく、友達のようになれ合うわけでもなく、一線を引いたうえで活動にあたり信頼関係を築いていくことの難しさと同時に、教員としてのやりがいを感じた。今回経験したことを体験で終わらせるのではなく、一つでも多くの学びとすることで、将来自分が教員として生徒の前に立つ際の糧にしたい。



正門前立看板

新たなことを学んだ第2回集まれ！ESD子ども広場

理科教育専修2回生 種瀬 史歩

平成30年12月2日、奈良教育大学で第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回の活動のテーマは、“ESD×防災”であった。学内フィールドワークでは、私たちが普段当たり前だと思っているものの大切さに気づき、これからの生活について考えた。ESD勉強会では、防災についての学習を行い、自分の思いや考えを言葉に表した。キャンドルホルダー作りでは、その日学んだことをキャンドルホルダーという形に表した。そのキャンドルホルダーを用いて、最後にキャンドルナイトを行い、自分の工夫した点や1日を通して学んだことを言葉にした。

今回の活動で私は三つのことを学んだ。第1に当たり前について考える大切さ、第2にみんなで企画を作る楽しさ、第3に役割分担の大切さである。

まず、第1の当たり前について考える大切さについて述べる。今回の活動は自分自身が当たり前について考え直すきっかけとなった。私は、夏休みに北海道に行ったとき大きな地震に遭い、停電を経験した。知らない土地での初めての停電という恐怖とともに、普段何気なく使っていた明かりの大切さを実感した。しかし、それから3カ月しか経っていないにも関わらず、そのとき感じたことを忘れていた。北海道での地震と、今回の活動を通して、常々“当たり前”について考えることの大切さと、必要性を強く感じた。

次に第2のみんなで企画を作る楽しさについて述べる。今回の活動の中で、私はキャンドルホルダーを作る企画の担当であった。私たちの企画が1日の中でどういう立ち位置になるのかがあやふやだったり、会議を開くごとに結論が変わったりしたこともあり、実際に企画を作るということは難しいと実感した。それとともに、同じ企画班の仲間と協力し、みんなで何度も話し合っ、企画を作っていくことがすごく楽しいと思った。

第3に、役割分担の大切さである。私は今回の活動で運営班のメンバーとしても動いた。活動班に入りたかった気持ちはとても強いが、今回運営班として動いたことで、他の学生リーダーが子どもとどう接しているかをよく見て学ぶことができた。優しく声をかけるリーダーがほとんどだが、その中で間違った行動をした子どもをきちんと叱れる学生リーダー、叱られた子どもをフォローする学生リーダー、子どもと同じ目線で今回の活動を楽しむ学生リーダー、大学生として子どもと関わる学生リーダー、それぞれの個性と思いが溢れ出ていたとともに、その班のメンバーの中で自然と役割分担がされていたように感じた。班の学生リーダーみんながみんな子どもに積極的に関わりに行くわけでもなく、客観的に班を見て意見を出す人もいた。みんなが他の人は持っていない自分のいいところを活かして班を動かしているように感じた。また、企画班でもそれぞれのできることや、得意なことを活かし企画を作っていた。1回生がしおり作成や当日の説明など子どもと直に関わる部分、2回生が企画書などを書く裏の部分、大学院生の先輩方は会議などが滞ったときに意見を出し私たちを導き支えながら盛り上げてくれるというように、知らず知らずのうちに役割分担をして、それぞれが責任を持って企画を作ることができた。第2で述べたことを含め、私は企画を作ったり班を動かしたりするのに大切なことは、それぞれの長所を活かし自分にできることを精一杯すること、苦手な部分やできないことは人に頼ることであるということ学んだ。

今回の第2回集まれ！ESD子ども広場は、自分の中で一つの区切りであった。私は、今回の活動をやり切れたと感じている。これからも今まで学んだことを活かして活動をしていきたい。



全体の集合写真

子どもから学び、子どもと学ぶ

教職開発専攻大学院 2 回生 谷内 裕也

2018 年 12 月 2 日、第 2 回「集まれ！E S D 子ども広場」が奈良教育大学にて開催された。今回の活動では、「灯す～あなたの心に、私の心に～」というテーマを設け、E S D を体験的に学ぶことができるようにプログラム内容を企画・実施した。今回は E S D の視点として防災教育を主とした企画内容だった。

私は、第 2 回「集まれ！E S D 子ども広場」で子どもとともに活動する学生リーダーとして参加した。学生リーダーとして子どもとともに過ごすことを通して学んだことや、感じたことを三つ述べたい。第 1 に子どもとともに学ぶことについて、第 2 に子どもの考えは無限大であることについて、第 3 に次世代の子ども育成のために私たちができることについてである。

第 1 の子どもとともに学ぶことについてだが、子どもは何かを学びたい、何かを得たいと願って「集まれ！E S D 子ども広場」に参加している。だからこそ、子どもは熱心にあらゆる感覚器官を使いながら学んでいると感じた。そんな一生懸命に学ぶこと、得ることをしている子どもの姿から学んだことは、答えを示すのではなく、考えさせることの大切さであった。今回の企画では、自分で考えることや何かを創ることの体験的な内容が多かった。子どもに考えさせ、一緒に考え、学ぶことを通して子どもが成長していくと本活動を終えて思った。

第 2 の子どもの考えは無限大であることについてだが、子どもは、私たち大人が気づかないような視点で物事を見ているときがある。学内でのフィールドワークのミッションや E S D 勉強会、キャンドルホルダー作成では子ども同士で考えながら活動をしていたように思う。特に、E S D 勉強会ではメモをとりながら、自分が伝えたいことを考えてしっかりと他者に伝えることができていた。それに加えて、子どもの考えるアイデアに「なるほど」と気づかされることもあった。こうしたことから、子ども一人ひとりにその人なりの考えがあり、その考えは多様な視点を持っていることがわかったので、子どもの考えは無限大であると学んだ。

第 3 の次世代の子ども育成のために私たちができることについてだが、今回の「集まれ！E S D 子ども広場」のように体験的に E S D を学ぶ機会を多く持つことが大切だと私は考えている。防災教育の視点から当たり前の生活に焦点を当てた今回、今生きる私たちにとっては不自由のない生活であると再認識できた。しかしながら、有限性のある資源を今生きる私たちの使い方によって、次世代の人が不自由な生活を送ることになるということはまだ知られておらず、意識化されていないように思う。だからこそ、これからも次世代を担って

いく子どもへ私たちは E S D の視点から未来のために私たちができることを伝えることが大切なのではないかと思う。本活動においては、学んだことを他者に伝えていくという行動は参加者の子どものみならず、創り手である私たち大人にもあてはまることだと思われる。

私は、これら三つのことを子どもとともに学び、感じた。今回だけでなく、これから出会う子どもとも学んでいきたい。子どもから学び、子どもと学ぶ、そんな喜びがいつまでも続くことを願っている。



「とも」のポーズ

私たちが大切にしてきたもの

英語教育専修修士1回生 谷垣 徹

奈良教育大学では、小中学校の児童生徒を対象に、ESD（持続可能な開発のための教育）を体験的に学び合う活動として、「集まれ！ESD子ども広場」を開催している。本活動は今年度より開始したもので、今年度は5月と12月の2回開催した。第2回である今回は、2018年12月2日に奈良教育大学において、「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマに、防災の観点を意識した企画を行った。奈良県内の小中学校10校から17名の児童生徒が集まった。また本企画は、奈良教育大学ユネスコクラブの学生が中心となって企画・運営しており、1回生から大学院生まで計38人の学生が関わった。

私は今回の活動に、運営班の統括サブリーダーとして、またメインの活動であるキャンパスフィールドワーク班の班員として関わった。本活動への参画を通しての学びを、以下の3点で振り返る。一つ目に当事者意識を持つということについて、二つ目に子どもの命を預かるということについて、三つ目に組織運営の難しさについてである。

一つ目に、当事者意識を持つということについてである。今回は「ESD×防災」の観点から、「当たり前を捉えなおす」ということを企画の軸として、それぞれの企画作りを行った。「災害」という状況を想定した活動を作るにあたって、かなりの時間を費やして話し合ったが、その中で大きな壁に直面した。それは「当事者意識」についてである。ESDでは、直面した課題を自分ごととして捉え、当事者意識を持って考え行動できる人を育てることを大切にしている。しかし、本企画に関わるほとんどの学生は「災害」に対して「当事者」ではなかった。当事者でない私たちがこのような企画を作って良いのか、分かったつもりになっているのではないのか、そんな懸念を抱いた。何度も自問自答する中で出した結論は下の通りである。当事者にはなれなくても、自分自身がそれを自覚したうえで一步でも「他人ごと」から「自分ごと」に近づけるように、また子どもにもそんなきっかけを与えられる企画を作ること、それが私たちにとってのESDではないかと考えた。今まで「当事者意識」という言葉は何度も使ってきたが、改めてその難しさ、本当の意味を考えさせられる機会であった。この気付きは、「ESD×防災」の観点から子どもに学ばせたいことをじっくり考えたからこそ得られたものである。



奪われた「当たり前」を取り戻す子どもたち

二つ目に、子どもの命を預かるということについてである。私は昨年度、本活動の前身である最後の「ESD子どもキャンプ」において代表を務めた。8月に1泊2日のキャンプを行ったが、大変な暑さでたくさんの体調不良者が出た。また、学生が参加者の子どもに誤って怪我をさせるという、あってはならない事態を起こしてしまった。キャンプに関わった学生全員で自分たちに何が足りなかったのか、時間をかけて反省し、想いを込めて再スタートしたのが「集まれ！ESD子ども広場」である。ESDの学びや楽しい思い出作りの根底には、安心・安全に活動できる、子どもの命を守る基盤がなくてはな

被災地ボランティアシンポジウム

私たちの多くは「災害」に対して「当事者」ではない。
そんな私たちが、子どもたちに災害について語っていいの。
中途半端に分かったつもりになっているのではないか。

私たちは次世代教員として、災害から目を背けてはいけない。
「子どもの命を守る」「命を守る子どもを育てる」のが教員の役目。

どれだけ頑張っても「当事者」にはなれない。
でも、「他人ごと」から一步でも「自分ごと」に近づく努力はできる。

子どもたちにも「自分ごと」への一步を踏み出させる。
それが私たちの「ESD」ではないでしょうか。

ESDの本質「当事者意識」とは？

らない。本活動で最も重視している部分である。そのため、本活動に参画する学生で何度も事前研修を行い、怪我や事故、病気などの緊急時の対応、子どもの命を預かるリーダーとしての心得などを繰り返し学ぶ機会を作った。やむを得ない理由で事前研修に参加できない学生が出てしまったこともあったが、この研修を通して命を預かる自覚を持つことが何よりも大切であるという信念を貫き、研修に参加できない学生は当日の活動から辞退してもらう決断をした。子どもの命を預かる自覚は、何物にも変えられない、私たちの譲れない信念であった。今後もずっと風化させてはならないことだ。

三つ目に、組織運営の難しさについてである。本活動に関わる学生の中核として、実行委員会を組織している。実行委員会は事前段階での学生の全体の動きを統括・管理し、また当日の運営にあたる運営班の中核を担う。私は当初、この実行委員会には所属していなかった。しかし、今回の実行委員会は経験の多くない下回生で構成されており、これまでの経験やノウハウが十分に活かされていない、組織が十分に機能していないと感じていた。このままでは活動自体が上手くいかない、学生が得られる学びも小さくなってしまうと考え、組織の立て直し

のために途中から私も実行委員会に入った。組織体制を再構築したことで学生の動きや企画の進行状況が上手く運ぶようになったと感じたが、目先の課題を解決することに主眼を置いてしまったために、全体としての運営班の組織体制にいろいろな課題を残してしまった。活動自体を成功させることはもちろん、本活動への参画を通して、学生一人ひとりの学びや成長を描ける組織でなくてはならない。自分自身、活動への参画の仕方に甘えがあったように感じ、とても後悔している。上回生として、あまり関わりすぎてはいけないという気持ちもあった。しかし、信頼することと任せっきりにすることは全く違う。いくら頼れる後輩であっても、持っている経験やノウハウには限りがある。5年間関わってきた私にも、まだまだ未熟な部分が多いと感じた。こういった学びの機会は有限である。遠慮して関わりを遠ざけているようでは、かえって後輩の可能性を狭めてしまうこともある。上回生と下回生がバランスよく関わり、確実に継承していくことのできる持続可能な組織運営が重要であると感じた。

当事者意識、子どもの命を預かる自覚、組織における学生の成長、どれも私たちが大切にしてきたものである。「ESD子どもキャンプ」の頃から関わってきて5年目、活動の形は変わっても、変わらない想いがある。しんどいことや辛いこともある。逃げ出したくなることもある。しかし毎回、新しい学びや気づきを得られる。自分を成長させてくれた、変えてくれたのはこの活動であると、自信を持って言うことができる。だからこそ、この活動がずっと続いてほしいし、関わった学生が成長できる、変わる場であってほしい。今回も多くの卒業生の先輩方が駆け付けてくださり、様々な面で活動のサポートをしてくださった。卒業生にとってもここが「帰って来る場所」になっていることを嬉しく思う。これまで関わってきたすべての学生のいろいろな想いがたくさん詰まったこの活動を、これからも大切にしていきたい。学生生活最後の一年、後悔の残らないように、精一杯の関わりをして次のステージに進みたい。



E S D勉強会での発表の様子



想いが詰まったこの場所で集合写真

外国人留学生から見た第2回「集まれ！ESD子ども広場」

教員研修留学生 チャ スンフン

平成30年12月2日、第2回「集まれ！ESD子ども広場」が開催された。「集まれ！ESD子ども広場」とは基本的にESD（持続可能な開発のための教育）を楽しく体験的に学び合う活動である。学生には子どもと関わる活動を通して、教員を目指す上で必要な資質・能力を身につける機会であり、子どもには、第2回では防災学習を通して当たり前の大切さを知り、災害への備えが自分事であると気づかせることを目的とする。今回のテーマは「灯す～あなたの心に、私の心に～」であり、フィールドワークやESD勉強会、キャンドルホルダー作りやキャンドルナイトなど全ての企画が連携して、1日中習った内容を振り返り、また共有する形式で行われた。

今回の活動を通して学んだこと、感じたことを、留学生初の参加者としての立場と、運営班の視点から3点述べたい。第1に徹底的な事前準備や当日の臨機応変な対応について、第2に単純に楽しい活動ではなく意味のある学習につながる活動内容について、第3に活動終了後、反省の時間を作り、更に改善しようとする姿についてである。

第1の徹底的な事前準備や当日の臨機応変な対応についてである。事前準備では、各班ごとに役割をきっちり分担し、真剣に悩み、改善していく姿が印象的であった。特に、ある問題についてユネスコクラブの皆で考える時間の中で、先輩は経験を生かして助言し、後輩は新鮮な意見を提示しており良かった。そして、当日には自分の役割だけにこだわらず、助け合う融通性ある行動も良かった。例えば、物品が思ったより重くて運びづらいとき他の班が助けに来たこと、また企画していた内容が現場の状況と合わなくて悩んだとき、皆が改善方法を探っていたことなどがこれに相当する。

第2の単純に楽しい活動ではなく意味のある学習につながる活動内容についてである。子どもが参加する活動を計画し、実践する中で最も困難であることは、楽しさと学びの間のバランスをとることであると思う。学ぶことに力を入れすぎると、子どもが顔をそむけてしまう。また楽しさだけに焦点を合わせると、活動の後に得ることのない単純なゲームになってしまう。だが、今回の活動では楽しい活動の裏側には子どもたちが体験的に学ぶことのできる内容がきちんと含まれていた。さらに活動の後には、ただ学生リーダーが教える形ではなく、子どもが自分で考える能力を高めながら、皆で共有する時間を通して、防災の重要性を実感することができる非常に良い機会であったと思う。

第3の活動終了後、反省の時間を作り、更に改善しようとする姿についてである。当日朝から晩までの活動を無事に終えたことに満足し、すぐ帰ることもできたが、予定していた時間を大幅に過ぎてまで徹底的に自分たちの活動を振り返り、皆で共有する時間を過ごしていたことに感心した。そして、参加者全員が報告書を書いて提出することもこの活動を軽く終わらせず真剣に振り返る機会を与え、活動の価値を高める方法であると思う。これらを通して、今回も素晴らしい活動であったが、次回にはより発展した活動ができる原動力があることを確認した。

上述したように、事前準備及び当日の融通性がありながら団結した様子、学習にきちんとつながる楽しい活動の開発、そして徹底的な振り返りの三つが調和した優れた行事に参加することができて光栄であった。また、活動の企画及び実践のほとんどを学部生が担当していたことに驚いた。今回で得た経験を生かして韓国の教育現場にもこのような活動を知らせる他、様々な場面で活用したいと思う。



活動後の団体写真（ヒロバQポーズ）

いつもとは違う環境での活動

特別支援教育専修2回生 津森 貴予

平成30年12月2日、奈良教育大学キャンパスにて第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回のテーマは、「灯す～あなたの心に、私の心に～」で、身の回りのあたりまえを見直すというものだった。フィールドワーク、ESD勉強会、キャンドルホルダー作り、キャンドルナイトなどのプログラムを通して防災について学んだ。私は、4班の学生リーダーとして子どもたちと関わった。初めてこの活動に参加し、先輩方の助けを借りながらうまく班作りをし、無事に活動を終えることができた。

今回の活動で三つのことを学んだ。一つ目は子どもとの関わり方、二つ目は防災の大切さ、三つ目は力を合わせて物事を行う大切さである。

一つ目の、子どもとの関わり方についてである。学生リーダー4人、子ども4人という比率で活動を行ったのだが、学生リーダーが班に入りすぎず、子どもの自主性を尊重できるように関わることを心掛けた。そのために、子どもたちだけで活動ができそうな場合は、学生リーダーが一步引いて活動するようにした。班の学生リーダーには、4回生や5回生もいて、その先輩方の子どもの関わりを見てたくさん学ばせてもらった。いつどんな時でも話をしたが、他人の話を聞くことのできない子どもに対して、一度きちんと子どもの目を見て話をしていた。そして、子どもが自主的に話を聞くことができそうなときは、一步引いたりして見守る姿勢を間近で見ている。次回から私もそういった関わりができるようにしたいと思った。ただ、1日を通して子どもたちに何を感じてほしいのかを明確にして、叱るべきときとそうでないときの違いを学生リーダーで事前に共有すれば、もう少し子どもにとっていい関わり方ができたのではないかと思った。

二つ目の、防災の大切さについてである。今回もフィールドワークやESD勉強会の内容は子どもにもわかりやすく、楽しく学ぶことができた。私自身、ユネスコクラブの経験が浅かったため、災害について十分な知識もなく、これまで深く考えたこともなかった。備えることの大切さは子どもだけに限らず全員が考えなければならない事柄である。それを子どもたちや参加学生とともに再確認する機会が設けられたのはとてもいいと思った。ただ、せっかく学んだものを形として家に持って帰ることができないのは少しもったいないのではないかと感じたため、次回以降何か形として持って帰ることができるものを考えるべきだと思う。

三つ目の、力を合わせて物事を行う大切さである。今回は、オリエンテーションやフィールドワークなど、班で協力する活動が多かったが、子ども同士で「これして」や「これするわ」などといった声かけができていた。初対面の子ども同士が多い中、フィールドワークにおいてたった一日でそういった声かけができていたのは、オリエンテーションでも班で協力するゲームがあったからだと思う。このように、班で協力して行う大切さを学んだことで、キャンドルホルダー作りで自分の製作に集中しすぎず、ほかの作品を見て感想を言い合い、「真似しよう」などという子ども同士の会話が作れていたのではないかと思う。

初めての活動への参加で、戸惑うこともあった。しかし、それ以上に学べたことも多く、いろいろな方々に手伝ってもらいながら無事終えることができた。先輩方の知識や方法を糧にして、今回の反省点を活かしながら、これからの活動につなげていけるようにしたい。



フィールドワークをする4班の様子

裏方で学んだこと

数学教育専修1回生 取違 隆馬

平成30年12月2日、第2回集まれ！ESD子ども広場が奈良教育大学にて開催された。今回は「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマとし、身の周りの「当たり前」について考え直し、災害などで実際にそれらが失われるとどうなるか、失われた時にどうすれば良いかについて、キャンパスフィールドワークやキャンドルホルダー作り、ESD勉強会などを通して持続可能な防災を学ぶというものであった。私は会計として本活動に参加した。

私は本活動を通して三つのことを学んだ。一つ目は事前にあらゆる事態を想定しておくことの大切さ、二つ目は当日に各自が臨機応変に動くことの重要性、三つ目は自発的に動き、かつ他人を頼ることの大切さである。

一つ目の事前にあらゆる事態を想定しておくことの大切さについてであるが、今回は保健担当を中心に、活動中に子どもが怪我をしたり体調不良を起こしたりした時の想定と対処法の確認を事前に行った。初めはここまで入念に行う必要があるのかと疑問に思っていたが、当日を無事に終了できた時には、安堵感と保健担当の学生への感謝をとても感じた。事が起きてからでは遅いということを学べて良かったと心から思った。

二つ目の当日に各自が臨機応変に動くことの重要性についてであるが、キャンパスフィールドワークで使う机が重すぎて運べなかった際、気づいた人達が一緒に運んでくれたおかげで時間内に運び終えることができた。困っている人がいたら助けてあげるのは当然という人もたくさんいるが、それができない人も多い。私は人が困っていることに気づいたり、人を手伝ったりできる力がまだ足りないと思うので、これからはそんな力も身につけていきたいと感じた。また、当日は途中まで時間が押していたのだが、実行委員のメンバーで話し合い、キャンパスフィールドワークの時間を短縮するなどを決めてから、そのタイムスケジュールに合わせて全員ができることをしたために、最後には時間内に終わらせることができた。この時に、誰か一人でも協力していなかったら間に合わなかったのではないかと思う。大人数での活動における一人ひとりの行動の重要性、そして全員が臨機応変に動いたことによる変化の大きさを実際に知ることができたのは私の中で大きな経験値に繋がったと思う。

そして三つ目の、自発的に動き、かつ他人を頼ることの大切さについてであるが、私にとっては今回が初めての子どもを相手にした責任のかかる活動だった。企画や準備の最初の段階では、慣れていないこともあり何をすれば良いかがわからず、ただ先輩方が進めていくのを聞いていただけだった。しかし、企画開始から1ヶ月ほど経った頃、予定より大幅に遅れていることが問題となってから、指示待ち人になっていた私に仕事を与えていただいた。それからは積極的に活動を行い、わからないことは質問をしているうちに、活動をしている実感が湧くようになり、やるべきことも見えてくるようになった。初めは「何もわからない私が参加するよりも任せている方が早く進む」と考えていたが、私でも力になることができるようになったことで、やらずに勝手に決めつけるのは良くないということを学び、私には積極性が足りなかったということもわかった。

本活動を通して、見えないところで頑張っている人がたくさんいることを知ったので、これからはそのような人たちの存在にも気づけるようになり、感謝できる人になりたいと思う。また、会計の仕事を通して学んだことを無駄にしないように、これからも活動していきたい。



集合写真

企画は皆で作るもの

国語教育専修1回生 中田 航輔

平成30年12月2日、奈良教育大学キャンパスにて第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。今回の企画は「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマとして、身の回りの「当たり前」を見直すことで持続可能な防災について考えるというものであった。私は実行委員会の庶務として教室予約や資料作成を担当した。当日は、学生リーダーとして小学校5年生から中学校1年生の17人の子どもたちとともにキャンパスフィールドワークやキャンドルホルダー作り、キャンドルナイトなどの活動に取り組み、楽しみながらESDと防災について学んだ。

今回の企画を通して私は次の三つのことを学んだ。第1に学生間の上下関係について、第2に子どもとの関わり方について、第3に頼ることの大切さについてである。

第1の、学生間の上下関係についてである。今回、私は学生リーダーの上下関係を子どもに見せないということを目指して活動した。理由は二つある。一つ目は、第2回集まれ！ESD子ども広場では全員が仲間であるということである。二つ目は、子どもたちにとっては大学生全員が大人であるということである。先輩であっても後輩であっても、大学生は子どもにとっての先生である。今回の活動では、子どもの前で先輩に敬語を使わずに成し遂げることができた。先輩のことも自分と対等な仲間だと考えて活動に取り組むことで、学生間の結束を固くすることができた。

第2の、子どもとの関わり方についてである。活動の中で子どもと話す際、私は子どもの名前を呼ぶことを意識した。口数が少ない子どもでも、名前を呼んでから話しかけると何かしらの反応をくれる。そのような声掛けをこまめに行うことによって子どもとの間に信頼関係を築くことができた。子どもにとって自分の名前を呼ばれるというのは嬉しいことであり、話しかけている相手が自分であると明確にわかることで安心して声掛けに応じられるようになると考えられる。

第3の、頼ることの大切さについてである。私は今回の企画に携わる中で沢山の方に手助けをしていただいた。例えば、庶務の仕事で予約しようとしていた教室が既に使用されているという問題が発生した際、先輩に事情を報告して相談した。すると、どのように動いて対応すれば良いかすぐさま教えてくださった。自分一人で問題を抱え込まずに、困ったことがあれば他の人に相談したほうが良いと実感した。活動当日も、どのように子どもたちと接すれば良いかわからずに悩む場面が多々存在した。だが、先輩方が的確に子どもたちへの声掛けをなさって良い雰囲気を作ってくれた。同じ班の学生リーダーとして非常に助かったし、勉強になった。私も先輩のような頼れる人間になりたいと強く感じた。

第2回集まれ！ESD子ども広場を通じて、企画というものは仲間全員で力を合わせて作るものであると気づいた。今後このようなイベントに取り組む際には先輩も対等な仲間であるという姿勢で関わるようにしていきたい。その上で困ったことがあれば積極的に仲間を頼っていこうと思う。



ESD勉強会で防災について話し合う様子

さらなる成長に向けて

社会科教育専修2回生 仲村 幸奈

平成30年12月2日に、奈良教育大学キャンパス内にて、第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。今回は、「灯す～あなたの心に、私の心に～」というテーマをもとに、身の回りの「当たり前」を捉え直すことから持続可能な防災について考えた。前回と違い、奈良市外の小学校からの参加もあり、小学校5年生から中学校1年生の17人という多くの子どもたちと共に活動することができた。持続可能な防災について考えるということで、災害により「当たり前」が奪われる状況について体験活動を通して考えさせ、災害の怖さや日常の大切さといったことに気付かせるという流れのプログラムであった。本活動の根幹であるESD勉強会では、もしもの時にできる備え、私たちにできることは何かという観点で子どもたちと学びを深めた。今回の活動で考えたこと、感じたことが、これからの未来に繋がる良い活動になったと感じている。

私は、本活動を通して三つのことを学んだ。第1に企画作りの難しさ、第2に後輩との関わり方、第3にみんなで創るということについてである。

まず、第1に企画作りの難しさについてである。私は、「当たり前」を奪う状況を作るキャンパスフィールドワーク班に所属していた。このフィールドワークは、直接ESD勉強会にも繋がる企画であったため、ESD勉強会と連携しながら作っていく必要があ



った。キャンパスフィールドワーク班で何度も会議を重ね、苦しみ悩みながらも作った企画内容は、初めESD勉強会の内容と噛み合わないところがあった。また、リハーサルを行うことでさらに多くの課題が見つかり、何度も企画内容の再考が必要となった。「当たり前」を奪う状況を作るうえで、子どもたちによりリアリティを感じてもらうためにはどうすればいいのか、ESDとの関連性をどこで出せばいいのかを考えることが本当に難しかった。何度も葛藤を繰り返しながら、数多くの会議を重ね、企画内容は当日直前にできあがった。私は、今回の企画作りを通して自分のESDの知識がまだまだ不十分であることを痛感した。そして、「ESD×防災」という趣旨でプログラムを作っていくことが分かっていたにも関わらず、防災の知識を身に付けることに時間を割けなかったことを後悔した。一方で、企画作りを通して学べる知識もあることを知った。経験も大切だが知識も必要であると改めて気付くことができた。これからはユネスコクラブの活動の中にあるESD実践だけでなく、ESD演習にも積極的に参加して学びをたくさん得ていきたい。また今回の企画作りは、キャンパスフィールドワーク班のメンバーがいたからこそ最後までやりきることができたと強く感じている。何かを生み出すには、一緒に作る仲間が必要であると学ぶこともできた。

次に、第2の後輩との関わり方についてである。私は、準備段階では先ほど述べたキャンパスフィールドワーク班の他に実行委員会に所属し、当日は司会進行を行った。また私は、今回のテーマ発案者の一人でもあった。しかし、実行委員会の方の忙しさに逃げ、もう一人の発案者に内容の流れや思いなどを任せてしまった。支えると言っていた自分を「口だけではないか」と何度も責めた。私の役割とは何なのかを考え、やるべきことを整理し、実行委員会での役割ももちろんのこと企画作りにも真剣に向き合った。だが、私にはまだもう一つ足りていないものがあつた。それは、後輩への配慮である。実行委

員会にいた後輩からは、「何をしたらいいのか本当に分からなかった」というような話を後から聞いた。自分の役割にしか目を向けることができず、後輩が抱えていたそのような苦しみに気付くことができなかった。先輩から「任せると放置は違う」という話をされたとき、自分の今までの行動を悔やんだ。「できるだろう」という信頼から、仕事や役割を任せつつもりになっていたが、それはただ自分の忙しさに逃げていただけであったのである。そして、先ほど述べたテーマ発案者でありながらも実行委員会の忙しさに逃げ、内容の流れや想いを任せっきりにしてしまっていたことと同じことを繰り返していただくと気付いた。優秀な後輩たちだからこそ、もったいないことをしてしまった、もっと成長させてあげられる関わり方があったのではないかと考えさせられた。本活動は終わってしまったが、私たちユネスコクラブの活動はまだたくさんある。私はユネスコクラブの代表として、後輩はもちろんのこと同回生、先輩たちみんなとの信頼関係を築けるよう、コミュニケーションをたくさん取っていききたい。私は、お互いを知るためには会話が一番だと思っている。これからは、一緒に頑張っていきたい仲間を見失わないように行動していきたい。

最後に、第3のみんなで創るということについてである。企画作りの難しさなどに関して述べたが、一人ではできなかったという場面が準備段階から当日まで何度もあった。私を含め本活動に関わった学生は、本活動だけでなく他のことでも忙しかったため、精神的に弱ってしまった学生が何人も見られた。しかし、物理的な支えはもちろんのこと、精神的な面でもユネスコクラブのメンバー全員がお互いで支え合いながら頑張ったと感じている。そうして頑張ってきた本活動だからこそ、当日も全力で楽しみながら頑張ることができ、お互いを信頼し合って頼ることができた。そうした様子から、みんなで創ることの大切さを実感した。

以上、三つのことについて本活動を通して学んだ。前回行われた第1回集まれ！ESD子ども広場から考えると、私自身成長したと胸を張って言うことができる。しかし、その分、第2回集まれ！ESD子ども広場を終えた後、自分に対して「私はまだまだだ」と痛感することがあり、より苦しんだ。だからこそ、今回学んだことや感じたことは必ず次に活かしていきたい。私自身の課題やこれから頑張りたいと思ったことなどを忘れずに、大切な仲間と共に歩んでいきたい。成長に終わりはない。みんなですらに成長していきたい。



全員で「ヒロバQ～！」

最後のESD実践、第2回集まれ！ESD子ども広場

英語教育専修4回生 野瀬 佳吾

平成30年12月2日、第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。夏季に1泊2日で行われてきたESD子どもキャンプの開催期間を見直し、過ごしやすい気候下での日帰りイベントを複数回行う形に変えることで、子どもと学生の負担を軽減できると考えられていた。しかし、12月開催となった本活動は、日中と夕方の激しい寒暖差が予想されていたとともに、前回の第1回集まれ！ESD子ども広場から6か月では、時間に余裕をもって企画することが難しく、不安が残る中での開催だったと私は思っている。

本活動で私は活動班の学生リーダーとして参加し、キャンドルナイト・ESD勉強会の企画に携わった。本活動を通して、私が学んだこと、感じたことについて二つ述べたい。第1に子どもを導くことについて、第2に教えるために必要なことについてである。



集合写真

第1の子どもを導くことについてだが、本活動の中で、子どもの主体性を尊重したい気持ちと子どもを導かなければならない状況とで葛藤があった。私が担当した班の子どもは積極的に発言したり、自分から行動したりすることができていたため、私から話を切り出したり、子どもの行動を制限したりするようなことはあまり必要ないと判断した。しかし、限られた時間の中で多くの活動をこなす必要があった本活動では、子どもの主体性を制限してでも、子どもに学んでほしいこと、気づいてほしいことへ学生が導く必要があったのではないかと、本活動を振り返って思う。子どもに学びを得てもらうためには子どもを導くことも必要であり、そのタイミングを見極めることが大切だと感じた。

第2の教えるために必要なことについてだが、ESD勉強会を企画するにあたり、先輩にならまだしも、後輩に頼りきりなところがあった。4回生で本来は後輩を支える立場にあるべきだったが、私にESDの知識がないばかりに、かえって後輩に負担をかけてしまい、反省している。それでもなんとかついていったものの、迎えた当日のESD勉強会では、悩む子どもに対して的確なアドバイスができなかった。このことから、準備段階だけで得た自分の知識では教える立場に立てないと感じた。これまでの、ただ楽しく学ぶことができればそれでいいとしてきた自分のスタイルが裏目となり、ESDについて深く考えてこなかったことが露呈したと感じている。これらの反省を通して、なにかを教える立場にある者は、その内容を教えるための知識だけでなく、それをさらに超えた知識が必要であると学んだ。

最後に、集まれ！ESD子ども広場に対する私の気持ちを述べたい。1回生からユネスコクラブに所属し、4回生まで続けることができたのは、ESD子どもキャンプや、集まれ！ESD子ども広場を本気で楽しむことができたからである。様々な問題を抱え、困難が多いESD実践ではあるが、教師を目指す者にとっても、そうではない者にとってもいい経験ができる場であると思う。この活動を、これからも続けてほしいと心から願っている。また、ユネスコクラブで先輩や後輩から受けた恩は数えきれない。本活動は、少し悔いは残るが、私が学生として参加する最後のESD実践だった。卒業後は、OBとしてこれまでに受けた恩を少しずつ返していきたいと思っている。

当たり前気づくことの大切さ

幼年教育専修1回生 東谷 未来

平成30年12月2日、奈良教育大学において第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。ESDとは、持続可能な社会の担い手を育てる教育のことである。今の暮らしをより良い形にし、これからの世代にも受けついでいけるような社会の一員になることが求められている。そして、今回のイベントでは、私たちの身の回りで当たり前になってしまっているものを捉え直すことから、これからの防災について考える場となった。

今回のイベントで、私は三つのことを学んだ。一つ目に運営側の仕事の大変さ、二つ目に日常生活で当たり前になっているものへの感謝、三つ目に一步先を読んだ行動をすることの大切さである。

一つ目の運営側の仕事の大変さについてである。私は今回が初めての参加であり、準備も当日も裏方として活動した。そのような中で、本番を成功させるためにはそれまで陰で努力してきた人がいるということを感じた。準備の段階において、資料の作成や重い荷物の運搬で人目につかない作業を経験したが、それも誰かがやらないと本番は成功しないのであり、とても重要な役割だったのだと感じた。そして、私もこれまでの学校生活の中で様々な行事を経験してきたが、先生方が計画を立てて運営してくれていたおかげで無事終えることができていたのだということを実感し、参画者の立場がいかに大変なものであるかということ学ぶ機会となった。

二つ目の日常生活で当たり前になっているものへの感謝についてである。私たちが生活する中で感謝すべきものは多くあるが、普段の生活ではそのことについて深く考える機会が少ない。しかし、今回のイベントによって感謝することの大切さを再認識できたように感じる。私はイベント当日、キャンパスフィールドワークにおいて、当たり前星人によって「人」が奪われてしまうというミッションポイントで活動していた。このミッションポイントでは、重い机を運ぶためには人手が必要であり、みんなで力を合わせれば重いものでも運べるのだということ子どもたちに学んでもらった。普段の生活では家族や友達などが自分の身の回りにいることが当たり前になってしまっており、感謝することがあまりできていない。しかし、このミッションポイントで子どもたちが「重い机を運ぶためには人手が必要だ」と相談しながら人数を増やしていく様子を見て、私自身も自分の身の回りの人々に感謝すべきであると学ぶことができた。

三つ目の一步先を読んだ行動をすることの大切さについてである。当日の動きの中で、周りをよく見ながら先を読んだ行動をすることが全体のスムーズな進行につながるのだということ学んだ。余裕を持って周りを見ることができれば、予想外の出来事にも対応できるのだということに気づくことができた。



第2回集まれ！子ども広場の集合写真

以上より、事前準備を含め、今回のイベントを通してたくさんの学びを得ることができた。ここで得た学びを今後も様々な場面で活かしていきたい。

大学生生活最後の子どもたちとの企画

特別支援教育専修4回生 藤井 愛華

平成30年12月2日、奈良教育大学で、第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。第2回にあたる今回は「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマに掲げ、「当たり前を問い直し、当たり前のかげがえのなさに気付くこと」、「災害に備えること」、そして一人ひとりとの関わりの中で、「心に温かい明りを灯すこと」を学び、感じられるような企画を目指して、学生全員で準備・運営した。私は、企画班としてオリエンテーション班に、当日は活動班の学生リーダーとして本企画に関わった。



キャンドルホルダー完成

大学生生活を通して、ユネスコクラブの

大企画で子どもたちと関わるのは4回目、最後の企画であった。本企画を通して、私は三つのことを感じた。一つ目は自分の成長について、二つ目は自分の今後の課題について、三つ目は共に企画を作った仲間についてである。

一つ目の自分の成長について詳しく述べる。まずは、企画班での成長である。子どもや学生の気持ちをほぐすためのオリエンテーションの「大切さ」や「魅力」を意識しながら企画を作った。話し合いを重ねて設定から工夫し、隙間時間で練習を積み重ね、自信のあるものを当日に用意することができた。また、ただゲームをするだけでなく、「説明の仕方」や「間の取り方」、「表情」などにもこだわりを持つことができるようになった。次に、活動班の学生リーダーとしての成長である。私は班の学生リーダーや子どもたちの顔色に気を配ったり、健康観察を丁寧に行ったり、同じ班の学生リーダーや運営の学生リーダーと情報共有することが非常に苦手であった。今回は保健担当の役割を担い、常に子どもの様子に気を配り、できる限り他の学生リーダーと情報共有するよう努めることができた。

続いて、二つ目の自分の今後の課題について詳しく述べる。私の何よりの課題は子どもたちとの関わり方、班活動のサポート力だ。本企画を通して、班作りの難しさ、子どもへの言葉掛けの難しさを非常に強く感じ、悔しさが残った。私たち学生が「積極的に名前を呼ぶこと」、「とびきりの笑顔で、明るく子どもたちを迎えること」、「子どもたちと話し、一人ひとりを知ること」、そしてその中で「子どもたちとの信頼関係を築き、子どもたちが自分をさらけ出せるようにすること」。それらができず「班」を作ることができなかった。非常に悔しく、子どもたちに対しても申し訳ない気持ちでいっぱいだった。さらに、当日、班の雰囲気打ち解けない状況を見て、私は他の班と比べて焦ってしまい、班の子どもたちの特性や良さに注目するまでに時間がかかってしまった。今後子どもたちと関わっていく中で、今回の悔しさを忘れず、子どもたちを観察し関わる力を伸ばしていきたい。

最後に、三つ目の共に企画を作った仲間について詳しく述べたい。子どもと関わる企画にはもう関与しないと決めていた中、もう一度企画に参加しないかという誘いをもらい、今回の企画に参加することができた。この企画に関わる中で、「保健の面」「子どもたちへの関わり方」「学生を引っ張るリーダーシップ」「発問を考える力」などの面において、自分がいかに未熟であり、視野が狭いかに気付くことがで

きた。また、自分が取り組めなかったことに熱心に取り組み、熟考を重ねる先輩方や後輩たちの姿から、「学びの場」を作る難しさと責任の重さを学ぶことができた。さらに、学生一人ひとりの子どもとの関わり方はそれぞれに良さがあり、嫉妬するほどの魅力を感じた。そのような仲間の姿は、今後教員となってもずっと目標として思い出し続けると思う。目標となる多くの仲間に出会えたことに心から感謝したい。

本企画の最後に、全員でテーマソングを歌っている時、4年間子どもたちとの企画が思い出されて胸がいっぱいになった。4年間悔しいことや逃げ出したことも多くあったが、同時にかけがえのない喜びや感動に出会うこともできた。この4年間で得た多くの思いを糧に、これから教員として子どもたちと学ぶことに向き合い続けていきたい。



勉強会で頭を悩ませる子どもたち

子どもたちの個性の豊かさ

教育学専修1回生 本江 美日

平成30年12月2日、奈良教育大学で第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回のイベントでは、子どもたちに防災学習を通して当たり前の大切さを知ってもらい、災害への備えが自分ごとであると気づききっかけになることを目的として、企画を行った。防災をテーマにした企画の中で、キャンパスフィールドワーク、ESD勉強会、キャンドルホルダー作成、キャンドルナイトなどを通して、子どもたちが自分自身の考えを深め、個性を出しながら楽しんでいたように感じた。

今回のイベントを通して、私は三つのことを学んだ。一つ目に企画を実践する上での準備の大切さについて、二つ目に子どもたちの個性を引き出すための工夫の難しさについて、三つ目に各企画班での連携の重要性についてである。

一つ目の企画を実践する上での準備の大切さについては、子どもたちに楽しんでもらえるように考えていくことはもちろん、安全面を考えることが非常に重要であることを実感した。事前に様々な場面を想定しておく必要があり、その対応策までをしっかりと理解しておくことが改めて大切だと思った。これまでも子どもたちと関わる機会は多くあったが、ここまで意識して安全面について考えたことは無かったため、より強い意識を持つ機会となった。

二つ目の子どもたちの個性を引き出すための工夫の難しさについてであるが、私はキャンドルホルダーの説明や作成を考えるにあたり、子どもの立場になって考えることの必要性を感じた。伝えることの難しさを改めて実感し、子どもたちそれぞれの色を出せるようにしていくためには、子どもたちが行動しやすい環境を整えたり、そのような雰囲気づくりを心がけたりすることが大切だと思った。また、学生の声かけによって、子どもたちの考えを引き出すきっかけを作ることができ、同じ子どもが発言するだけでなく、様々な子どもが意見を言える様子を見るこ



フィールドワークの情報での様子

とができた。学生の一言から子どもたちの創造力が広がることを実感した。

三つ目の各企画班での連携の重要性については、それぞれのプログラム内容を事前に理解しておくことで、本番がよりスムーズに進み、より良いものが作れるのだと感じた。キャンドルホルダーの制作やフィールドワークなどそれぞれの活動に今回のイベントの趣旨のつながりがあり、子どもたちが災害についてより深く考えられるきっかけづくりになったように感じたため、イベントの流れをしっかりと組み立てていくことが大切だと思った。

今回のイベントでは、子どもたちの笑顔を多く見ることができとても嬉しく思うとともに、私自身も楽しんで活動に参加することができた。私が思っていた以上に、子どもたちの様々な考え・工夫を見ることができ、私たち学生に必要なのは、子どもたちがより深く考えられるような声かけや雰囲気づくりだと感じた。これからの活動でも、今回のイベントで学んだことを活かして取り組んでいきたい。

イベントをつくるということ

国語教育専修3回生 丸本 まりな

平成30年12月2日、奈良教育大学キャンパスにて第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回のテーマは「灯す～あなたの心に、私の心に～」であり、身の回りの「当たり前」を見直すことで防災について考えるというイベントであった。小学校5年生から中学校1年生の子どもたち17人とともに、フィールドワークやキャンドルホルダーづくり、キャンドルナイトなどのプログラムを通して楽しく防災について学んだ。私は、前回と同様に企画の運営という立場でこのイベントに関わった。事前の研修会の徹底や様々な方の協力によって、今回のイベントも無事に終えることができた。

私は、今回のイベントを通して次の三つのことを学んだ。一つ目は危機管理について、二つ目は綿密な計画と準備の必要性について、三つ目は力を合わせて取り組むことの大切さについてである。

一つ目の、危機管理についてである。イベントを行うにあたって、今回は応急手当だけではなく危機管理にも力を入れた。事前の活動として、以下の二つのことを行った。まず、活動班ごとに危機管理について考えるワークショップである。学生一人ひとりが、事故発生時の対応だけでなく事故を未然に防ぐための対策を考えることができた。もう一つは、研修会の実施である。今回は保健担当である1回生二人が研修会の内容や構成を考え、研修会当日の進行も行った。このような事前の活動の充実によって、学生の危機管理に対する意識も高まったと考えられる。しかし、当日の健康チェックが疎かになってしまふなど、新たな課題も生まれた。今後改善していく必要がある。

二つ目の、綿密な計画と準備の必要性についてである。今回は資料の作成やしおりの印刷などを、余裕を持って行うことができなかつた。その理由として、見通しの甘さと組織体制の脆弱さが挙げられる。見通しの甘さを改善するためには、全体のスケジュールに余裕を持たせるということが必要になってくる。また、やるべきことのリストアップを抜け落ちのないように行うことが大切である。今回の組織体制の問題点は、イベントの運営を担っていた実行委員会のメンバーが1回生から3回生のみであり、イベントの運営経験が豊富な学生がいなかつたことである。上回生からの助言により組織体制を急遽変更することで、その場しのぎではあるが、なんとか持ち直して当日を迎えることができた。次回以降、組織体制をどのようにするのかも大きな課題である。

三つ目の、力を合わせて取り組むことの大切さについてである。このイベントは、学生が主体となつてみんなで作って上げてきた。運営やプログラムの企画など、担当する役割によってそれぞれ過程は異なるが、それぞれ子どもたちのために頑張つて取り組んできたと思う。イベントの企画の際には、事務的な役割と創造的な役割の両方が大切であるということ強く感じる事ができた。また、先生方や事務の方々、卒業された先輩方にも、準備や当日の様々な場面で大変お世話になった。たくさんの方々の協力により、このイベントを無事に終わらせることができて本当に良かったと思う。

私が担当するのは今回が最後になるが、良い経験をさせていただくことができた。感謝の気持ちとともに、これまで学んできたことを忘れずに、これからの学生生活に生かしていきたい。



当日の朝に学生でテーマソングを歌う様子

企画の組み立て方や子どもへの伝え方の難しさ

英語教育専修4回生 森本 珠美怜

12月2日に、奈良教育大学にて第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。今回は「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマに、キャンドルホルダー作成、キャンドルナイトなどの様々な活動を行った。私は4班の学生リーダーを務めながら、キャンパスフィールドワーク班の企画長にもチャレンジさせていただいた。

私は、当活動より学んだことが三つある。第1に学生同士、企画同士のつながりの大切さについて、第2に企画の中でESDを実践することの難しさについて、第3に子どもへの伝え方についてである。



迷子のみかちゃんを救うミッション

第1に、学生同士、企画同士のつながりの大切さについてである。当活動では、オリエンテーションから最後のキャンドルナイトまでの流れが重要視されてきた。それぞれの企画で完結してしまうのではなく、各企画の役割をしっかりと確認し、組み立てることができたように感じる。私たちキャンパスフィールドワーク班は「当たり前を問い直す」を目的として活動をつくりあげた。班内でミーティングを行うだけでなく、ESD勉強会とのすり合わせやリハーサル反省会など、多くの学生と連携を取ったことでよい企画をつくることができたと考える。また、このように1日を通したつながりがあることで、子どもたちも学びを振り返りやすく、学びをステップアップしていくことができた。今後もこのような企画を行う際には、学生同士、企画同士のつながりを大切にしていきたい。

第2に、企画の中でESDを実践することの難しさについてである。今回私は、初めてキャンパスフィールドワーク班の企画長を務めた。企画をゼロからつくりあげる中で、ESDの視点や価値観をいかにフィールドワークの中に盛り込むかというところで悩まされた。当日に実践した企画でも、なかなか予定通りに進めることができなかつたり、子どもたちに意図を理解してもらえなかつたりした。いかに子どもたちにとってわかりやすいものであるか、また楽しみながら学べるものであるかを考えながら企画をつくっていたが、現実はなかなかうまくいかないことを実感した。子どもたちの発達段階を考慮しながら企画をつくれるよう、今後もESDをさらに勉強していきたい。

第3に、子どもへの伝え方についてである。当活動の中で、一部子どもたちがあまり集中できていない場面があった。活動班の中でも仲が深まり、子どもたち同士での会話に夢中になっている様子だった。そんなときになかなか子どもに注意を引くことができず、とても苦労した。また、活動班の中でも楽しむときと真剣に活動するときのメリハリをうまくつけられずにいた。楽しい雰囲気をつくるだけでなく、叱るときはしっかりと叱ることを心掛けていたが、叱り方に悩まされることもあった。叱るときはしっかり顔を見て話をすべきだと考えていたが、そうすることでその子ども自身のモチベーションが下がってしまうように感じた。伝え方については今後も試行錯誤しながら、真剣に想いを伝えるということだけはぶれずに、考えていきたい。

大学生活最後の当活動であったが、多くのことにチャレンジし、また新しい学びを得ることができた。卒業までチャレンジ精神を忘れずに、様々な活動に取り組んでいきたい。

企画と向き合うことから得たもの

英語教育専修2回生 櫛 乃里花

平成30年12月2日、奈良教育大学にて第2回集まれ！ESD子ども広場が開催された。「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマに、持続可能な防災について考えた。

この第2回集まれ！ESD子ども広場で学んだことを、以下の三つの観点から述べたいと思う。一つ目は想定と実行のギャップ、二つ目は共に創る楽しさと喜び、そして三つ目は防災教育と向き合う困難さである。

まず一つ目の想定と実行のギャップについてであるが、今回の活動の核となった「ESD×防災」は私が提案させていただいたものだったため、プログラム構成と各企画の大まかな内容の検討も私が担当させていただいた。今回はESDによって育成したい能力の一つ「クリティカルシンキング」を重視し、子どもたちが防災の当事者としての意識を持てるよう綿密に流れを組んだ。その上で企画に取り掛かったはずだったが、内容を詰めていくうちに様々な箇所で綻びが生じた。最も難しかったのは、キャンパスフィールドワークとESD勉強会のつなぎだ。最初は両企画で扱う内容を別々のものにしていて、企画を進めていく上で、キャンパスフィールドワークでの学びがESD勉強会を含むその後のプログラムで全く活かされないことに気付いたのである。このことについて、別企画のキャンプ中で深夜だったにも関わらず、急遽会議を開いて話し合った記憶は鮮明に残っている。おかげで当日は子どもたちによりよい学びを提供できたかもしれないが、企画作りは本来そのような負担がかかるようなものであってはならない。発案のきっかけは「やってみたいな」「面白そうだな」という簡単な気持ちかもしれないが、いざ企画にして実現させるとなると、かなりの労力が必要であると実感した。このように、企画を作成する段階で既に想定と実行のギャップを感じていたが、当日は子どもたちの生の反応を見てより強く感じる事となった。特に私が担当させていただいたESD勉強会では、想定では私が子どもたちに対し一方的に話をすると考えていたが、実際は子どもたちが手を挙げて発言してくれるなど積極的な様子が見られた。また、こちらが用意した発問に対し期待以上の答えを返してくれた子どももいた。もちろんこのように嬉しい想定外があればその逆もあったが、いずれにしても子どもと関わるイベントにおいては、当日の様子をよく見ていかにかいい発言や考えを拾うかが勝負であると感じた。「企画は生もの」だということを常に肝に銘じておきたい。



ESD勉強会にて話をする筆者

二つ目の共に創る楽しさと喜びについてであるが、今回の活動は各企画が密接に関わっており、企画班同士の連携が必須であった。また物品申請や企画書、しおり作成などの面では運営班とのやり取りも重要であった。先に述べたように、テーマ発案から当日を迎えるまでは想定と実行のギャップを感じ続ける試行錯誤の日々であったが、無事に乗り越えられたのは共に創る仲間がいたからである。そもそもテーマ発案の段階から私一人ではなかった。もう一人、心から信頼を寄せる同回生と共同でテーマを考案した。あくまで自分の構想に過ぎなかったものが、その同回生との対話を重ねて徐々に形になっていくのを感じていた。テーマが採用され企画班が編成されてからは、各企画班のメンバーがそれぞれに忙しい中で必死に時間を作り、何度も話し合いや練習を重ねた。その中でテーマ発案者の私がやりたいこと・抱えている想いを何度も聞き出して、企画内容に反映できるよう考えてくれた。また、当日までの事務仕事は運営班のメンバーによって効率的に裁かれた。いくら企画内容を練っても開催場所の確保や物品管理ができなければイベントは成り立たない。運営班はまさに大黒柱であるということを改めて実

感した。以上のように、企画とは一人では決して創ることができず、仲間との対話や協働を通して形になっていくものであると学んだ。

三つ目の防災教育と向き合う困難さについてであるが、これは本イベントに向けて準備をする中で一番悩まされ、同時に一番多くの、そして価値ある学びを私に与えてくれたものだった。そもそも私が防災をテーマに選んだ理由は二つある。第1に、自分自身が防災に強い関心を抱いていたからである。第2に、この2018年が非常に自然災害の多い年であったことから、子どもたちの関心も防災に向いていると考えたからである。ESDと防災の関連性を考えるにあたっては、「当たり前を疑う」クリティカルシンキングが利用できると考えた。被災者のインタビューでよく聞くのが、「まさか自分が被災すると思っていなかった」という言葉である。自分が被災者になる想定がなければ、いざという時のための備えも十分には行えない。防災教育において難しいのは、子どもたちにいかに当事者意識を持たせるか、つまり今当たり前だと思っていることが当たり前でなくなる状況をいかにリアルに想像させるかだと私は考えた。普段生活を送る中で私たちが「当たり前」について深く考える機会はありません。しかし、当たり前が奪われる状況を想像すれば恐怖感や不安感を覚える。実際に、本イベントで子どもたちに被災した状況を想像させた際には「怖い」「悲しい」などの声が上がった。このように、当たり前だと思いついて身回りの様々な事象について捉え直すことが、それらが奪われる可能性の一つである自然災害に目を向けるきっかけとなる。同時にその思考プロセス自体がクリティカルシンキングの訓練になっているという仕組みである。このように流れを組み立てること自体は簡単であったが、いざ具体的な内容に取り組もうとしたときに戸惑いが生じた。被災者でもない自分たちが無責任に災害のことを語っていいのだろうかという迷いである。このことに対して、私は被災経験の有無にかかわらず誰もが防災について考える必要があると思ひ、被災経験のない立場からできるアプローチはないかと模索した。また、災害に関する本を読んだり、災害を体験したことのある知人に話を聞いたりするなどして知識面をカバーした。もとより私たちは防災のスペシャリストではなく、本イベントはあくまで子どもたちにとって防災に関心を持つきっかけになればよいということを見失わないよう心掛けた。このように様々な考えを巡らせる中で、私の中に一つの結論が生まれた。「当たり前を捉え直すことが防災の大切さを知るきっかけとなる」と考えていたが、逆に「防災について考えることが当たり前の大切さを教えてくれる」こともあると気付いたのである。当たり前が当たり前でないとわかったら、少なくとも今あるものを大切にする努力ができる。防災教育はいざという時に命を守るためのものだけでなく、普段の生活の中で命を輝かせてくれるものでもあるとわかった。この気付きを子どもたちと共有したくて懸命に語りかけたつもりだが、子どもたちの心にどう響いたかはわからない。自分の中で結論が出せたのは大きな成果だが、子どもたちの心を動かすような伝え方の工夫はまだまだ足りないように思う。今後も防災について学び続け、自分が感じたことを子どもたちに伝えていく取り組みがしたい。

以上が、私が本イベントを通して学んだことである。第1回集まれ！ESD子ども広場では運営班として裏方に徹し、その分次回は表に立ちたいと強く感じていた。だからこそ今回は納得のいくまで突き詰めて考え抜くことができ、自身にとって非常に思い出深いイベントとなった。



防災に対する思いを伝える

成長を感じた2回目の「集まれ！ESD子ども広場」

社会科教育専修1回生 山本 健太

平成30年12月2日(日)、奈良教育大学キャンパス内において第2回集まれ！ESD子ども広場が行われた。今回の活動では、「灯す～あなたの心に、私の心に～」をテーマに、私たちの身の回りにある「当たり前」を見直すことで防災について子どもたちと一緒に考えた。

今回のイベントで、私は三つのことを学んだ。一つ目は企画することの難しさ、二つ目に自分の係に対する責任を持つことの大切さ、三つ目に皆で作りに上げることの素晴らしさである。

一つ目の企画することの難しさについてである。今回、私は実行委員として初めて最初から関わらせていただいた。初めて参加した前回のイベントと違い、先輩方が企画した案が少しずつ形になっていく過程を間近で見ることができ、その難しさについても学ぶことができた。思いをどのように伝えれば子どもたちに伝わるのか、本当にこの案でいいのか、自分たちの企画を様々な角度から見つめ、話し合いを経て徐々に形になっていく様子を見て、次回以降も、試行錯誤しながら自分たちの思いを子どもたちに届けたいと思った。

二つ目に、自分の係に対する責任を持つことの大切さである。今回私は保健係という、子どもの健康や命に対する大切な役割を担うことになった。正直、自分で大丈夫なのだろうかという不安でいっぱいだったが、子どもの健康と命を守るために本気で考え、悩み、万が一の事態にも対応できるように全力で準備に取り組んだ。事前に学生の参加者に向けて行う保健研修会の内容もよりわかりやすい内容になるように少しずつ変えていき、自分たちなりに保健係という仕事に対しやりがいと大きな責任を感じながら仕事をこなしていった。しっかりと準備・対策を行った結果、迎えた本番では、幸い大きな事故が起こることはなかった。このようにできるだけの準備をやり切ったことは私の中で大きな自信になった。そして何より、この責任ある役割に対し本気で向き合えたことで、責任を持つとは何かということ学ぶことができた。

三つ目に、皆で作りに上げることの素晴らしさである。今回のこのイベントは、皆で作りに上げることに意味があるのだと感じた。一人で進めるのではなく、仲間と一緒に進めることで、自分が気づかなかったことを指摘してもらえたり、心が折れそうなときに先輩方が励ましてくれたりと、仲間がいることの素晴らしさをひしひしと感じた。ユネスコクラブでの仲間の存在は励みになるとともに、自分が成長するきっかけをくれる。今回はそのことを強く感じる事ができた。

今回、私はこのイベントを通して、前回よりもさらに多くのことを学ぶことができた。思えば前回のイベントでは受け身になってしまっていたが、今回は実行委員という役割を与えられたことによって、また自分から積極的に動くことによって自分にとってより有意義な活動内容にすることができたと感じている。ユネスコクラブでの様々な活動を通して、そのたびに大きな成長を感じる事ができている。今回もまた、さらに自分を変える事ができたと感じている。最高の思い出と経験を財産に、これからもいろいろな活動に励みたい。これからの自分がどこまで成長できるか楽しみだ。



本番の様子

2018年度 近畿ESDコンソーシアム
集まれ！ESD子ども広場 活動報告書

2019年3月31日

国立大学法人奈良教育大学

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学

教育研究支援課

E-mail k-soumu@nara-edu.ac.jp

Tel 0742-27-9367

Fax 0742-27-9147